東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告３

竹　並　下　ノ　原　遺　跡

福岡県行橋市南泉２・４丁目所在遺跡の調査

行橋市文化財調査報告書　第 55 集

２０１５

行橋市教育委員会

竹並下ノ原遺跡全景（西から）

竹並下ノ原遺跡Ｉ区全景（上が北西）

ヒメコ塚古墳と八景山ニュータウン（竹並遺跡）
（北東から）

竹並下ノ原遺跡Ⅱ区全景（東から）

序

本書は、平成 22 年度に東九州自動車道建設工事に先立ち実施しました、竹並下ノ原遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する泉地区は京都平野中央部の低台地上にあたり、近辺には、竹並遺跡や福原長者原遺跡など多くの遺跡が知られています。今回の調査では縄文時代から江戸時代にわたる、多種多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、西日本高速道路株式会社 九州支社 福岡工事事務所、福岡県教育委員会、地元竹並区、柳井田区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月

行橋市教育委員会
教育長職務代理者
教育部長　坪根 義光

例　言

１．　本書は、福岡県行橋市南泉２丁目691、同４丁目635ほかに所在する竹並下ノ原遺跡の発掘調査報告書である。東九州自動車道建設工事に伴い、西日本高速道路株式会社 九州支社 福岡工事事務所の委託事業として、平成22年度に発掘調査を実施した。

２．　調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織は第１章第２節に記す。

３．　遺構実測は伊藤昌広、今村美香、佐藤愛子、島木邦子、工藤祥子、田中すま子、谷口貞子、中島裕子、古木初子、山口佳織、山口裕平、渡邊知栄が行った。

４．　遺構写真は伊藤、山口裕平が撮影した。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。

５．　遺構図の整理は松本まゆみ、山口裕平が行った。

６．　遺物の水洗・註記・接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。

７．　遺物の実測は鎌田尚子、定野美津子、松本、山口裕平が行った。また一部の作業を株式会社アーキジオに委託した。

８．　遺物写真は山口裕平が撮影した。

９．　遺構・遺物図面の浄書は松尾留衣、松本が行った。

１０．本書に使用した遺構の略号はSI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、SA（柵）、SP（柱穴）である。

１１．本書に使用した方位は、日本測地系（旧座標）による座標北である。

１２．報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。

１３．第５章の執筆はパリノ・サーヴェイ株式会社が行い、その他の執筆及び編集は、松尾、松本の協力を得て山口裕平が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　竹並下ノ原遺跡 …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　Ⅰ区の調査 …… 7
　第３節　Ⅱ区の調査 …… 45
第４章　結語 …… 61
第５章　付編 …… 62

図 版 目 次

巻頭図版１　竹並下ノ原遺跡全景（西から）
巻頭図版２　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区全景（上が北西）
巻頭図版３　ヒメコ塚古墳と八景山ニュータウン（竹並遺跡）（北東から）
巻頭図版４　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区全景（東から）
図　版　1　竹並下ノ原遺跡の位置
図　版　2　Ⅰ区西側（上が北）
図　版　3　Ⅰ区西側反転後（上が南西）
図　版　4　Ⅰ区東側（上が北西）
図　版　5　Ⅰ区東側反転後（上が南西）
図　版　6　Ⅰ区からⅡ区を望む（東から）
図　版　7　１．SI002（上が南東）
　２．SI002（南から）
図　版　8　１．SI001（北から）
　２．SI003（西から）
　３．SI004（南から）
図　版　9　１．SI004 土器出土状況（北から）
　２．SI005（南から）
　３．SI006（南から）
図　版　10　１．SI007（西から）
　２．SI009（南東から）
　３．SI009 カマド土器出土状況（南東から）
図　版　11　１．SB010（北から）
　２．SB011（東から）
　３．SK013（西から）
図　版　12　１．SK016（東から）
　２．SK017（南東から）
　３．SK020（東から）
図　版　13　１．SK022（東から）
　２．SK023（南から）
　３．SK024（南から）
図　版　14　１．SK026（北から）
　２．SK026（北から）
　３．SK027（西から）
図　版　15　１．SK028（北から）
　２．SK029（南東から）
　３．SK030（西から）
図　版　16　１．SK031（西から）
　２．SK032（西から）
　３．SK033（東から）
図　版　17　１．SK034（南から）
　２．SK035（北西から）
　３．SK036 土器出土状況
図　版　18　１．SK036（南から）
　２．SK037（南から）
　３．SK038（東から）
図　版　19　１．SK040（東から）
　２．SK044（北東から）
　３．SK045（北から）
図　版　20　１．SK046（北から）
　２．SD050 土層
　３．SE053（北から）

図　版　21　　Ⅰ区出土遺物１
図　版　22　　Ⅰ区出土遺物２
図　版　23　　Ⅰ区出土遺物３
図　版　24　　Ⅰ区出土遺物４
図　版　25　　Ⅰ区出土遺物５
図　版　26　　Ⅰ区出土遺物６
図　版　27　　Ⅱ区全景（上が西）
図　版　28　１．Ⅱ区東側（上が西）
　　２．Ⅱ区全景（東から）
図　版　29　１．Ⅱ区北側（西から）
　　２．Ⅱ区東側（北西から）
図　版　30　１．SI001（南西から）
　　２．SI002（南西から）
　　３．SB003 検出状況（南から）
図　版　31　１．SB003（南から）
　　２．SK004（東から）
　　３．SD005（西から）
図　版　32　１．SD005 東側（北西から）
　　２．SD005 ベルトＡ断面（西から）
　　３．SD005 ベルトＢ断面（西から）
図　版　33　１．SD005 ベルトＣ断面（西から）
　　２．SD005 ベルトＤ断面（西から）
　　３．SD005 土器出土状況
図　版　34　１．SD006 西側（東から）
　　２．SD006 東側（西から）
　　３．SD006 ベルトＡ断面（西から）
図　版　35　１．SD006 ベルトＢ断面（西から）
　　２．SD007 北壁土層（南から）
　　３．SD008（東から）
図　版　36　１．SD008 ベルト断面（北西から）
　　２．SD008 北壁土層（南から）
　　３．SD009（西から）
図　版　37　１．SD010（南東から）
　　２．SA011（南東から）
　　３．調査区土層
図　版　38　　Ⅱ区出土遺物１
図　版　39　　Ⅱ区出土遺物２
図　版　40　　Ⅱ区出土遺物３

挿 図 目 次

第　1　図　竹並下ノ原遺跡調査区域（1/5,000）
第　2　図　東九州自動車道路線および調査地点位置（1/100,000）
第　3　図　竹並下ノ原遺跡の位置（1/2,000,000）
第　4　図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第　5　図　Ⅰ区遺構配置図（1/400）
第　6　図　Ⅰ区 SI001 実測図（1/60）
第　7　図　Ⅰ区出土土器実測図１（1/3）
第　8　図　Ⅰ区 SI002 実測図（1/80）
第　9　図　Ⅰ区出土土器実測図２（1/3）
第　10　図　Ⅰ区出土土器実測図３（1/3）
第　11　図　Ⅰ区 SI003・004 実測図（1/60）
第　12　図　Ⅰ区出土土器実測図４（1/3）
第　13　図　Ⅰ区 SI005・006 実測図（1/60）
第　14　図　Ⅰ区 SI007・008・009 実測図（1/60）
第　15　図　Ⅰ区出土土器実測図５（1/3）
第　16　図　Ⅰ区 SB010・011・012 実測図（1/60）
第　17　図　Ⅰ区 SK013・014・015・016・017・018 実測図（1/60）
第　18　図　Ⅰ区出土土器実測図６（1/3）
第　19　図　Ⅰ区 SK019・020・021・022・023・024 実測図（1/60）
第　20　図　Ⅰ区 SK025・026・027・028・029・030・031・032 実測図（1/60）
第　21　図　Ⅰ区出土土器実測図７（1/3）
第　22　図　Ⅰ区出土土器実測図８（1/3）
第　23　図　Ⅰ区 SK033・034・035・036・037・038・039・040・041・042 実測図（1/60）
第　24　図　Ⅰ区出土土器実測図９（1/3）
第　25　図　Ⅰ区出土土器実測図 10（1/3・1・2）
第　26　図　Ⅰ区 SK043・044・045・046 実測図（1/60）
第　27　図　Ⅰ区出土土器実測図 11（1/3・1/2）
第　28　図　Ⅰ区 SE053 実測図（1/60）
第　29　図　Ⅰ区出土土器実測図 12（1/3）
第　30　図　Ⅰ区出土石器実測図１（2/3）
第　31　図　Ⅰ区出土石器実測図２（2/3）
第　32　図　Ⅰ区出土石器実測図３（2/3）
第　33　図　Ⅰ区出土石器実測図４（2/3）
第　34　図　Ⅰ区出土石器実測図５（2/3）
第　35　図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）
第　36　図　Ⅱ区 SI001・002 実測図（1/60）
第　37　図　Ⅱ区出土土器実測図１（1/3）
第　38　図　Ⅱ区 SB003 実測図（1/60）
第　39　図　Ⅱ区出土土器実測図２（1/3）
第　40　図　Ⅱ区 SD005・006・007・008 土層断面実測図（1/60）
第　41　図　Ⅱ区出土土器実測図３（1/3）

第　42　図　　Ⅱ区出土土器実測図４（1/3）
第　43　図　　Ⅱ区出土土器実測図５（1/3）
第　44　図　　Ⅱ区出土土器実測図６（1/3）
第　45　図　　Ⅱ区 SA011 実測図（1/60）
第　46　図　　Ⅱ区採集土器・石器実測図（1/3･2/3）
第　47　図　　暦年較正結果の比較
第　48　図　　木材（１）
第　49　図　　炭化材（２）
第　50　図　　炭化材（３）

表 目 次

表　　1　　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧
表　　2　　Ⅰ区出土遺物観察表１
表　　3　　Ⅰ区出土遺物観察表２
表　　4　　Ⅰ区出土遺物観察表３
表　　5　　Ⅰ区出土遺物観察表４
表　　6　　Ⅰ区出土遺物観察表５
表　　7　　Ⅱ区出土遺物観察表１
表　　8　　Ⅱ区出土遺物観察表２
表　　9　　Ⅱ区出土遺物観察表３
表　　10　　放射性炭素年代測定結果
表　　11　　樹種同定結果

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は、東九州自動車道の建設工事（第 32 地点）に伴い発掘調査をした遺跡である。本調査に先立つ平成 21 年 10 月 15・16 日及び平成 22 年 5 月 11 ～ 13 日にかけて試掘調査を行った結果、広範囲に埋蔵文化財を確認したため、行橋市教育委員会は福岡県教育委員会、事業主体である西日本高速道路株式会社 九州支社 福岡工事事務所と協議を行い、平成 22 年度に高速道路敷になる 13,888㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査区域は全長約 350 mと長く国道 496 号線を挟むため、国道の東側をⅠ区（担当：伊藤昌広）、西側をⅡ区（同：山口裕平）と区切って調査を行った。なお調査区内には生活道路や各戸への入口などもあったため、実際に発掘調査を行った面積は 10,990㎡（Ⅰ区:7,870㎡、Ⅱ区:3,120㎡）である。なお当地は『福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡編）』には周知遺跡として大車遺跡とあるが、「大車」という小字名の地点が不明であり、発掘調査対象地の大部分が字「下ノ原」であることから、竹並下ノ原遺跡（遺跡番号 14075005）に名称変更した。

発掘調査は平成 22 年 6 月 1 日、東側のⅠ区より重機による表土剥ぎを開始した。7 月 1 日からは人力による掘り下げを始めた。Ⅱ区は 7 月 6 日より表土剥ぎを開始し、8 月 9 日より発掘作業員を投入した。遺構の掘り下げと併行して調査区内に測量用の 10m グリッドを設定し、縮尺 100 分の 1 で平板図（遺構配置図）、同 20 分の 1 で遺構実測図を作成していった。遺構の写真撮影は 35mm 白黒フィルム、35mm カラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用し、調査の進展に従い順次行った。Ⅱ区の調査は 10 月末に終了したがⅠ区は年をまたいで年度いっぱいの 3 月 31 日に現地における発掘調査を終了した。なお調査終了間近の 3 月 19 日には現地説明会を行った。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、調査担当者の伊藤と山口の下で平成 23 年度より断続的に行ってきた。平成 24 年度にはⅠ区にあったヒメコ塚古墳の整理を本格化させ調査報告書を刊行する準備を進めてきたが、年度途中で伊藤が急逝したため刊行を平成 25 年度に延ばし、残務を小川秀樹が引き継ぎ刊行を行った。その後、竹並下ノ原遺跡Ⅰ区の整理を山口が引き継ぐこととなり、平成 26 年度にⅡ区の整理作業と併せて行い、本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。

第２節　調査体制

現地調査（平成 22 年度）

総　括	行橋市教育委員会	教育長	徳永 文晤（～ 10 月 8 日）
		教育長	山田 英俊（10 月 9 日～）
		教育部長	三角 正純
調　査		教育部 文化課長	酒井 和宣
		教育部 文化課長補佐兼文化財保護係長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	伊藤 昌広（調査担当）
		教育部 文化課 文化財保護係	中原　博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（調査担当）
庶　務		教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋 智恵子
		教育部 文化課 文化振興係	北田 千砂子

発掘調査作業員

赤波江静代　有松 優子　今村 美香　岩崎 末子　大石 由香　大谷 睦美　大地美津代
大村 英幸　小副川若子　小野田トミヱ　角田 義彦　木村 守雄　清原 敏伸　工藤 祥子

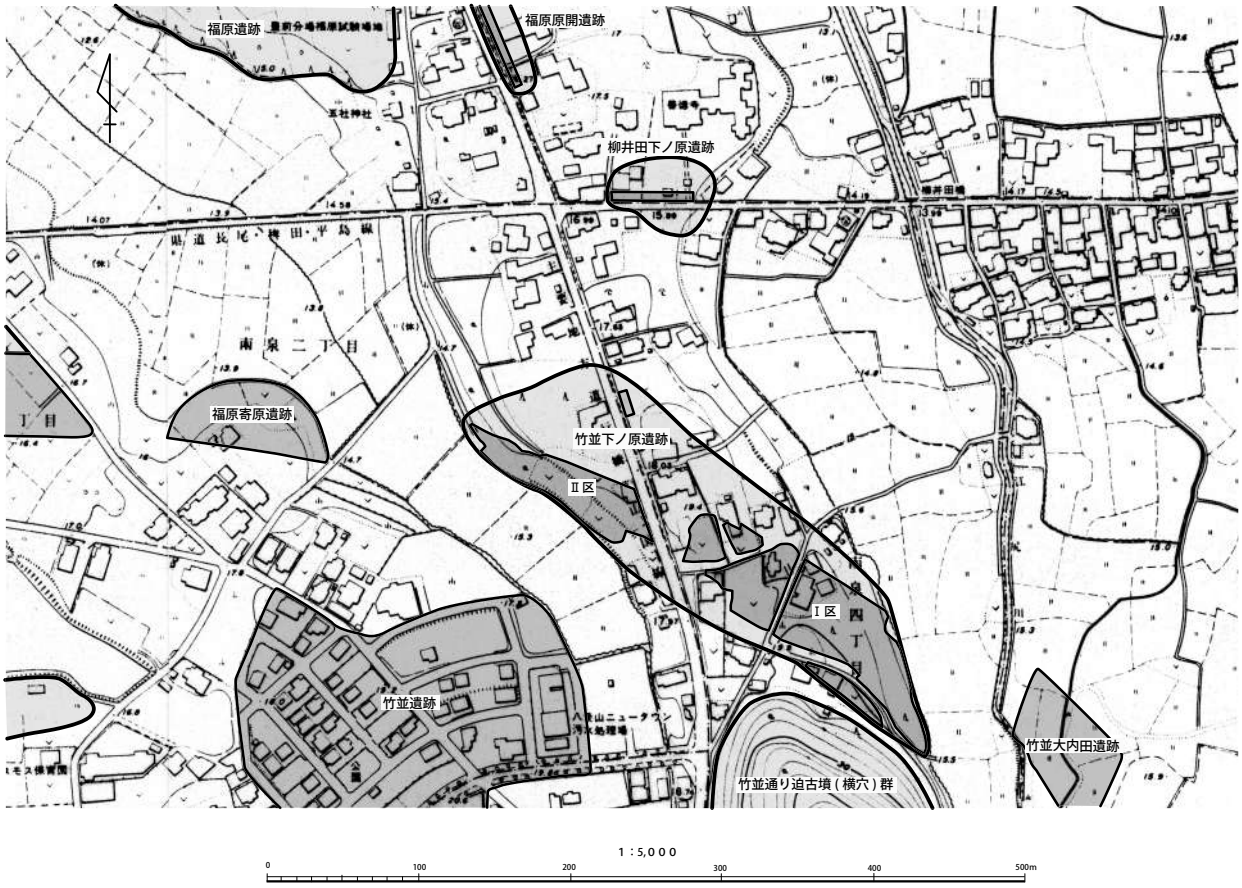
倉智万数雄　小渕八寿子　小見 義治　佐藤 愛子　品川 宗平　柴村 孝子　島木 邦子
嶋田 和子　白川 豊　新保 初枝　末永 修崇　鈴木 政信　瀬戸 早苗　武田 加苗
田中すま子　谷口 貞子　豊田九州己　中島 裕子　長谷川進一　浜内 房義　廣津 郁子
古木 初子　松尾 公子　松下 節子　丸山 眞治　蓑干カズノ　宮崎 和子　宮崎 弘子
山口 佳織　山本 要二　吉田 幸子　渡邊 知栄

報告書作成（平成 26 年度）

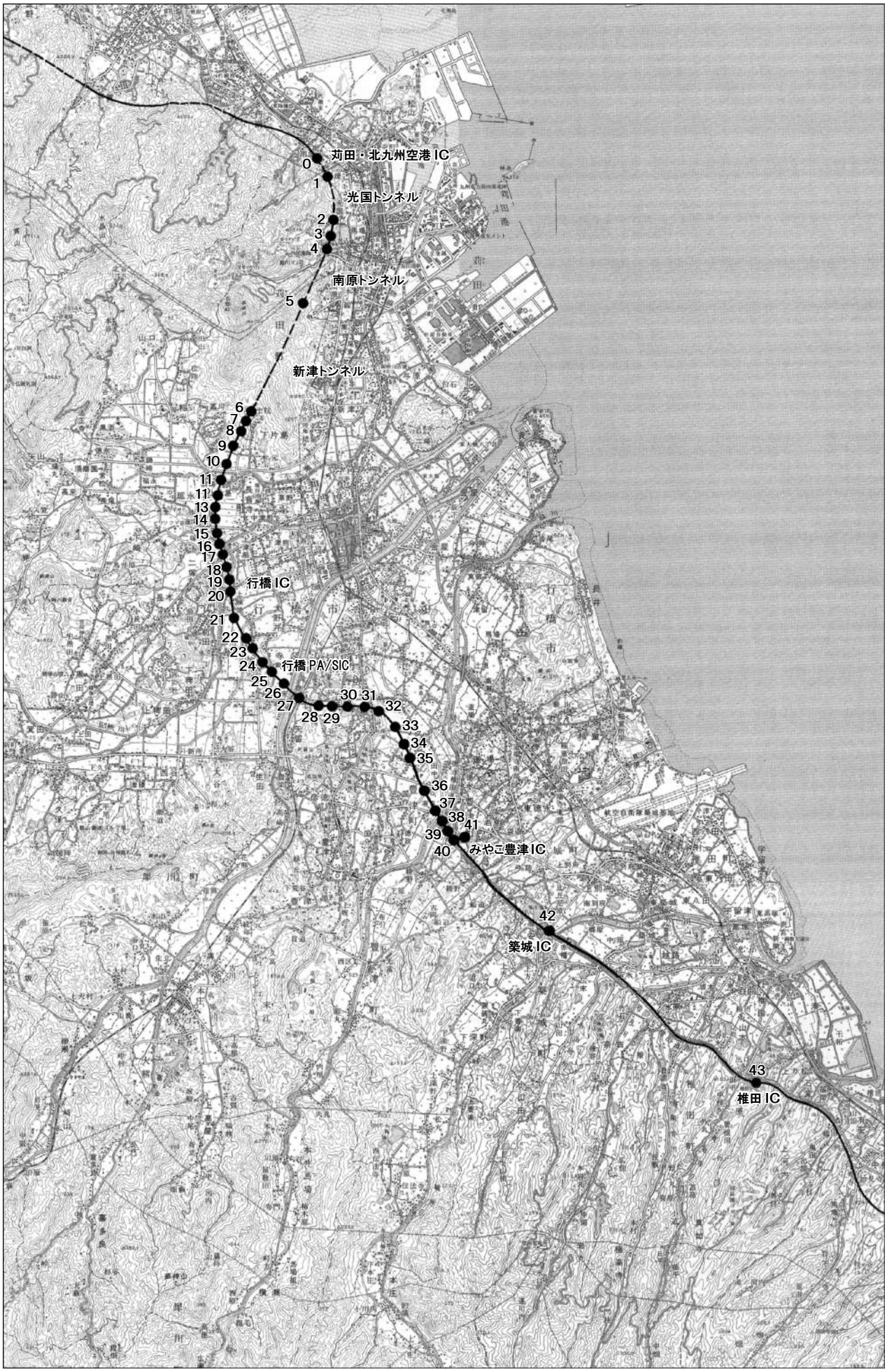
総　括	行橋市教育委員会	教育長	山田 英俊（～ 10 月 8 日）
		教育部長	灰田 利明（～ 9 月 30 日）
		教育部長	坪根 義光（10 月 1 日～）
調　査		教育部 文化課長	小川 秀樹（～ 9 月 30 日）
		教育部 文化課長	亀田 秀雄（10 月 1 日～）
		教育部 文化課 参事兼文化財保護係長	小川 秀樹（10 月 1 日～）
		教育部 文化課 文化財保護係長	辛嶋千恵子（～ 9 月 30 日）
		教育部 文化課 文化財保護係	中原　博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平　（報告書担当）
庶　務		教育部 文化課 文化振興係長	髙尾信次郎
		教育部 文化課 文化振興係	森　雅代
		教育部 文化課 文化振興係	入生 佳奈
		教育部 文化課 文化振興係	田坂　彩

整理作業員

枝吉 恵美　奥野 康代　鎌田 尚子　佐々木豊子　定野美津子　松尾 留衣　松本まゆみ



第 1 図　竹並下ノ原遺跡調査区域（1/5.000）



第２図　東九州自動車道路線および調査地点位置（1/100,000）

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積(㎡)	試掘年度	調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4,000	H13･14	H15	1集	
1	福　岡		京都郡苅田町大字雨窪	1,700	H22					遺跡なし
2	福　岡		京都郡苅田町大字提	4,500	H21					
3	福　岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13,100	H16・20・21	1,200		H24	4集	
4	福　岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35,300	H18･19	3,900	H19･20	H24	4集	
5	福　岡		京都郡苅田町大字集	32,100	H21･22					遺跡なし
6	福　岡		京都郡苅田町大字下片島	30,600	H18・20・21					
7	福　岡		京都郡苅田町大字下片島	10,700	H18					遺跡なし
8	福　岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24,200	H20～22	5,000	H19	H24	5集	
9	福　岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29,600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福　岡		京都郡苅田町大字上片島	21,500	H20					遺跡なし
11	福　岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18,200	H20	8,440	H21～23	H24	5集	
12	福　岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7,500	H20	6,180	H21	H24	5集	
13	福　岡		行橋市延永	12,200	H19					遺跡なし
14	福　岡		行橋市延永	17,500	H19					遺跡なし
15	福　岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24,810	H22	24,810	H19～23	H23～26	2・9・11・18集	
16	福　岡		行橋市吉国	4,400	H20					遺跡なし
17	福　岡		行橋市吉国	5,100	H19					遺跡なし
18	福　岡		行橋市吉国・下検地	82,500	H18・19					遺跡なし
19	福　岡		行橋市下検地	12,710	H22					遺跡なし
20	福　岡		行橋市上検地・下検地	20,650	H22					遺跡なし
21	福　岡		行橋市上検地・中川・大野井	19,190	H22					遺跡なし
22	福　岡		行橋市大野井・宝山	4,820	H20・22					遺跡なし
23	福　岡		行橋市宝山	10,050	H20					遺跡なし
24	福　岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16,100	H20	6,360	H21・22	H25	12集	
25	福　岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46,620	H20･21	31,550	H22～	H25	12集	
26	福　岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14,710	H20･21	2,900	H22	H25	12集	
27	福　岡		行橋市流末	840						遺跡なし
28	福　岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18,590	H20	12,750	H21～23	H26	19集	
29	福　岡		行橋市矢留・南泉	7,000	H20･22					遺跡なし
30	福　岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18,774	H19･22	16,574	H22～	H25	13集	
31	福　岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10,950	H21	3,300	H21	H25	13集	
32	福　岡	竹並下ノ原遺跡 ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13,888	H21・22	10,990	H22	H25･26	行橋市55集(本冊) 行橋市49集	H22行橋市による調査
33	福　岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17,636	H20・21	4,560	H21	H24	6集	
34	福　岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15,013	H20	10,547	H21	H23	行橋市45集	H21行橋市による調査
35	福　岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42,940	H20～22	3,420	H22・23	H24	6集	
36	福　岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29,491	H20～22	29,491	H21～23	H25･26	14・20集	H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福　岡		京都郡みやこ町有久	1,110	H21					遺跡なし
38	福　岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1,132	H21	1,132	H22	H25	10集	
39	福　岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8,218	H21・22	5,918	H21～23	H26	17集	H22呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福　岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町呰見・下原	45,510	H19～21	22,763	H20～22	H23･25･26	3・10・17集	
41	福　岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5,080	H21	3,580	H21・22	H25	10集	
42	福　岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26,000	H21・22	26,000	H22	H26	20集	一部築上町による調査
43	福　岡		築上郡築上町小原	24,359	H21					遺跡なし

表１　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第３図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口 72,833 人（平成 26 年 12 月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は京都平野のほぼ中央の中位段丘、標高 15 ～ 19 m前後に所在する。

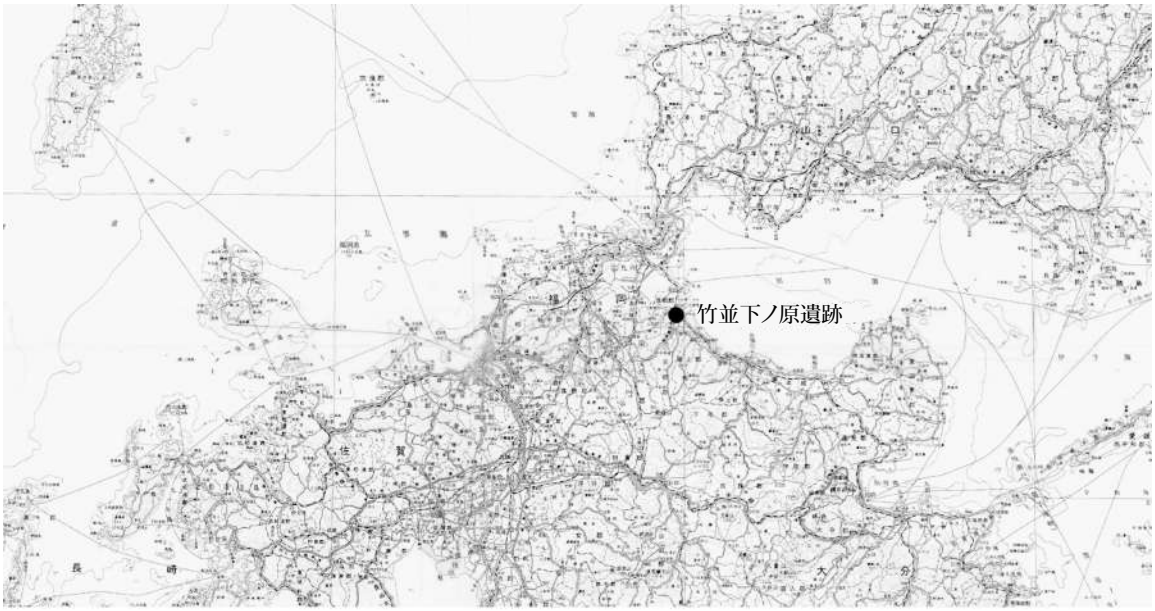
第２節　歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ３万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡Ｃ区で該期の石器および礫群が見つかっている。

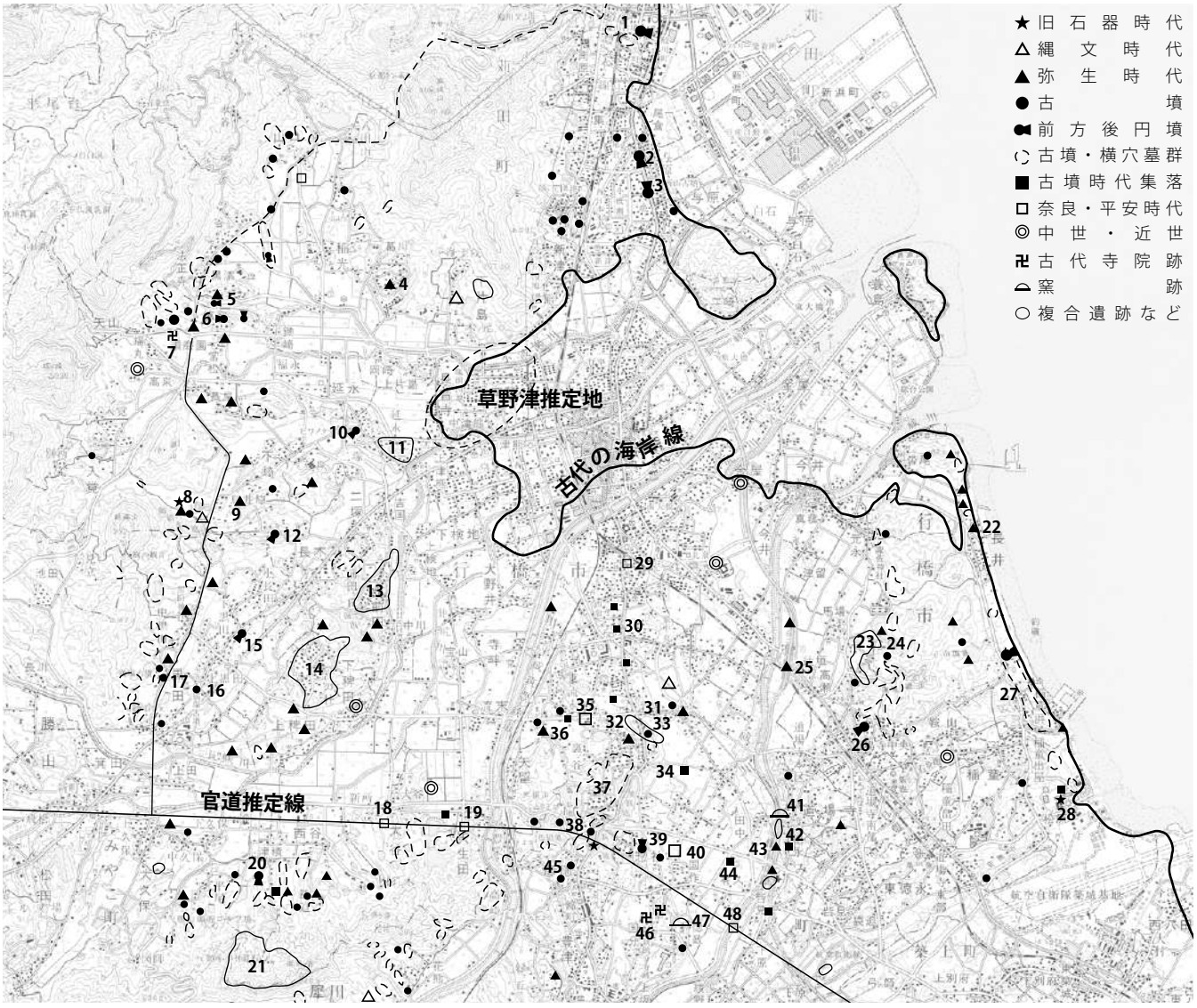
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約 4800 年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、蓑島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第４図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型文土器、後期の西平式系土器など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500 年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

３世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部



第３図　竹並下ノ原遺跡の位置（1/2,000,000）



1. 石塚山古墳　2. 番塚古墳　3. 御所山古墳　4. 葛川遺跡　5. 黒添メウト塚古墳　6. 徳永丸山古墳
7. 椿市廃寺　8. 入覚大原遺跡　9. 下崎丸山遺跡　10. ビワノクマ古墳　11. 延永ヤヨミ園遺跡　12. 八雷古墳
13. 前田山遺跡　14. 下稗田遺跡　15. 庄屋塚古墳　16. 橘塚古墳　17. 綾塚古墳　18. 大谷車堀遺跡
19. 天生田大池遺跡　20. 片峰1号墳　21. 御所ヶ谷神籠石　22. 長井遺跡　23. 代遺跡　24. 馬場代2号墳
25. 辻垣遺跡　26. 隼人塚古墳　27. 稲童古墳群　28. 渡築紫遺跡　29. 崎野遺跡　30. 福富小畑遺跡
31. 侍塚遺跡　32. **竹並下ノ原遺跡**　33. ヒメコ塚古墳　34. 鬼熊遺跡　35. 福原長者原遺跡　36. 矢留堂ノ前遺跡
37. 竹並遺跡　38. 甲塚方墳　39. 惣社古墳　40. 豊前国府跡　41. 居屋敷窯跡　42. 鋤先遺跡
43. 徳永川ノ上遺跡　44. 京ヶ辻遺跡　45. 彦徳甲塚古墳　46. 豊前国分寺跡　47. 徳政瓦窯跡　48. 砦見樋ノ口遺跡

第４図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）

に移動し、市内では八雷古墳が６世紀前半の首長墓と考えられる。７世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は東西幅 150 mの区域をもつ８世紀前半の官衙遺跡で、奈良時代における豊前国府の可能性が指摘されている。

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけて営まれた複合遺跡である。

第３章　竹並下ノ原遺跡

第１節　調査の概要

竹並下ノ原遺跡は、行橋市南泉２丁目 691、同 ４丁目 635 ほかに所在する。標高 15 ～ 19m 前後の中位段丘に立地する。調査面積は 10,990㎡（Ⅰ区：7,870㎡、Ⅱ区：3,120㎡）である。

調査の結果、縄文時代から江戸時代の遺跡を検出した。遺構には竪穴建物 11 軒をはじめとして、掘立柱建物４棟、土坑や溝、井戸、多数の柱穴などがあり、遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石鏃、石斧、石庖丁などがある。遺構検出面（地山）は橙色を呈し、砂礫を多く含んでいる。

第２節　Ⅰ区の調査

（１）竪穴建物

SI001（第６・７図、図版８・21）

調査区北側で確認した。北側から東側の一部が調査区外に伸びているが、検出できた範囲で南北壁長 2.6 m、東西壁長 2.7 mを測る。床面上では直径 50 ～ 60cm で規則的に配置された４つの柱穴を確認した。このことから４本主柱穴をもつ一辺約 3.0m の方形竪穴建物に復元できる。壁の立ち上がりは 20cm 程残っていた。壁際には幅 20 ～ 30cm、深さ 10cm の壁溝がめぐる。土師器、須恵器が出土した。

土師器　１は坏蓋。口縁部の小片である。

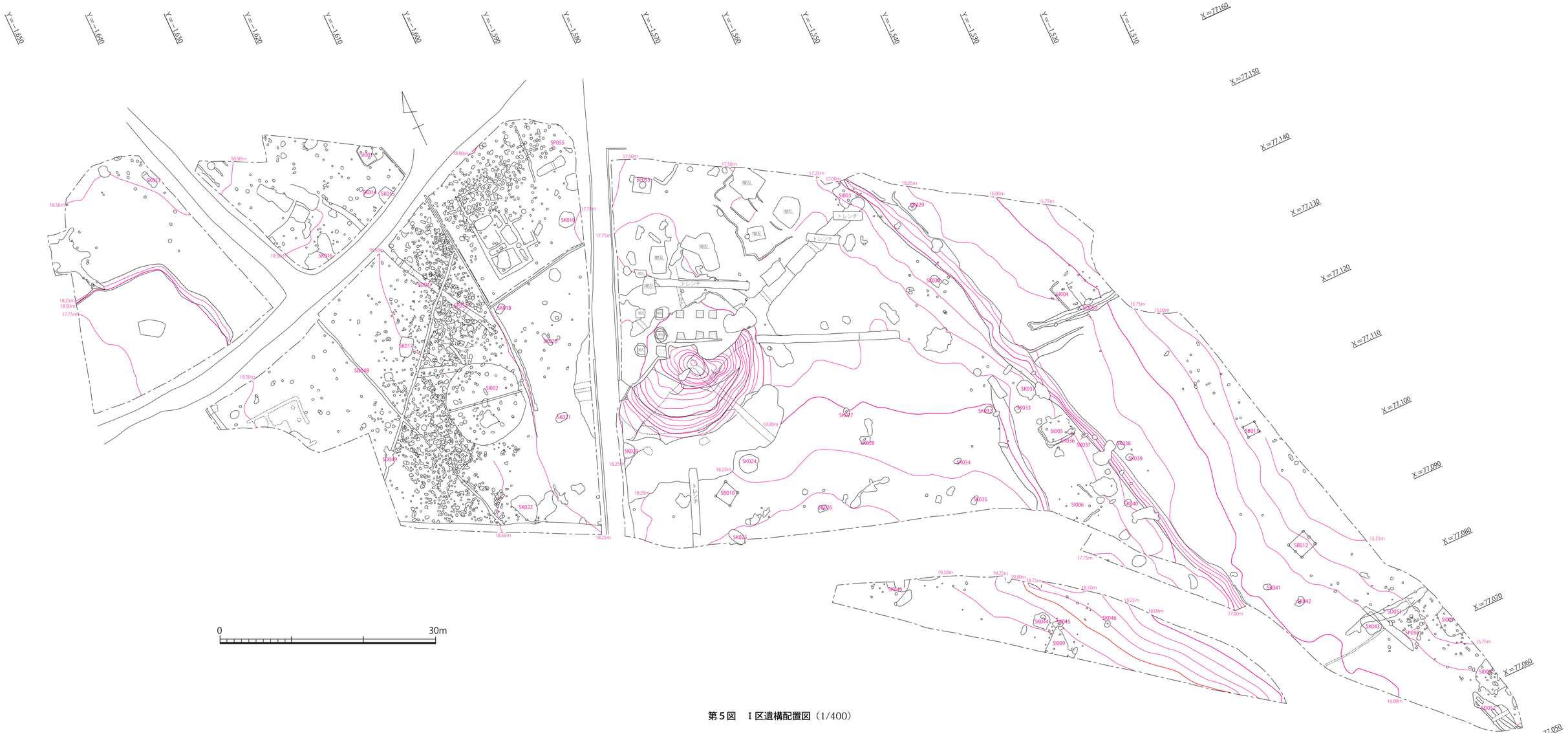
須恵器　２は坏蓋。天井部の小片。３・４は坏身。３は２分の１程度の破片で、復元口径 11.4cm、器高 4.3cm。４は口縁部の小片である。

SI002（第８～ 10 図、図版７・21・25）

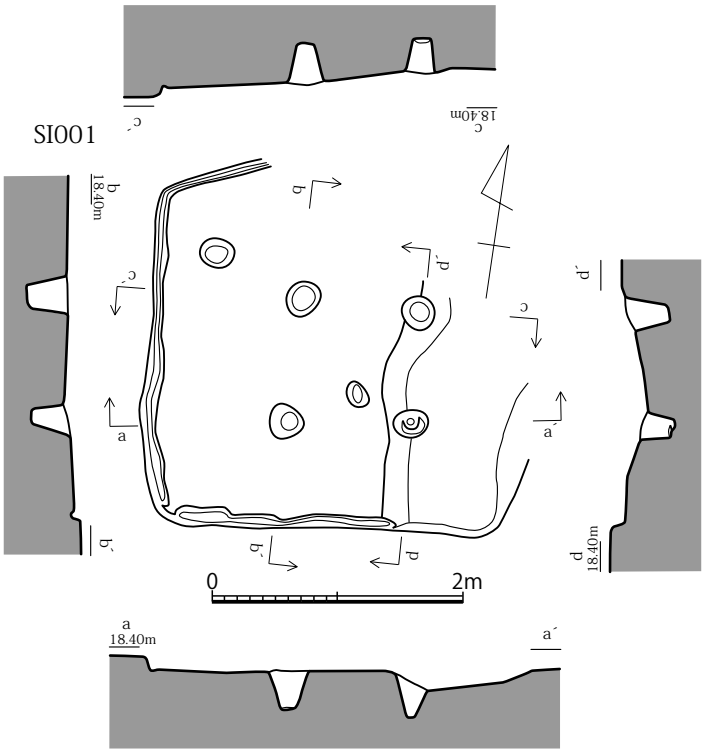
調査区の西側で検出した。直径 11m 前後を測る平面円形の大型竪穴建物である。床面上には主柱穴と考えられる直径約 50cm の柱穴が 20 基程度放射状に配置される。中央には炉跡と考えられる直径 80cm、深さ 40cm の穴がある。壁の立ち上がりは 20cm 程残っていた。壁溝は無かった。床面からは弥生土器や石庖丁や石斧、台石などの石器が出土した。また建築部材と考えられる多くの炭化材を検出した。炭化材については別途第５章にて自然科学分析結果を報告するので参照されたい。

弥生土器　５～ 10 は甕。５はほぼ完形で、口径 25.4cm、底径 7.2cm、器高 26.5cm。口縁はゆるいくの字形をなす。底部は上げ底となる。６・７は口縁部から胴部下半の破片。６は復元口径 33.6cm。口縁は如意形で口縁直下が胴部最大径となる。７は復原口径 33.2cm を測る。くの字口縁で端部に刻目を施文する。頸部の下位に２条の沈線をめぐらし、胴部は中位が最大径となる。８は如意形の口縁部片。口縁直下には三角突帯を１条めぐらす。９・10 は底部片。11 ～ 14 は壺。11 は底部を欠く破片。喇叭形にひらく口縁で、頸部には１条の三角突帯をめぐらす。胴部はやや扁球形を呈し、最大径となる中位にM字突帯、胴部上位にはヘラ描きによる連弧文をめぐらす。12 は口縁部の小片。内面には山形文を貝殻で施文する。13 は底部片。14 は胴部下半から底部にかけての破片。甕の可能性もある。

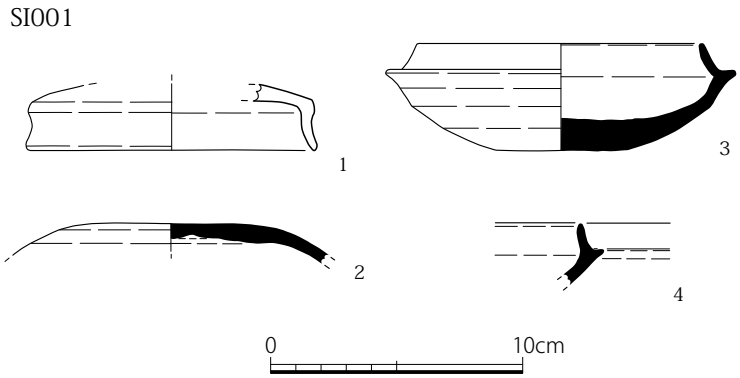
石器　117 はスクレイパー。素材の形状をあまり変えず、側縁部の一部に調整を加えて刃部を作り出す。安山岩製。118・119 は石庖丁。118 は曲背外湾刃型の破片で、破断面に紐孔の一部を確認できる。凝灰質頁岩製。119 は直刃型と考えられる小片。泥岩製。120 は磨製石剣の基部片。石材は頁岩を用いる。121 ～ 123 は太型蛤刃石斧。いずれも基部と刃部を欠く。表面の風化が著しい。安山岩質凝灰岩製。124 は柱状片刃石斧。基部を欠く破片で砥石に転用した可能性がある。砂岩製。125 は扁平両刃石斧。



第５図　Ⅰ区遺構配置図（1/400）



第６図　Ⅰ区 SI001 実測図（1/60）



第７図　Ⅰ区出土土器実測図１（1/3）

基部を欠く刃部片で砥石に転用したと考えられる。泥岩製。126 は砥石の小片。２面の砥面を残す。砂岩製。

SI003（第 11・12 図、図版８・21）

調査区東側のやや東寄りで検出した。東側が削平を受け、南側がヒメコ塚古墳の墓道で削られる。現状で西壁長 3.1m、北壁長 1.4m を測る。床面上では主柱穴と思われる３つの柱穴を検出した。いずれも直径 30cm、深さ 30cm 程度を測る。柱穴の配置と壁が直角に折れるコーナー持つことから、SI003 は４本主柱穴をもつ一辺４m 程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは 30cm 程残っていた。壁溝は無かった。出土遺物には土師器と須恵器がある。

土師器　15 は甕。口縁部から胴部上半の破片。くの字形の口縁をなす。

須恵器　16 ～ 18 は坏蓋。16 は天井部片。17・18 は口縁部の小片。

SI004（第 11・12・32 図、図版８・21・26）

調査区の東側で検出した。東側が削平を受け、南側が SD050 に削られる。現状で西壁長 4.0m、北壁長 3.6m を測る。床面上で複数の柱穴を検出した。南西側の柱の位置が若干ずれるが、４本主柱穴をもつ一辺 5.5m 程の方形の竪穴建物に復元できる。壁は残っていない。壁際には幅約 20cm、深さ数 cm の壁溝がめぐる。北側では焼土面を確認した。土師器と打製石鏃が出土した。

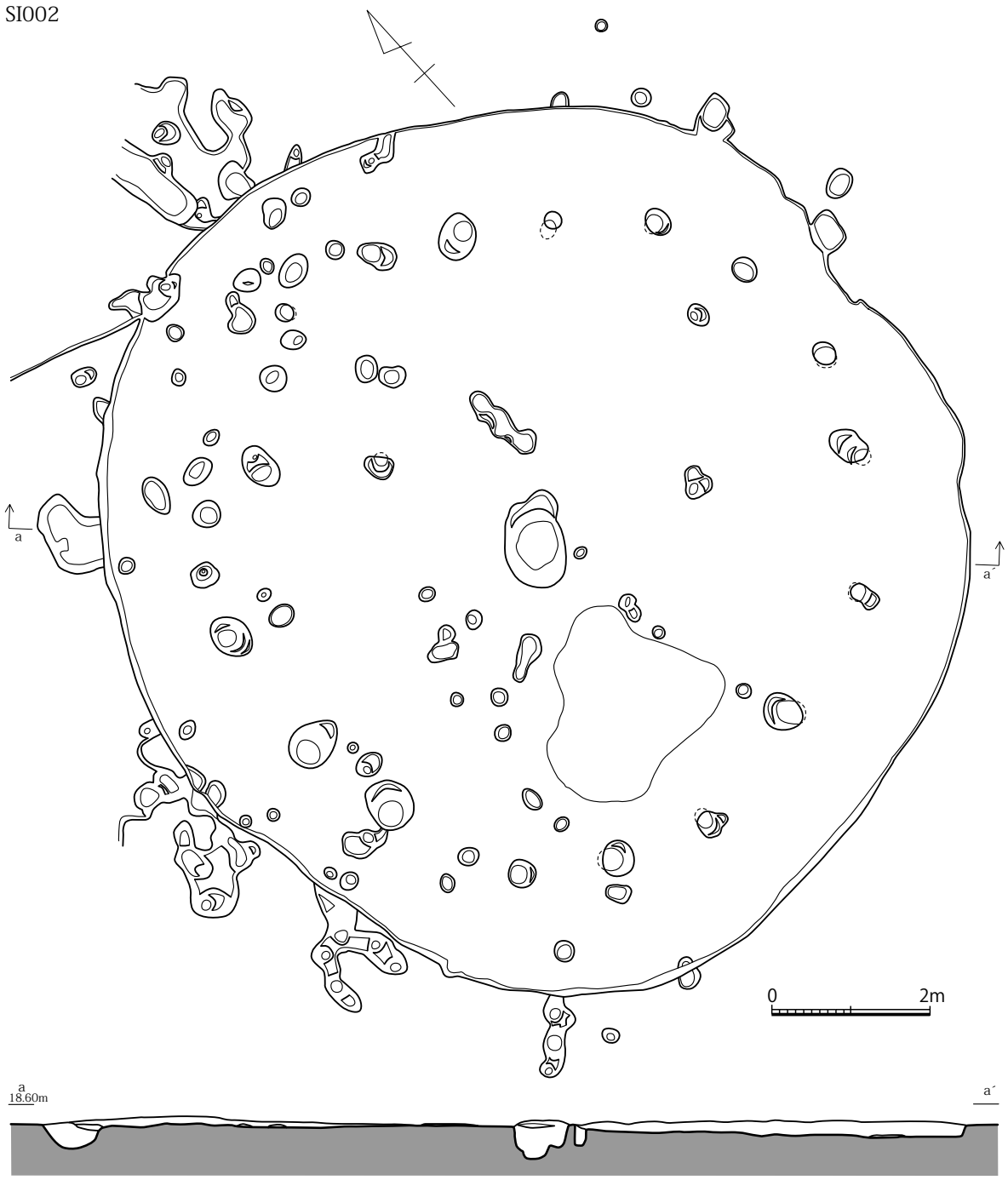
土師器　19 は壺。胴部片で内面には輪積み痕跡を残す。20 は埦。５分の４程度の破片で復元口径 15.2cm、器高 5.6cm を測る。21 は高坏。坏部の底から脚部にかけての破片である。

石器　127 は打製石鏃。凹基式。わずかに先端を欠く。姫島産黒曜石製。

SI005（第 12・13 図、図版９・21）

調査区中央の南寄りで検出した。北東側が削平を受けるが比較的良好に遺存する。南北壁長 3.0m、東西壁長 3.7m を測る。横長の方形の竪穴建物である。床面上には主柱穴と思われる４つの柱穴を検出した。いずれも直径約 20 ～ 25cm、深さ約 40cm。北壁の中央には造り付けのカマドがある。壁は 10cm 程残っており、西壁と南壁に沿って幅 20 ～ 30cm、深さ 10cm の壁溝がめぐる。土師器と須恵器が出土した。

土師器　22・23 は甕。いずれも口縁部から胴部下半にかけての破片で、復元口径 16.4cm を測る。同一個体の可能性がある。24 は埦。３分の２程度を残す。口径 15.85cm、器高 7.6cm。全体的に肥厚する。



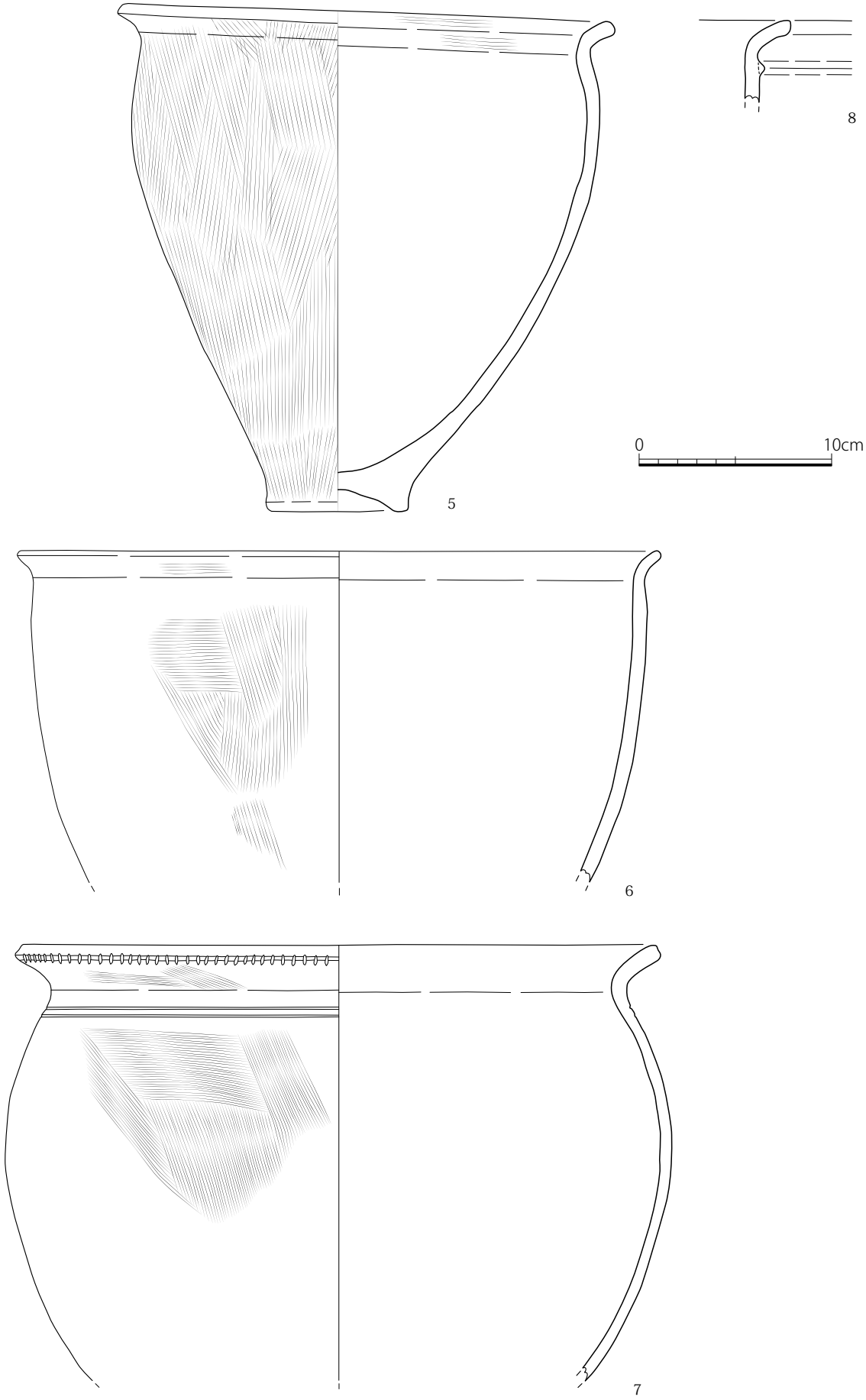
第８図　Ⅰ区 SI002 実測図（1/80）

須恵器　25 は坏身。口縁部から底部にかけての破片で、復元口径 12.2cm、器高 3.8cm を測る。

SI006（第 13 図、図版９）

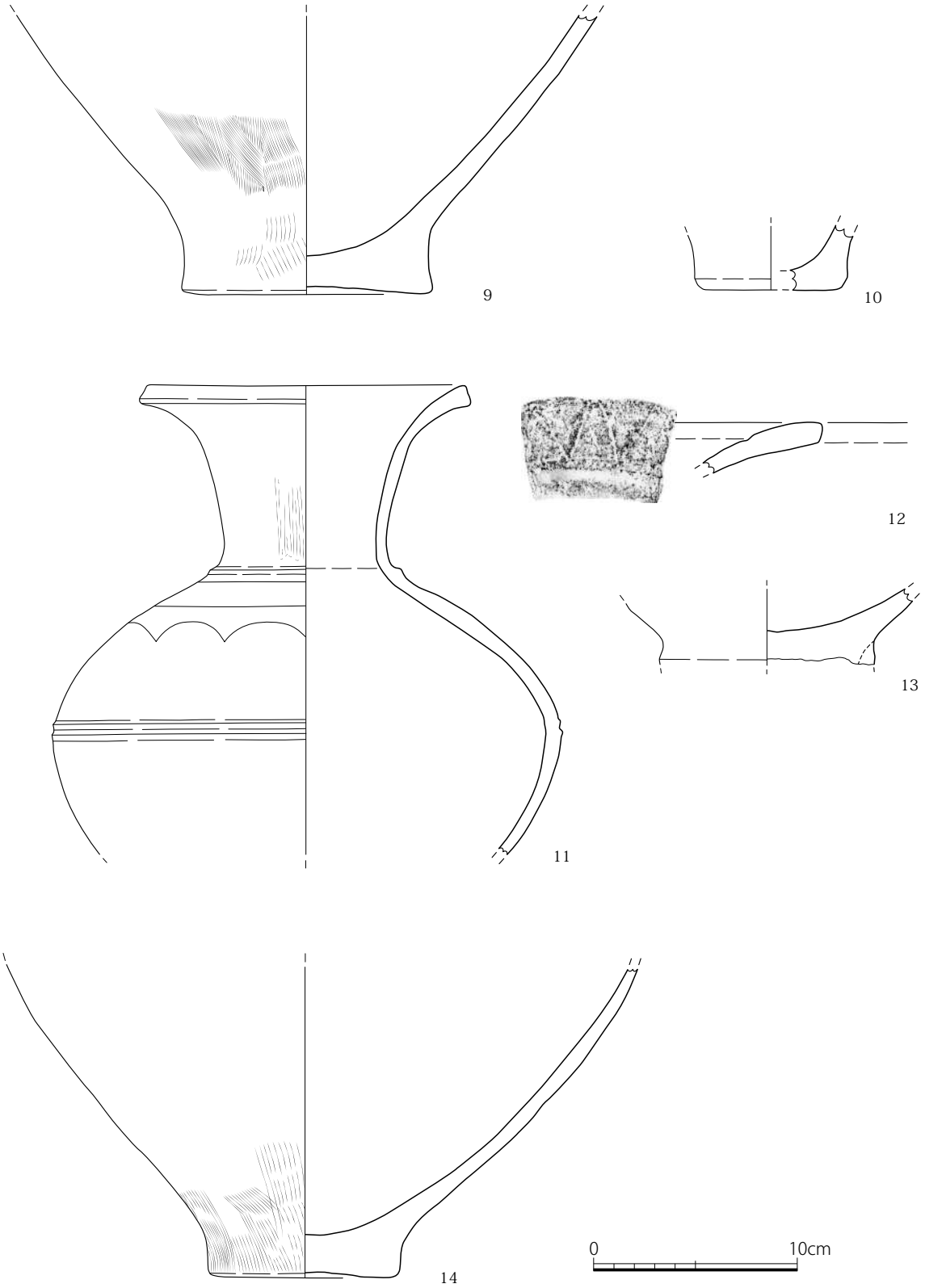
調査区の南寄りで検出した。北側から西側が削平を受けており、現状で東壁長 2.5m、南壁長 3.0m を測る。床面上で主柱穴と考えられる直径 20cm 前後、深さ 20 ～ 40cm の規則的に配置される 4 つの柱穴を確認した。柱穴の配置と壁が直角に折れるコーナー持つことから、SI006 は 4 本主柱穴をもつ一辺 4.5m 程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは残っていなかったが、壁際には幅 15 ～ 25cm、深さ 10cm 程の壁溝がめぐる。北側の床には焼土面があり、本来は造り付けのカマドがあったと考えられる。なお出土遺物は無かった。

SI002

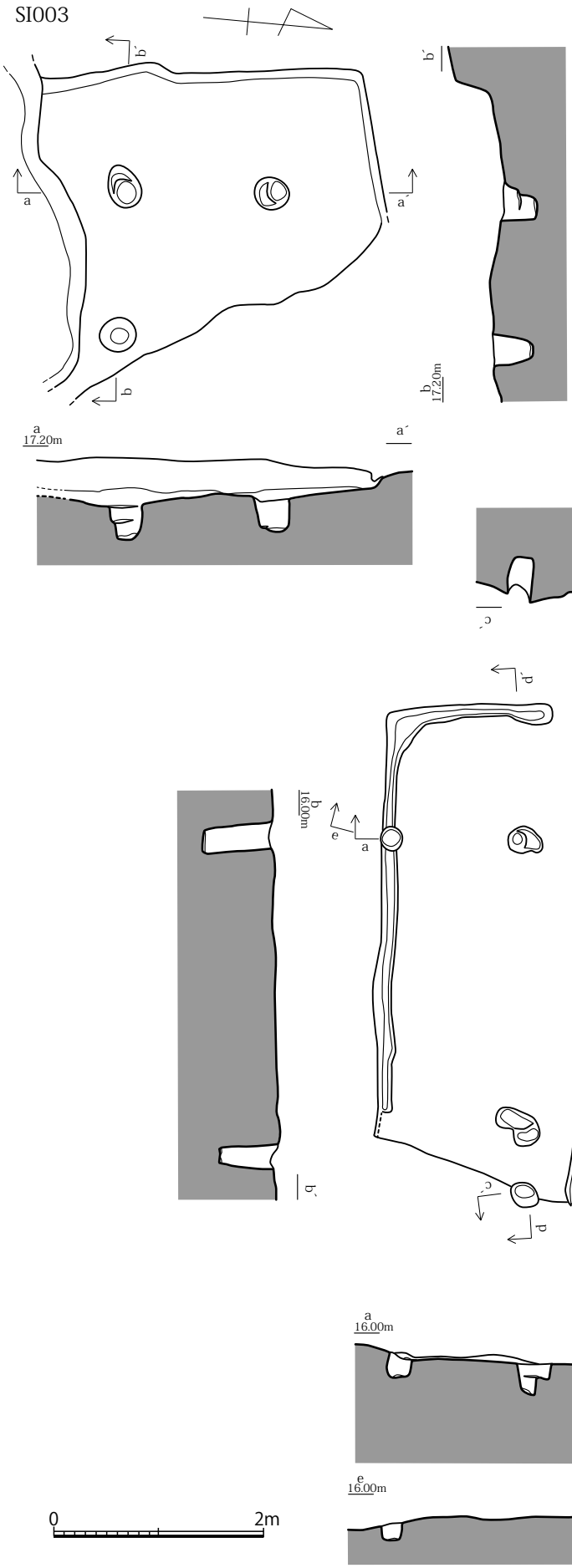


第９図　Ⅰ区出土土器実測図２（1/3）

SI002



第 10 図　Ⅰ区出土土器実測図 3（1/3）

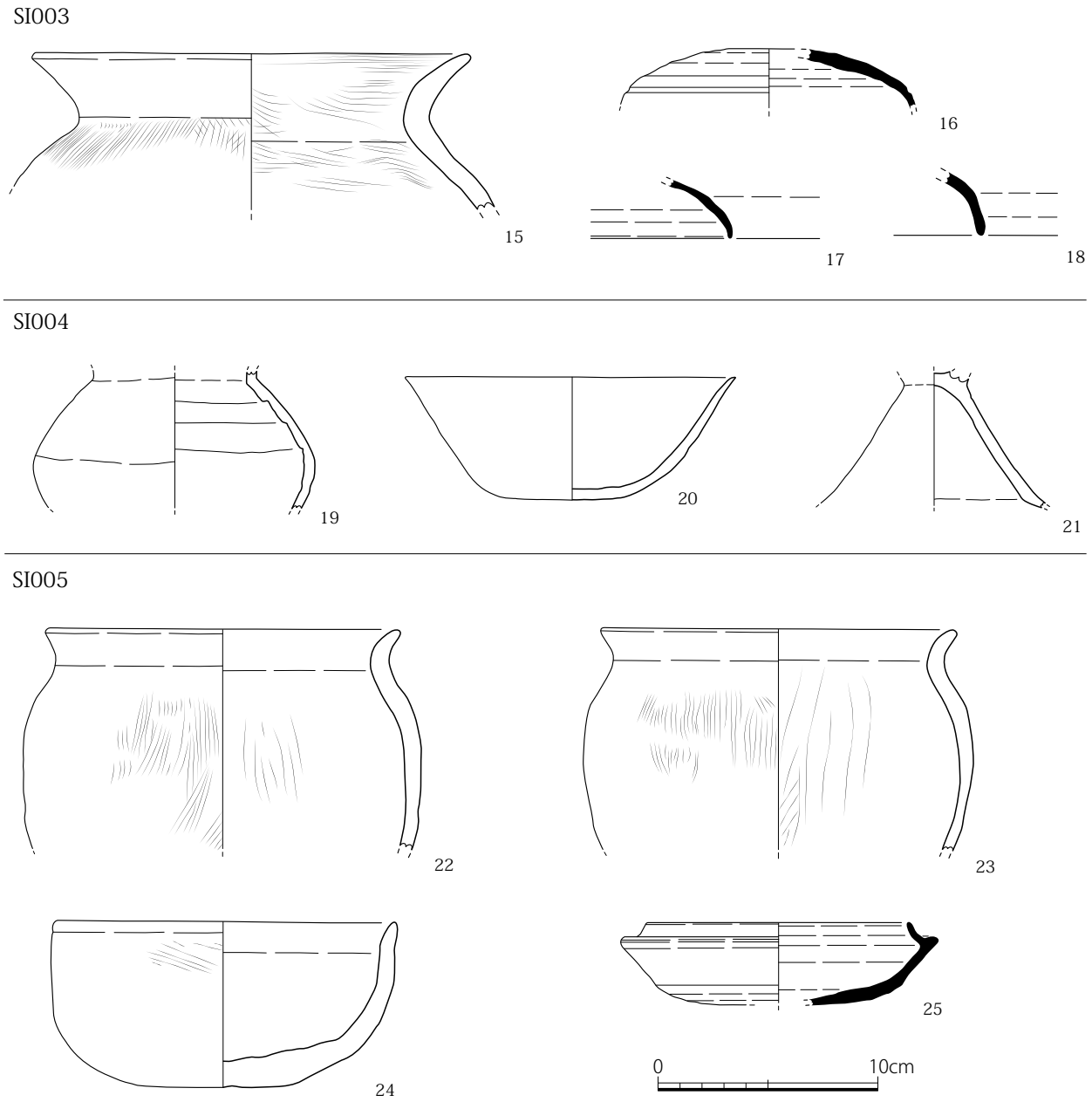


SI007（第 14・15 図、図版 10・22）

調査区の南側で検出した。全体の半分程が調査区外へと続き、検出できた範囲で周壁の長さは約 6.5m を測る。床面上の中央には炉跡と考えられる直径 60cm、深さ 10cm の浅い土坑がある。そこから規則的に配置される３つの柱穴を主柱穴と考えると、SI007 は６本主柱穴をもつ直径 4 m 程の円形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは約 10cm 残っていた。壁溝はめぐらない。弥生土器が出土した。

弥生土器　26 は壺。肩部の小片で、外面

第 11 図　Ⅰ区 SI003・004 実測図（1/60）



第 12 図　Ⅰ区出土土器実測図４（1/3）

には羽状文を貝殻で施文する

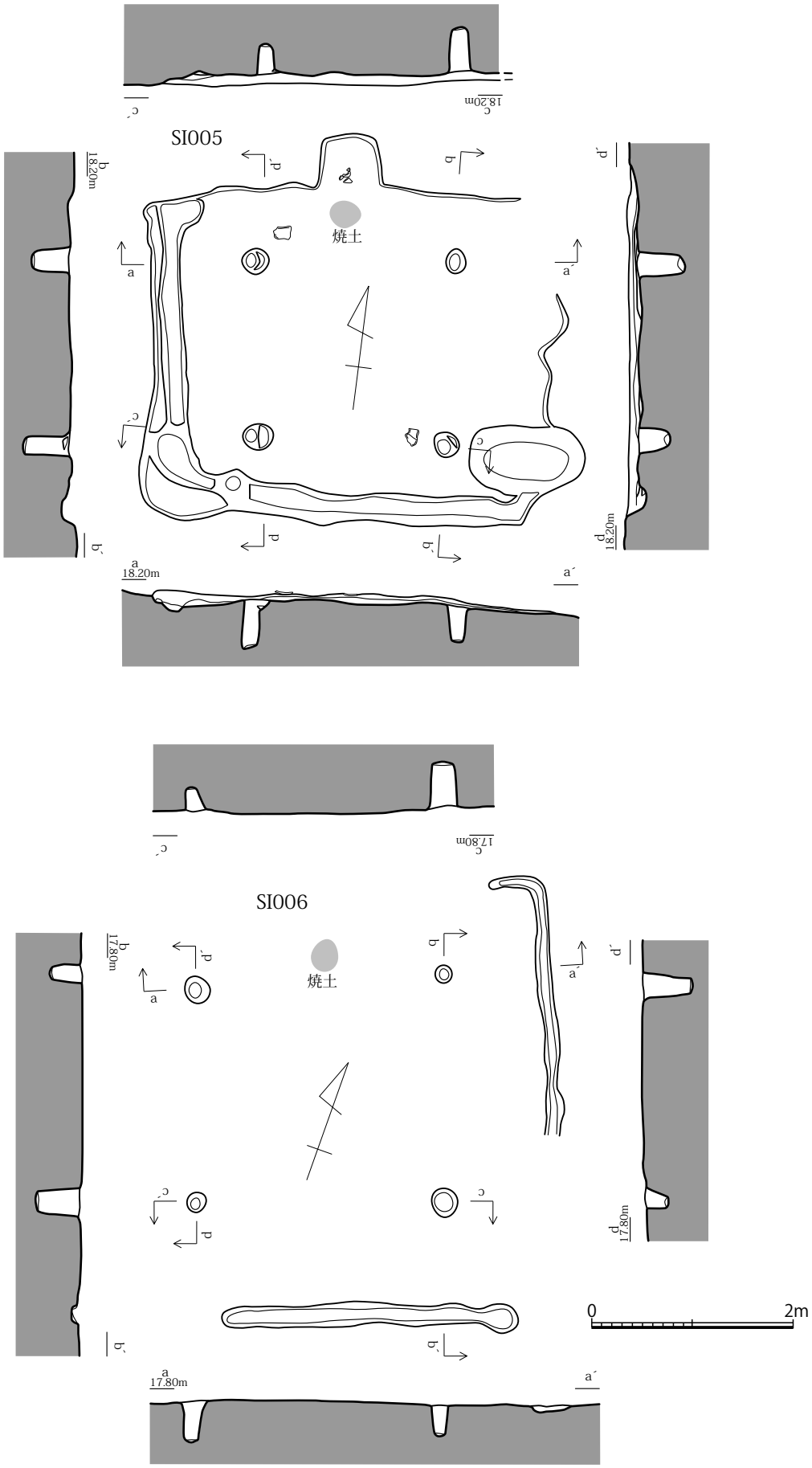
SI008（第 14・15 図、図版 22）

調査区の南側で検出した。SI007 と同様に全体の半分程が調査区外へと続いており、検出できた範囲で周壁の長さは約 8.5m を測る。一辺 4 m 程度の方形プランの竪穴建物になろうか。床面上で複数の柱穴を検出したが、主柱穴の配置は不明である。建物の壁の立ち上がりは 10cm 程が残っていた。壁溝はめぐらない。弥生土器が出土した。

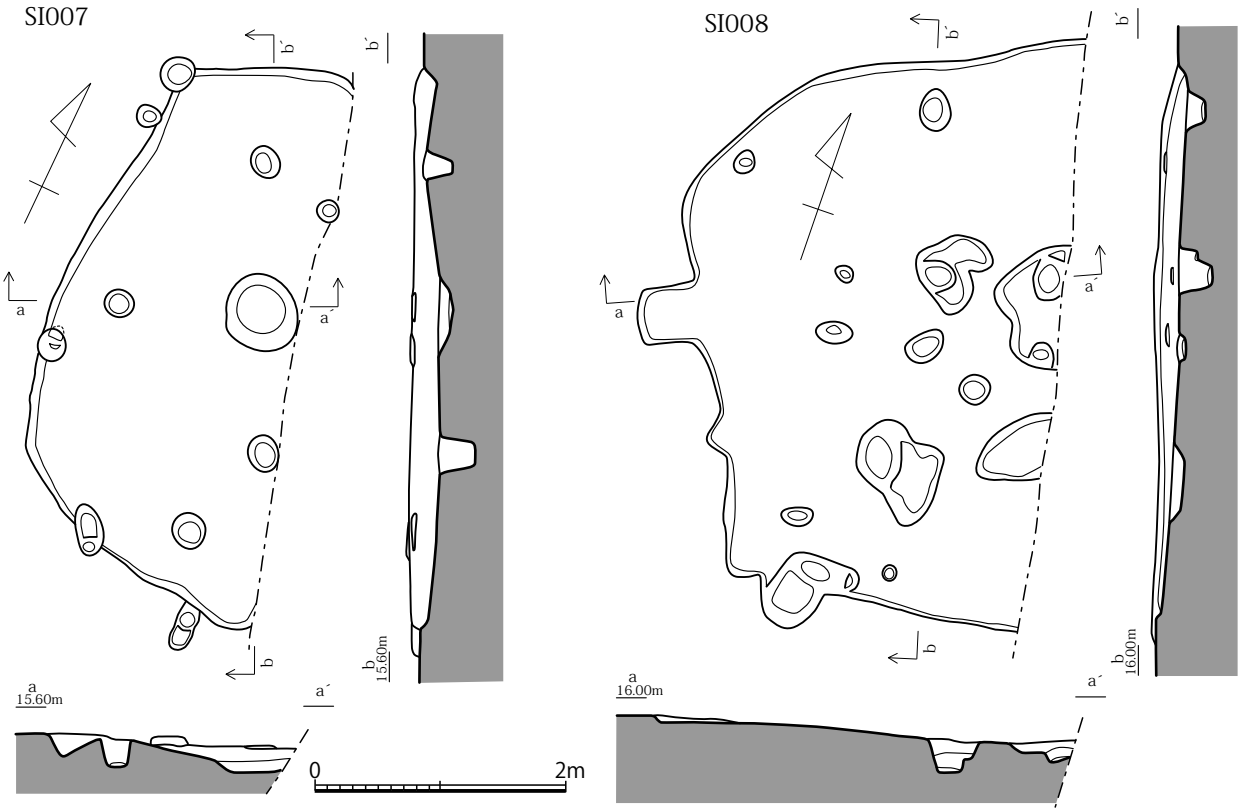
弥生土器　27・29 は甕。27 は 4 分の 3 程度を残し、口径 25.6cm、底径 8.2cm、器高 28.2cm を測る。口縁は如意形。胴部は砲弾形を呈し、その中位が最大径となる。29 は底部片。28 は壺。口縁部の小片。

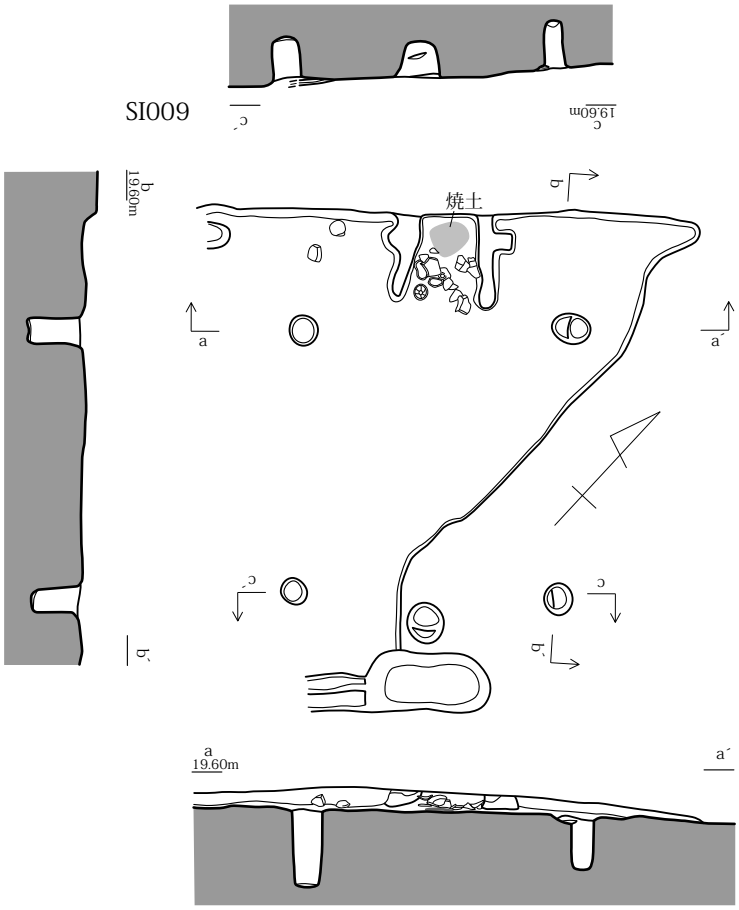
SI009（第 14・15 図、図版 10・22）

調査区南側の西寄りで検出した。南西側が調査区外へと続いているが、おおよそ全体を把握する事がで



第 13 図　Ⅰ区 SI005・006 実測図（1/60）

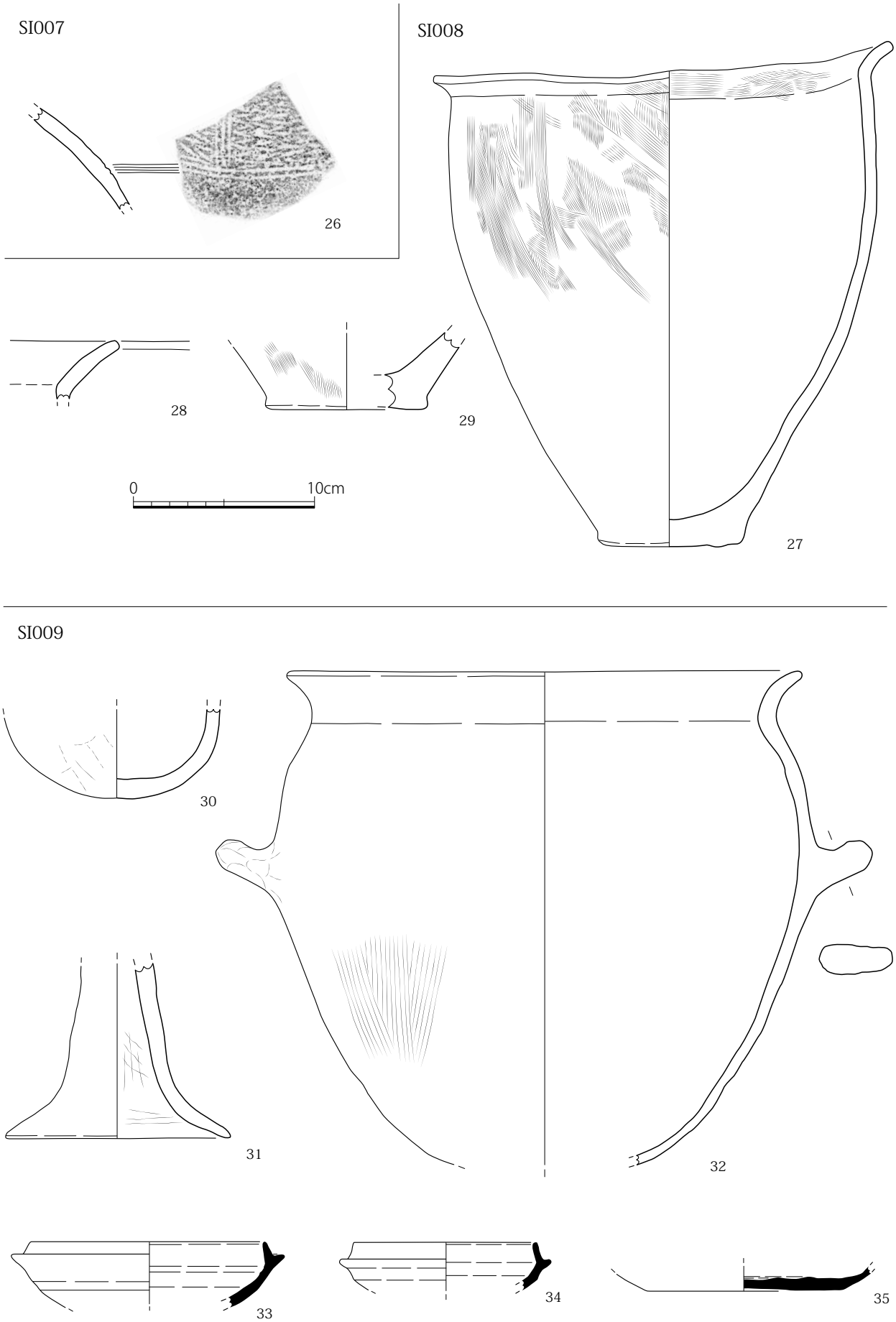




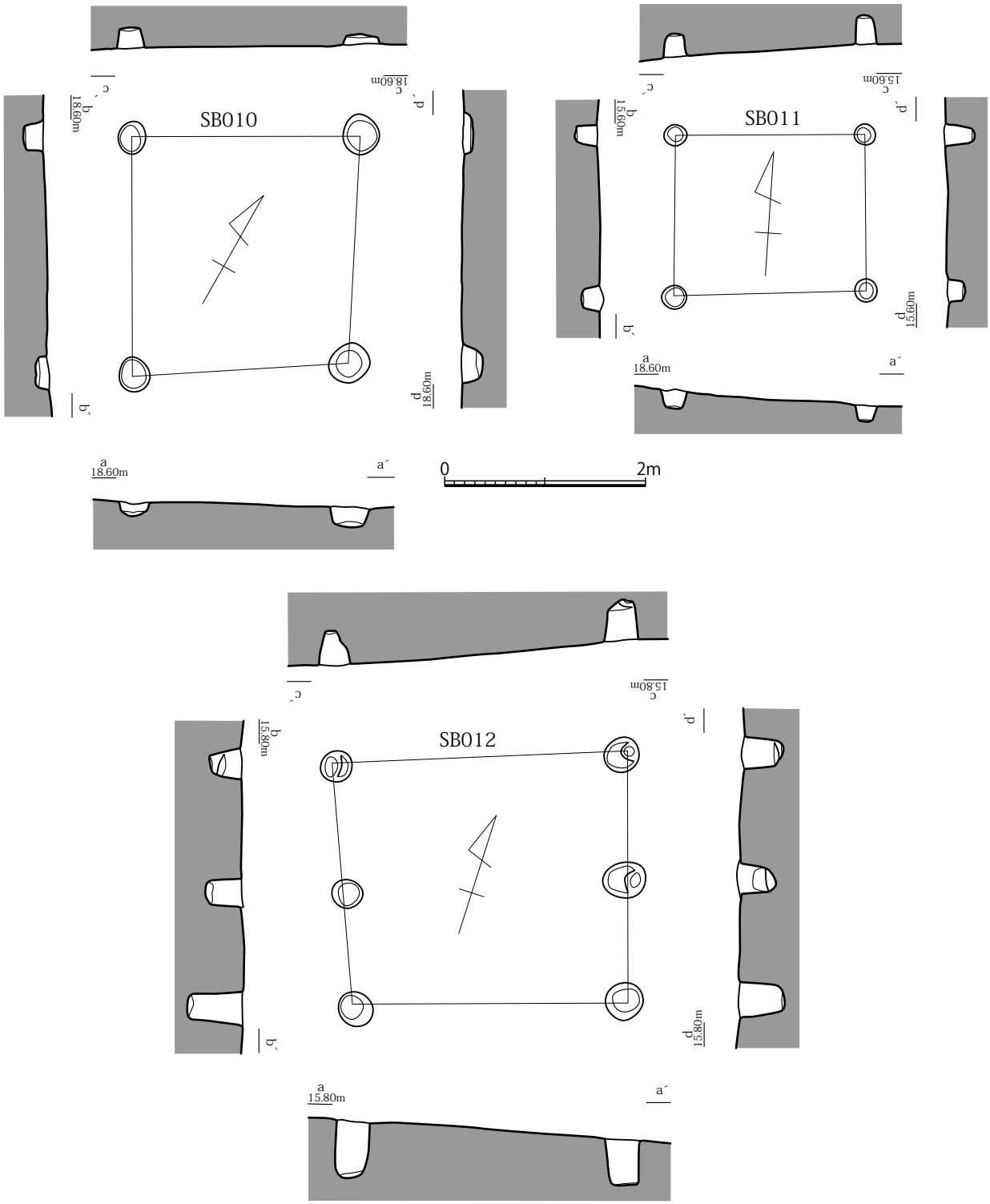
きる。直線をなす北壁は長さ 4.0m を測る。床面上には主柱穴と考えられる規則的に配置された 4 つの柱穴がある。いずれも直径 20cm、深さ 50cm 程である。このことより SI009 は 4 本主柱穴をもつ一辺 4 m 程の方形プランの竪穴建物であったと考えられる。建物の壁の立ち上がりは 10cm 程度で一部の壁際には幅 20cm の壁溝がめぐっている。北壁の中央では造り付けのカマドを検出した。両袖部が良好に遺存し、燃焼部では焼土面を検出した。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器　いずれもカマドの燃焼部より出土した。30 は壺。底部の小片である。31 は高坏の脚部片。32 は甑。２分の１程度を残し、復元口径 28.6cm を測る。口縁はやや外反するくの字形をなし、丸みを帯びた

第 14 図　Ⅰ区 SI007・008・009 実測図（1/60）



第 15 図　Ⅰ区出土土器実測図 5（1/3）



第 16 図　Ⅰ区 SB010・011・012 実測図（1/60）

胴部の中位にはやや平たい把手が付く。

須恵器　33･34 は坏身。いずれも口縁部の小片である。35 は皿か。底部片で復元底径 11.0cm を測る。

（2）掘立柱建物

SB010（第 16 図、図版 11）

調査区の中央やや南寄りで検出した。1 間× 1 間の掘立柱建物である。西側の柱列では方位をN － 30°

－Ｗにとる。柱間は東側で 2.25m、西側で 2.4m、南側で 2.15m、北側で 2.25m を測り、正方形に近い平面プランとなる。柱穴は直径 30 ～ 40cm、深さ 10 ～ 20cm を測る。出土遺物は無かった。

SB011（第 16 図、図版 11）

調査区の南寄りで検出した。１間×１間の掘立柱建物である。東側と西側の柱列では方位をＮ－３°－Ｗにとる。柱間は東側と西側で 1.55m、南側と北側で 1.9m を測り、東西に長い整った長方形プランとなる。柱穴は直径 20 ～ 25cm、深さ 15 ～ 30cm を測る。出土遺物は無かった。

SB012（第 16 図）

調査区の南側で検出した。西側の柱列では方位をＮ－ 22°－Ｗにとる。桁行は南側で 2.75m、北側で 2.95m を測る。梁行は東側で 2.5m、西側で 2.4m で、柱間は東側で 1.2 ～ 1.3m、西側で 1.15 ～ 1.25m を測る。東西に長いやや歪んだ長方形プランとなる。柱穴は直径 30 ～ 40cm、深さ 35 ～ 55cm を測る。出土遺物は無かった。

（３）土坑

調査区では多くの土坑を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

SK013（第 17・18 図、図版 11・22）

調査区北西側で検出した。やや歪んだ長方形を呈し、長軸 255cm、短軸 85cm、深さ 30cm を測る。弥生土器と須恵器が出土した。

弥生土器　36 は壺。底部の小片。

須恵器　37 は壺か。肩部の破片である。

SK014（第 17・18・32 図、図版 22・26）

調査区北側の西寄りで検出した。SK015 と接する。歪んだ楕円形を呈し、長軸 190cm、短軸 105cm、深さ 15cm を測る。弥生土器と砥石が出土した。

弥生土器　38 は甕。口縁部から胴部下半にかけての破片である。口縁は如意形で砲弾形の胴部となる。口縁直下に１条の沈線をめぐらす。復元口径 23.2cm。

石器　128 は砥石。小片で１面の砥面を残す。玄武岩製。

SK015（第 17・18 図、図版 22）

調査区北側の西寄りで検出した。SK014 と接する。南側が調査区外に続いているが、検出できた範囲で長軸 200cm、短軸 135cm、深さ 45cm を測る。弥生土器が出土した。

弥生土器　39 は甕。底部の小片。40 は壺。口縁部の小片で、頸部には１条の突帯をめぐらす。

SK016（第 17・18 図、図版 12・22）

調査区北側の西寄りで検出した。南側が調査区外に続くが、検出できた範囲で長軸 430cm、短軸 380cm、深さ 45cm を測る大型の土坑である。弥生土器が出土した。

弥生土器　41・42 は甕。41 は胴部下半から底部にかけての破片。42 は小型品の口縁部片である。

SK017（第 17 図、図版 12）

調査区西側で検出した。長方形を呈し、長軸 290cm、短軸 200cm、深さ 50cm を測る。出土遺物は無い。

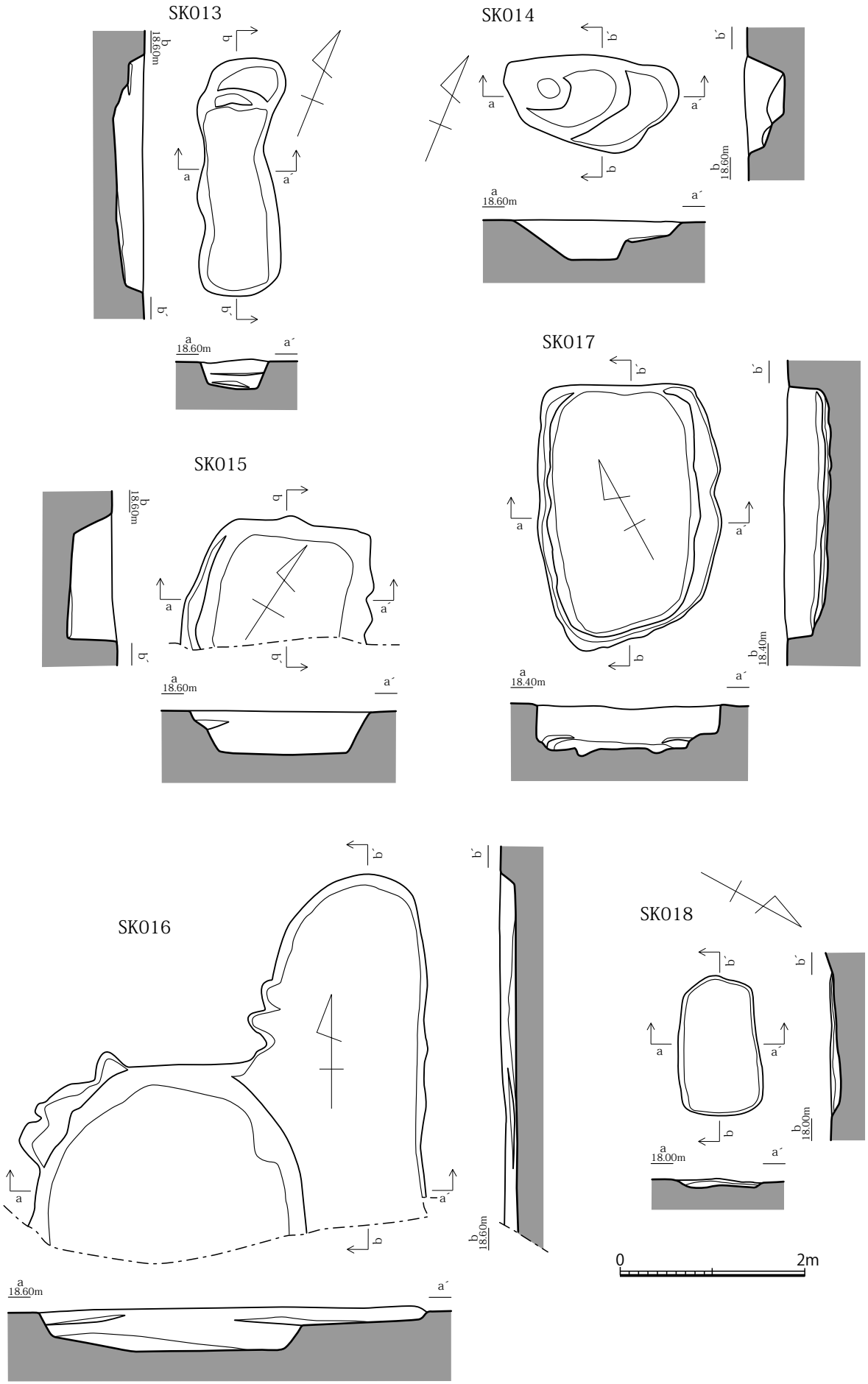
SK018（第 17 図）

調査区の北寄りで検出した。長方形を呈し、長軸 150cm、短軸 85cm、深さ 10cm を測る。出土遺物は無い。

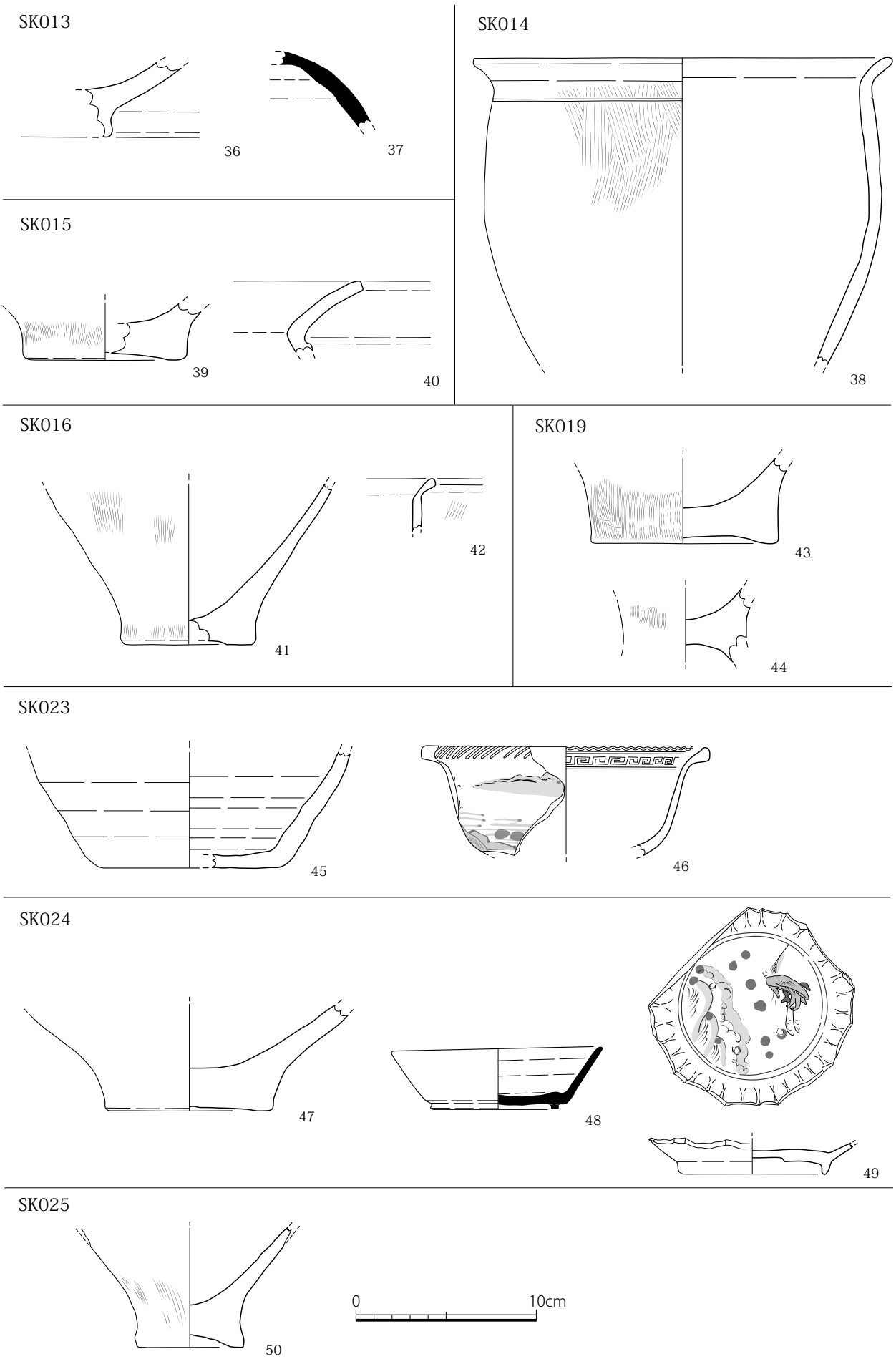
SK019（第 18・19 図、図版 22）

調査区北側で検出した。円形土坑で直径 200cm 程度、深さ 80cm を測る。弥生土器が出土した。

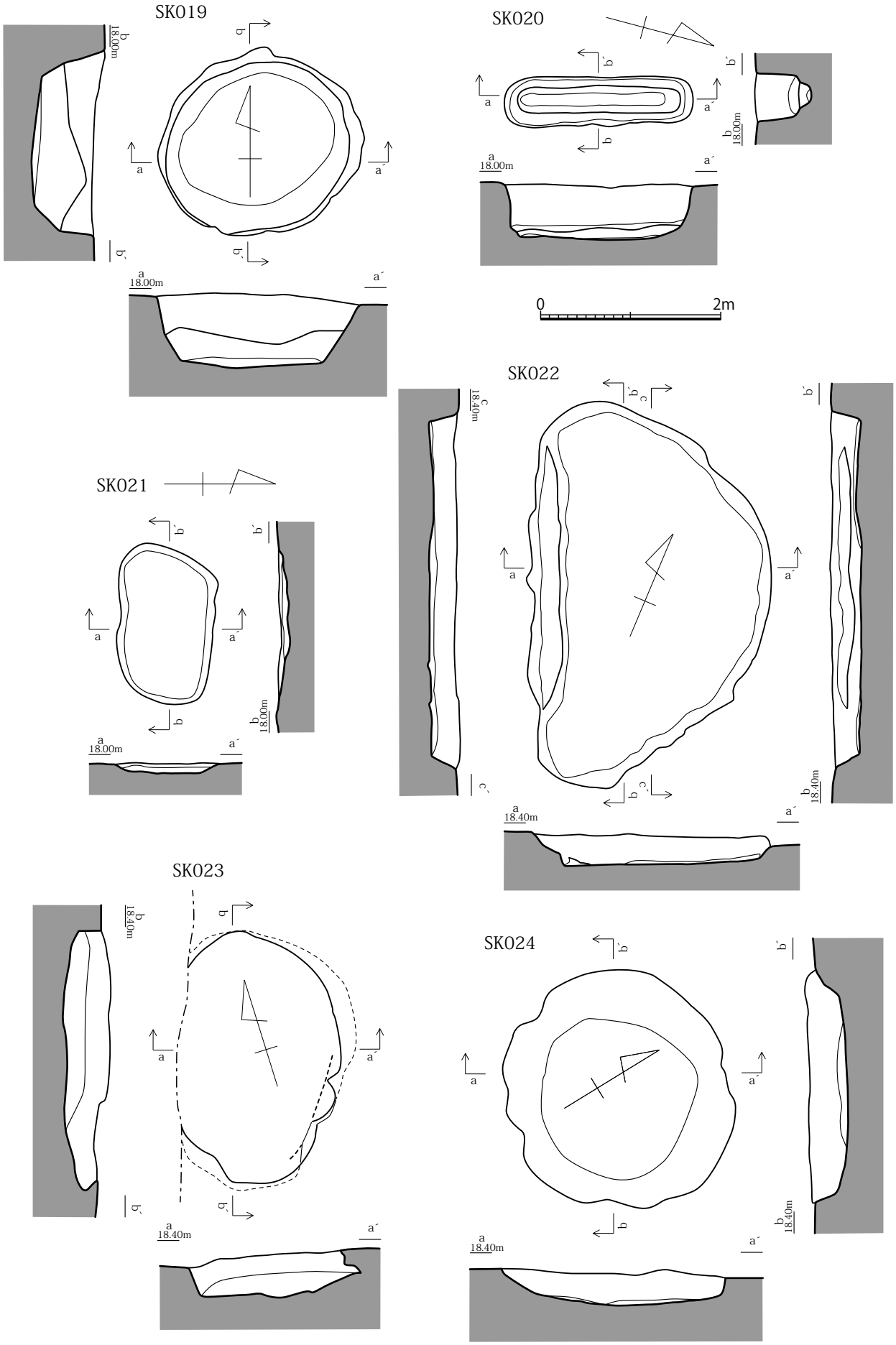
弥生土器　43 は甕。底部片。44 は甕か。上げ底となる底部片である。



第 17 図　Ⅰ区 SK013・014・015・016・017・018 実測図（1/60）



第 18 図　Ⅰ区出土土器実測図 6（1/3）



第 19 図　Ⅰ区 SK019・020・021・022・023・024 実測図（1/60）

SK020（第 19 図、図版 12）

調査区中央の西寄りで検出した。細長い隅丸長方形を呈し、底は二段掘りされている。長軸 210cm、短軸 55cm、深さ 60cm を測る。出土遺物は無かった。

SK021（第 19 図）

調査区中央の西寄りで検出した。隅丸長方形で長軸 175cm、短軸 105cm、深さ 10cm を測る。出土遺物は無い。

SK022（第 19・32 図、図版 13・26）

調査区中央の西側で検出した。歪んだ楕円形を呈し、長軸 425cm、短軸 270cm、深さ 30cm を測る。打製石鏃と凹石が出土した。

石器　129 は打製石鏃。平基式。先端と片脚を欠く。安山岩製。130 は凹石。ほぼ完形である。凝灰岩製。

SK023（第 18・19 図、図版 13・22）

調査区中央のヒメコ塚古墳の脇で検出した。西側が調査区外へと続いている。楕円形を呈し、現状で長軸 280cm、短軸 180cm、深さ 50cm を測る。陶器、染付が出土した。

陶器　45 は甕。小型品の底部片と考えられる。

染付　46 は鉢。外面に岩、口縁部内面に雷文を絵付けする。口縁端部には刻目を施す。復元口径 15.4cm を測る。

SK024（第 18・19・32 図、図版 13・22・26）

調査区中央のヒメコ塚古墳の脇で検出した。やや歪んだ円形を呈した土坑で、直径約 260cm、深さ 40cm を測る。弥生土器、須恵器、染付、打製石鏃が出土した。

弥生土器　47 は壺。底部の小片である。

須恵器　48 は埦。ほぼ完形で、復元口径 11.85cm、復元底径 7.2cm、器高 3.5cm を測る。

染付　49 は皿。ロクロナデ成形後に花形文を型打ちする。見込みに鷺？を絵付けする。蛇目凹形高台。

石器　131 は打製石鏃。基部を欠く先端部の破片。安山岩製。

SK025（第 18・20 図、図版 22）

調査区中央の西側で検出した。楕円形で長軸 250cm、短軸 140cm、深さ 20cm。弥生土器が出土した。

弥生土器　50 は甕。胴部下半から底部にかけての小片である。

SK026（第 20・33 図、図版 14・26）

調査区中央のやや西寄りに位置する。長辺 125cm、短辺 75cm の長方形プランを呈し、底に直径 20cm、深さ 25cm の柱穴を有する。出土遺物には砥石がある。

砥石　132 は砥石。上下を欠く小片である。２面の砥面を残す。石材には層灰岩を用いる。

SK027（第 20・33 図、図版 14・26）

調査区中央やや南寄りで検出した。楕円形を呈し、長軸 120cm、短軸 70cm、深さ 30cm を測る。底に直径 25cm、深さ 60cm の柱穴を有する。打製石鏃が出土した。

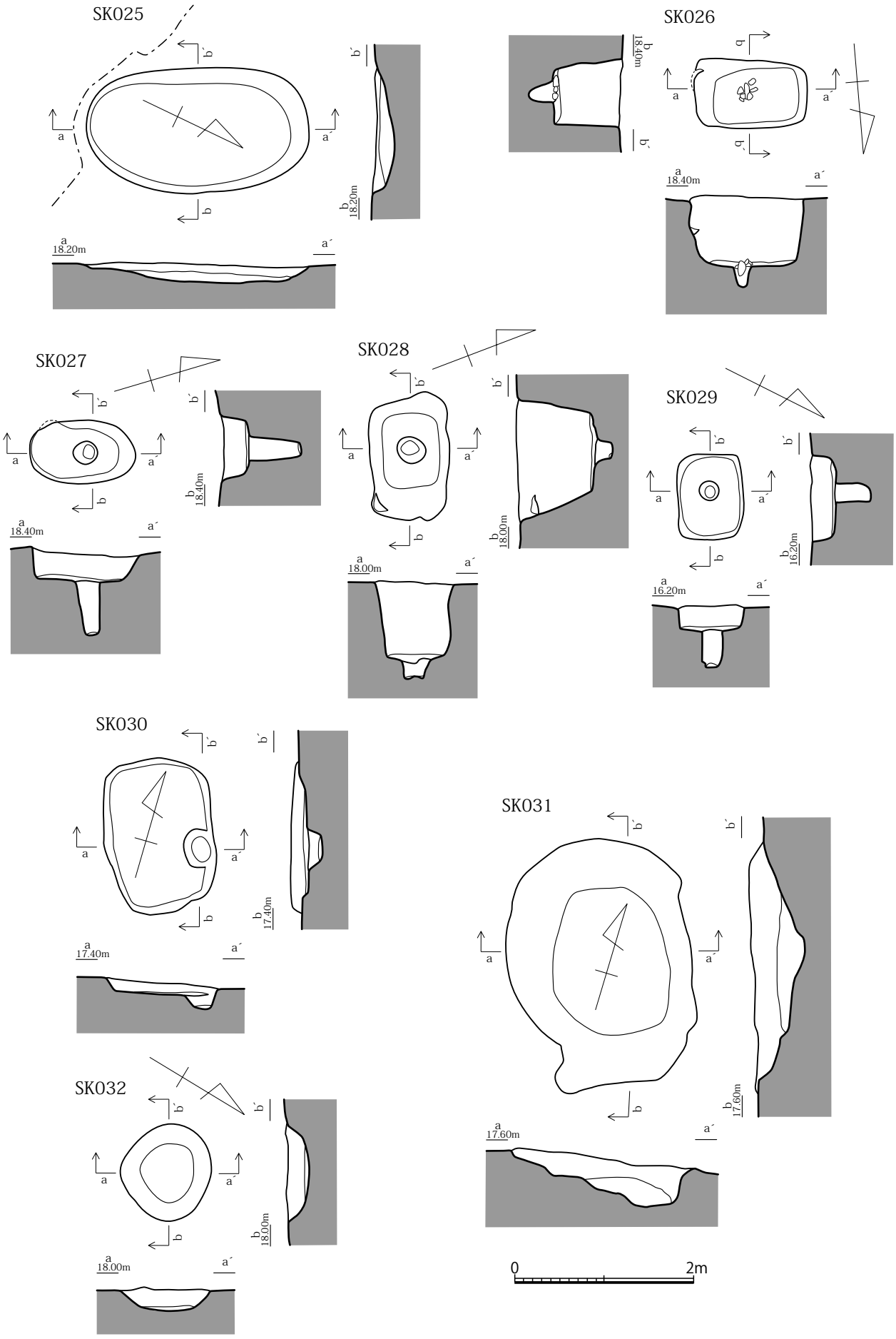
石器　133 は打製石鏃。平基式。ほぼ完形である。安山岩製。

SK028（第 20 図、図版 15）

調査区中央のやや南寄りに位置する。長辺 140cm、短辺 85cm の長方形を呈し、底に直径 30cm、深さ 20cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

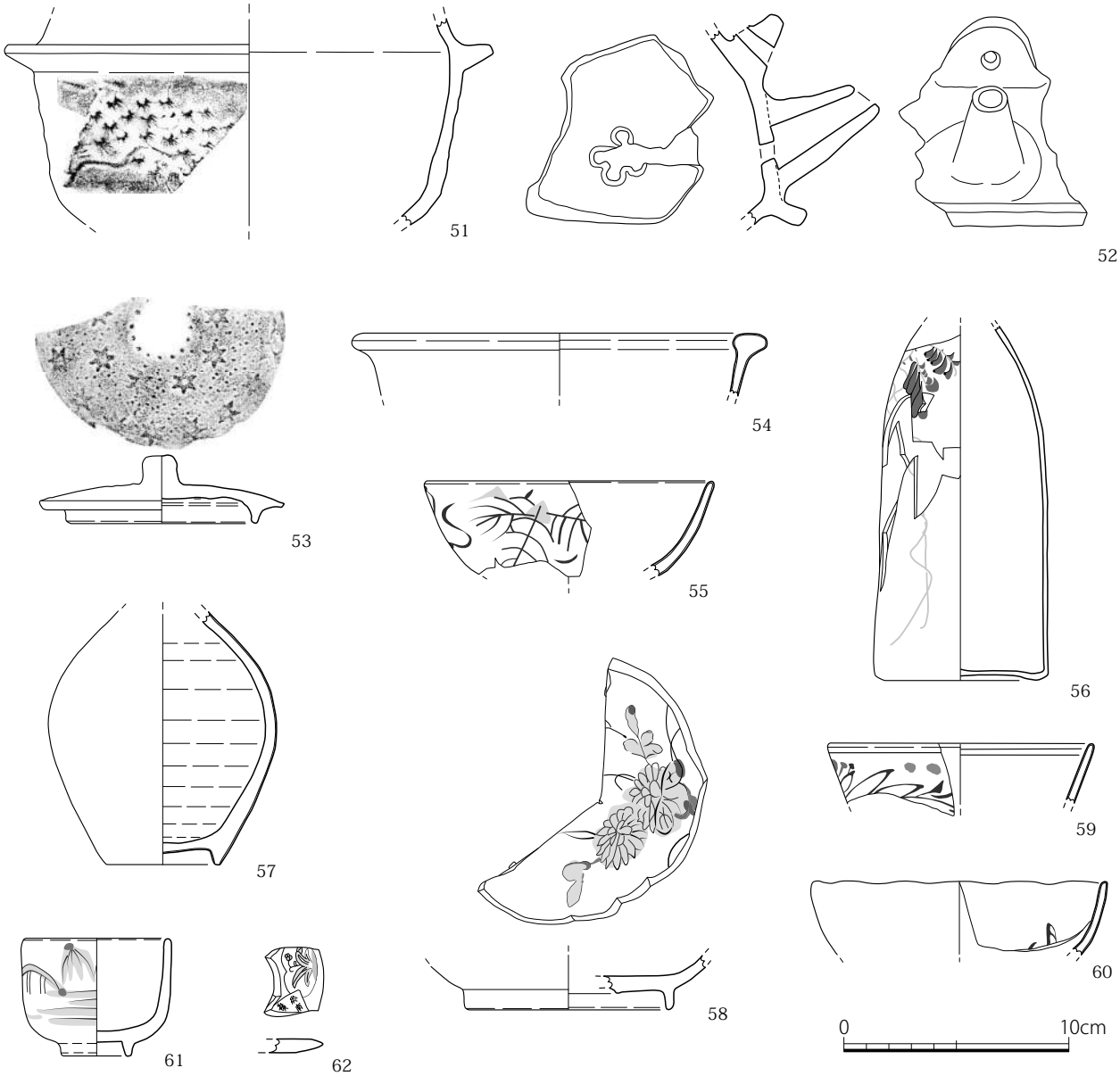
SK029（第 20 図、図版 15）

調査区中央の東側で検出した。長方形を呈し、長辺 95cm、短辺 70cm、深さ 30cm を測る。底には直



第 20 図　Ⅰ区 SK025・026・027・028・029・030・031・032 実測図（1/60）

SK031



第 21 図　Ⅰ区出土土器実測図 7（1/3）

径 20cm、深さ 40cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK030（第 20・33 図、図版 15・26）

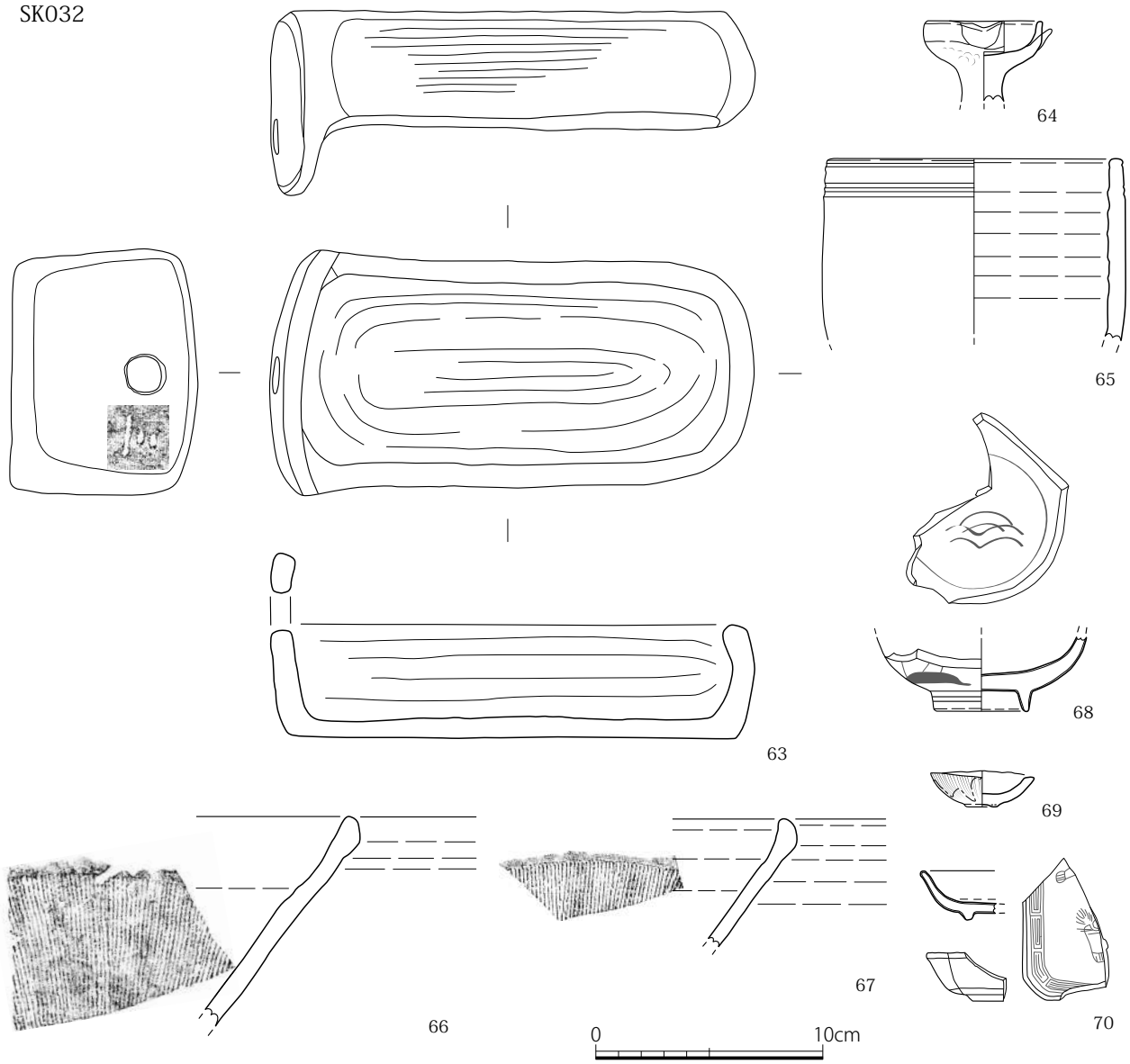
調査区中央のやや東寄りで検出した。隅丸方形を呈し、長軸 170cm、短軸 120cm、深さ 15cm を測る。出土遺物には磨製石斧がある。

石器　134 は磨製石斧。基部片で刃部を欠く。凝灰質砂岩製。

SK031（第 20・21 図、図版 16・23）

調査区中央の南寄りで検出した。歪な楕円形を呈し、長軸 270cm、短軸 205cm、深さ 45cm を測る。瓦質土器や陶器、磁器など近世の遺物が出土した。

瓦質土器　51 は釜か。蓋の可能性もある。外面は型押しによって松の文様を施文する。52 は水注。注口部の破片である。53 は釜蓋。２分の１程度の破片である。外面は型押しによって星形文を施文する。



第 22 図　Ⅰ区出土土器実測図８（1/3）

陶器　54 は鉢。口縁部片で鉄釉を施釉する。55 は陶胎染付の碗。56 は瓶。関西系の施釉陶器である。

白磁　57 は瓶。胴部上半から底部にかけての破片で、全体の２分の１程度を残す。

染付　58 は皿。見込みに菊唐草文を絵付けする。蛇目凹形高台。59・60 は碗。いずれも口縁部片で、60 は波状口縁となる。61 は猪口。外面には橋や舟にのった人物が絵付けされる。62 は不明品の小片。

SK032（第 20・22・33 図、図版 16・23・26）

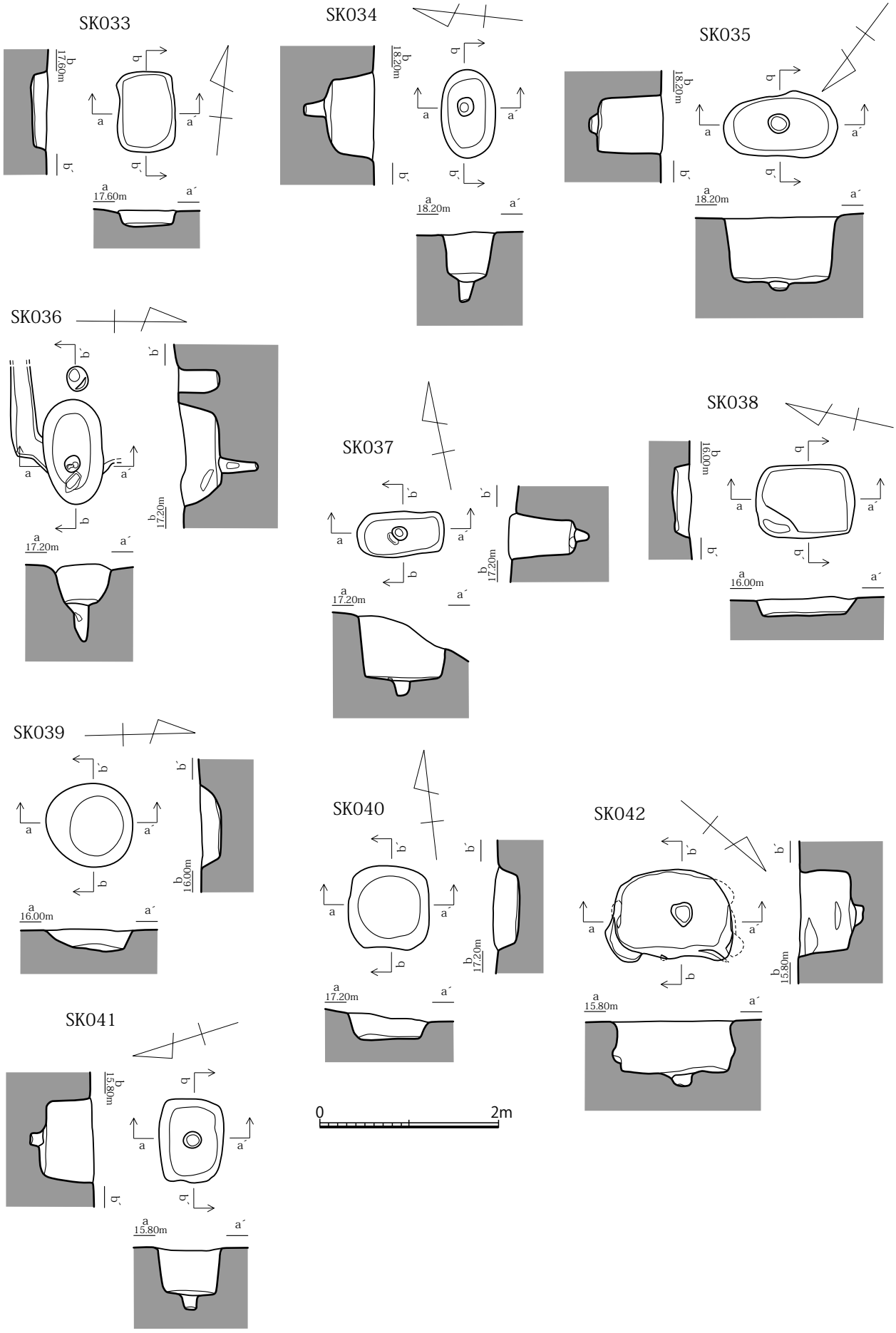
調査区中央の南寄りで検出した。直径 100cm の円形を呈し、深さ 25cm を測る。近世の遺物が出土した。

瓦質土器　63 は火舎か。完形で箱状をなす。正面には 1 cm 大の穿孔があり、「三」と線刻されている。

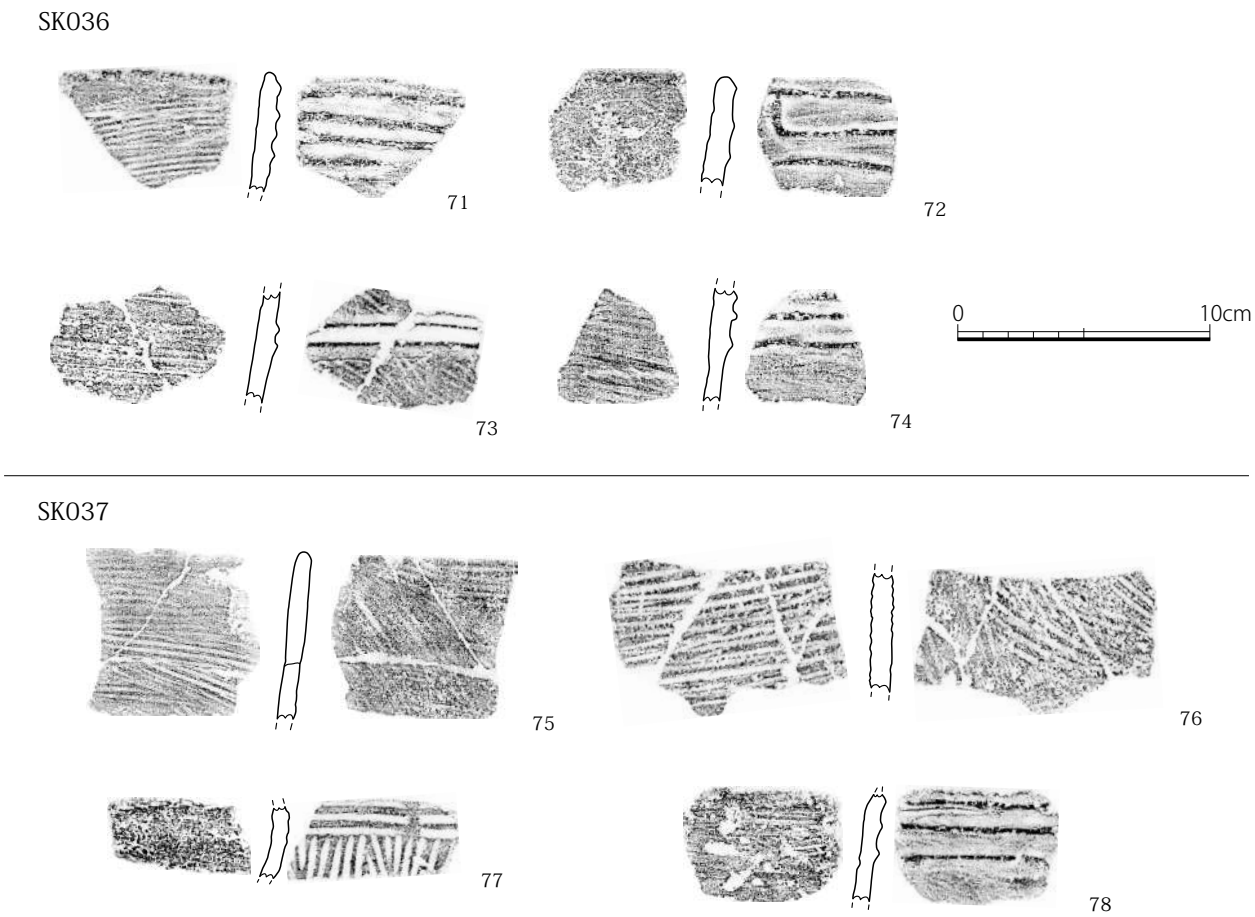
陶器　64 は秉燭。坏部を欠損する。唐津系。65 は水指。口縁部片で復元口径 13.2cm。鉄釉を施す。66・67 は擂鉢。いずれも口縁部の破片。内面に擂目を施文し、鉄釉を施す。上野・高取系。

染付　68 は碗。見込に青海波文、外面に草花文？を絵付けする。

白磁　69 は紅皿。完形品である。型押し成形し施釉する。70 は角皿の小片。糸切り細工成形を行い、内面を白土で施文し透明釉を施釉する。



第 23 図　Ⅰ区 SK033・034・035・036・037・038・039・040・041・042 実測図（1/60）



第 24 図　Ⅰ区出土土器実測図９（1/3）

石器　135 は砥石。完形で長さ 9.4cm、幅 3.6cm、厚さ 2.0cm を測る。４面の砥面を残す。凝灰岩製。

SK033（第 23 図、図版 16）

調査区中央の南寄りで検出した。隅丸方形で長辺 90cm、短辺 65cm、深さ 20cm を測る。出土遺物は無い。

SK034（第 23 図、図版 17）

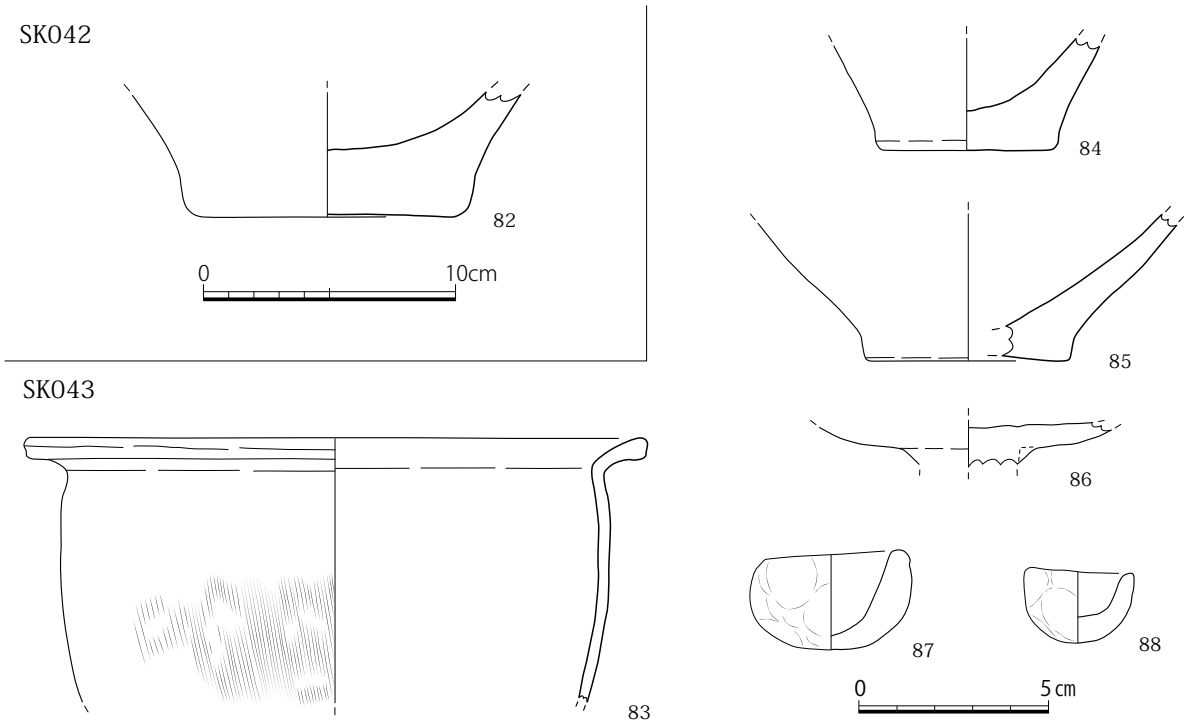
調査区中央の南寄りで検出した。楕円形を呈し、長軸 100cm、短軸 60cm、深さ 55cm を測る。底には直径 20cm、深さ 20cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK035（第 23 図、図版 17）

調査区中央の南寄りで検出した。楕円形を呈し、長軸 125cm、短軸 70cm、深さ 70cm を測り、底には直径 20cm、深さ 10cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK036（第 23・24 図、図版 17・18・23）

調査区中央の南寄りで検出した。SI005 と重複する。楕円形を呈し、長軸 115cm、短軸 65cm、深さ



第 25 図　Ⅰ区出土土器実測図 10（1/3・1/2）

45cm を測る。底面に直径 15cm、深さ 40cm の柱穴を有する。縄文土器が出土した。

縄文土器　71 ～ 74 は深鉢。71・72 は口縁部片で他は胴部の小片。いずれも前期の轟Ｂ式系統である。

SK037（第 23・24・33、図版 18・23・26）

調査区中央の南寄りで検出した。SK036 と近接する。隅丸方形を呈し、長辺 95cm、短辺 50cm、深さ 75cm を測る。底には直径 15cm、深さ 15cm の柱穴を有する。縄文土器、スクレイパーが出土した。

縄文土器　75 ～ 78 は深鉢。75 は条痕文を有する口縁部片。76 は同様の胴部片。77 は胎土に滑石が混ざる曽畑式系統の胴部片である。78 は外面に隆起文をもつ轟Ｂ式系統の胴部片である。

石器　136 はスクレイパー。比較的大型で素材の形状をあまり変えず、側縁部の一部に調整を加えて刃部を作り出す。安山岩製。

SK038（第 23 図、図版 18）

調査区の南寄りで検出した。SK039 と近接する。方形を呈し、長辺 110cm、短辺 80cm、深さ 20cm を測る。出土遺物は無かった。

SK039（第 23・24 図、図版 23）

調査区の南寄りで検出した。SK038 と近接する。円形で直径 90cm 程、深さ 20cm を測る。白磁が出土した。

白磁　79 は小皿。2 分の 1 程の破片。復元口径 12.2cm、器高 4.3cm を測る。見込みは蛇目釉剥ぎをする。

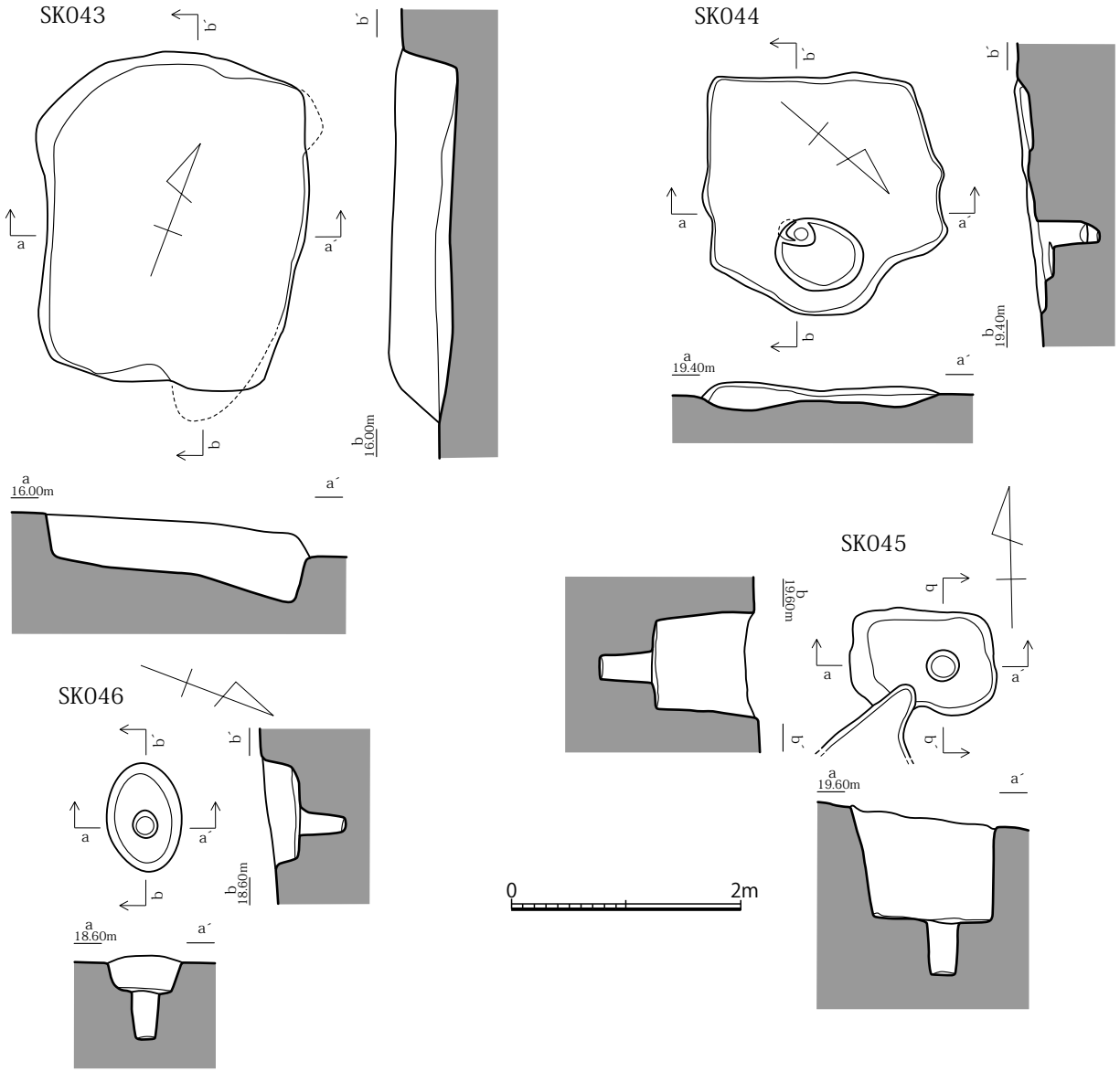
SK040（第 23・24・33 図、図版 19・23・26）

調査区の南寄りで検出した。隅丸方形を呈し、一辺 90cm、深さ 30cm を測る。磁器と砥石が出土した。

染付　80 は小鉢。口縁部片で復元口径 10.2cm を測る。外面に型紙摺りによって草花文を表す。

白磁　81 は猪口。３分の 1 程の破片で、復元口径 7.0cm、器高 4.6cm を測る。

石器　137 は砥石。小片で 1 面の砥面を残す。凝灰岩製。



第 26 図　Ⅰ区 SK043・044・045・046 実測図（1/60）

SK041（第 23 図）

調査区の南側で検出した。隅丸方形を呈し、長軸 90cm、短軸 70cm、深さ 50cm を測る。底面に直径 20cm、深さ 15cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK042（第 23・25 図、図版 24）

調査区の南側で検出した。やや歪な楕円形を呈し、長軸 130cm、短軸 100cm、深さ 55cm を測る。底には直径 20cm、深さ 10cm の柱穴を有する。弥生土器が出土した。

弥生土器　82 は甕。底部片である。

SK043（第 25・26 図、図版 24）

調査区の南側で検出した。SD051 を切る。歪な隅丸長方形を呈し、長辺 285cm、短辺 240cm、深さ 50cm を測る。弥生土器、土師器が出土した。

弥生土器　83・84 は甕。83 は口縁部から胴部中位にかけての破片で、復元口径 24.8cm を測る。口縁は鋤形に近いくの字形をなし、胴部は砲弾形となる。84 は底部の小片。85 は壺か。底部片である。

土師器　86 は高坏。坏部の底部片である。87・88 は手捏土器。いずれも椀形を呈し、87 は口径 3.7cm、器高 2.6cm、88 は口径 2.9cm、器高 1.95cm を測る。

SK044（第 26・33 図、図版 19・26）

調査区南側のやや西寄りに位置する。SK045 に接する。歪な方形を呈し、一辺 200cm 程、深さ 20cm 程を測る。底面の北側に直径 20cm、深さ 50cm の柱穴を有する。打製石鏃が出土した。

石器　138 は打製石鏃。尖基式で完形。石材に安山岩を用いる。

SK045（第 26 図、図版 19）

調査区南側のやや西寄りに位置する。SK044 に近接し、SI009 に切られる。隅丸長方形を呈し、長辺 125cm、短辺 90cm、深さ 90cm を測り、底面に直径 25cm、深さ 40cm の柱穴を有する。出土遺物は無い。

SK046（第 26 図、図版 20）

調査区南側のやや西寄りに位置する。楕円形を呈し、長軸 95cm、短軸 65cm、深さ 30cm を測る。底面に直径 20cm、深さ 40cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

（4）溝

調査区では複数の溝を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

SD047（第 5 図、図版 2）

調査区の北側で検出した。SD049 に切られる。南北方向に伸びており、検出できた範囲で長さ 30.5m、最大幅 1 m を測る。出土遺物は無かった。

SD048（第 5 図、図版 2）

調査区の北側で検出した。SD049 と切り合うが前後関係は不明である。南北方向に伸び調査区外へと続いている。途中途切れるが検出できた範囲で長さ 38.5m、最大幅 40cm を測る。出土遺物は無かった。

SD049（第 5 図、図版 2）

調査区の北側で検出した。SD047 を切る。SD048 との前後関係は不明である。北東から南西方向に伸び、調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 33m、最大幅 50cm を測る。出土遺物は無かった。

SD050（第 5 図、図版 4 ・20）

調査区の東側で検出した。SI004 を切る。東西方向に伸びており、東側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 13m、最大幅 1.6m を測る。出土遺物は無い。

SD051（第 5・27・33 図、図版 5・24・26）

調査区の南側で検出した。SK043 に切られる。東西方向に伸びている。検出できた範囲で長さ 13m、最大幅 1.7m を測る。弥生土器、土師器、須恵器、打製石斧、磨製石斧が出土した。

弥生土器　89 ～ 93 は甕。89 は如意形の口縁部片で、端部に刻目を施文する。90・92・93 は底部片。91 は頸部片で壺の可能性もある。大型のM字突帯を 1 条めぐらす。

土師器　94・95 は高坏。94 は坏部片。端部を欠く。95 は脚部片。96・97 は手捏土器。いずれも椀形を呈す。96 は完形で口径 3.4cm、器高 1.7cm を測る。97 は口縁部を欠損する。

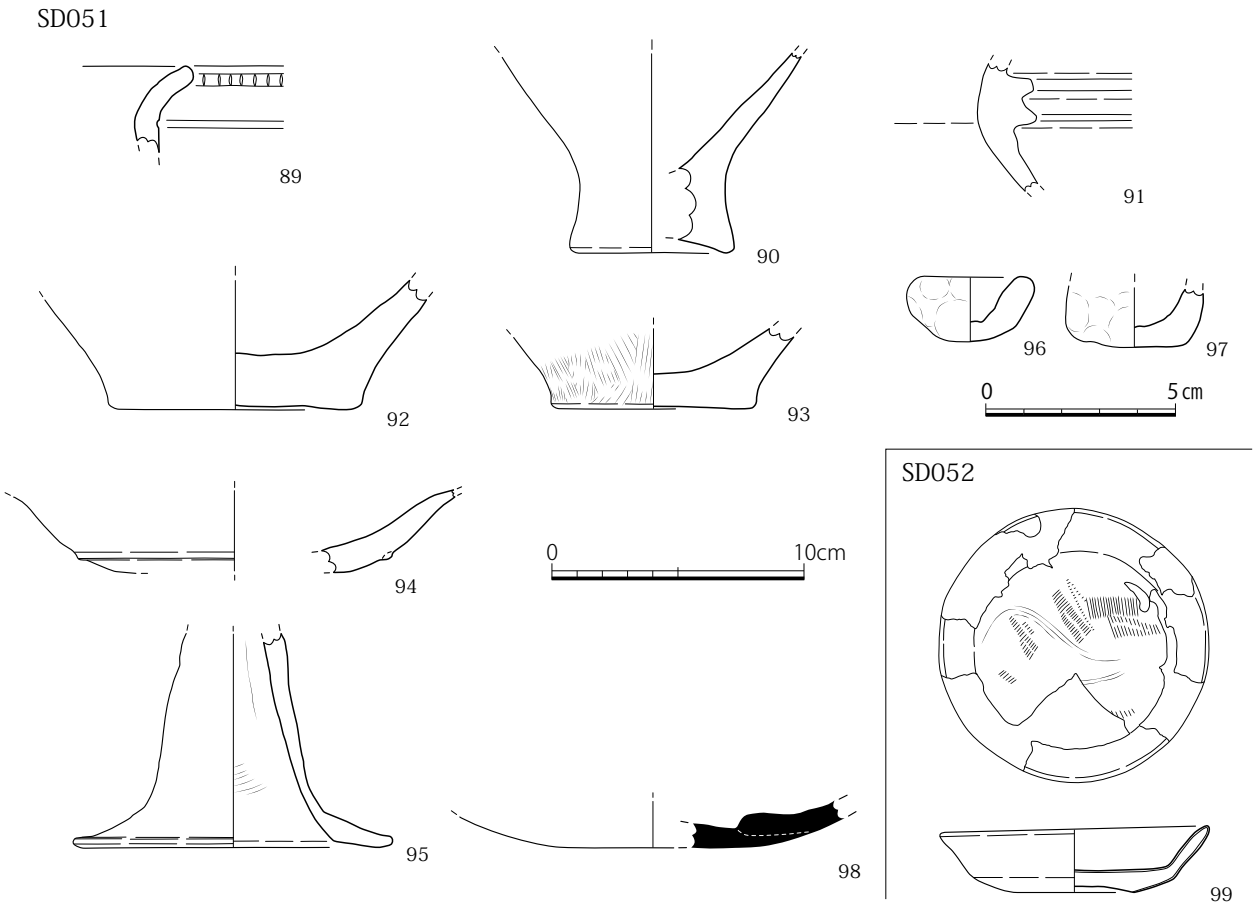
須恵器　98 は壺。底部片か。

石器　139 は扁平打製石斧。刃部を欠く。緑泥片岩製。140 は磨製石斧。基部を欠く。緑泥片岩製。

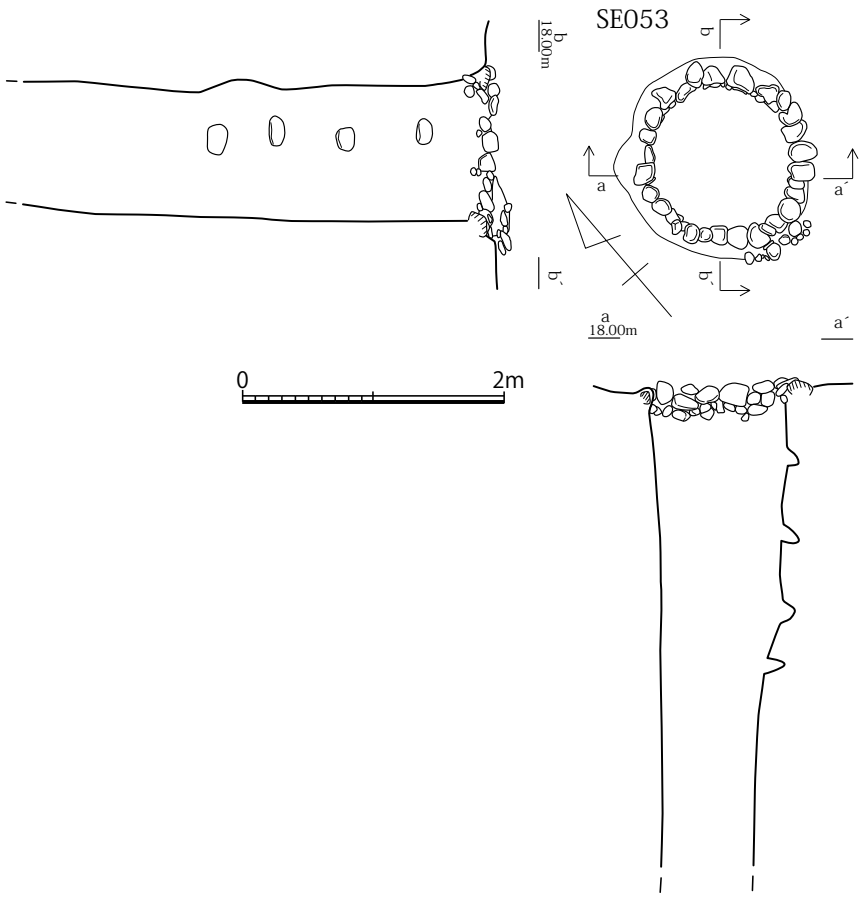
SD052（第 5 ・27 図、図版 24）

調査区の南側で検出した。南北に伸び、南側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 8 m、最大幅 2.8m を測る。青磁が出土した。

青磁　99 は皿。 5 分の 4 程度を残し、口径 10.8cm、底径 4.6cm、器高 2.65cm を測る。同安窯系の製品。



第 27 図　Ⅰ区出土土器実測図 11（1/3・1/2）



第 28 図　Ⅰ区 SE053 実測図（1/60）

（5）井戸

SE053（第 28・29 図、図版 20・24）

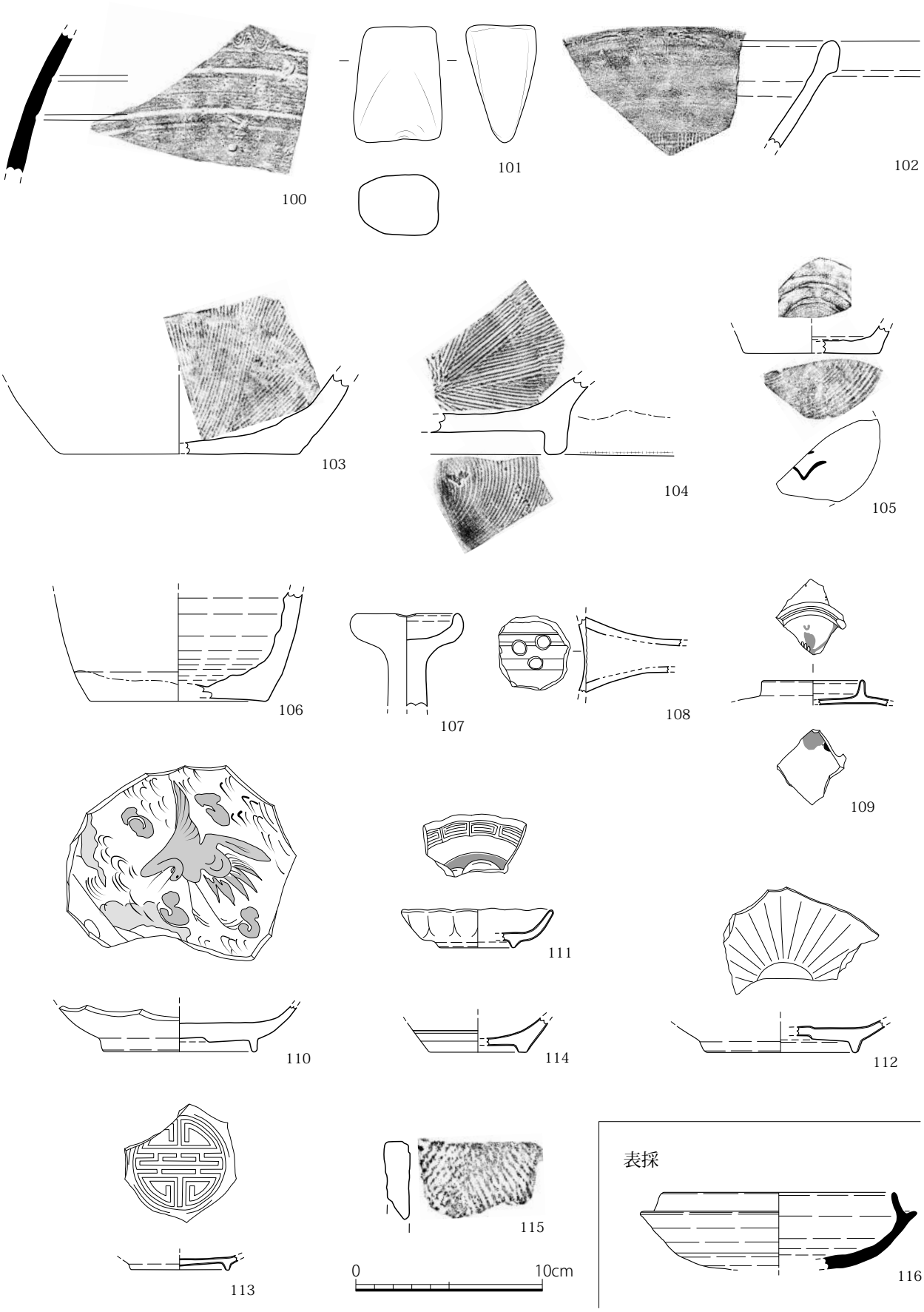
調査区中央の北寄りに位置する。直径約 1m の円形を呈す。3.6m の深さまで掘り下げたが完掘にはいたらなかった。上部には拳大の川原石をめぐらせる。壁面には足掛けの抉りがある。近世の遺物が出土した。

須恵器　100 は甕。口縁部の破片で端部を欠く。外面には波状文を櫛描きする。

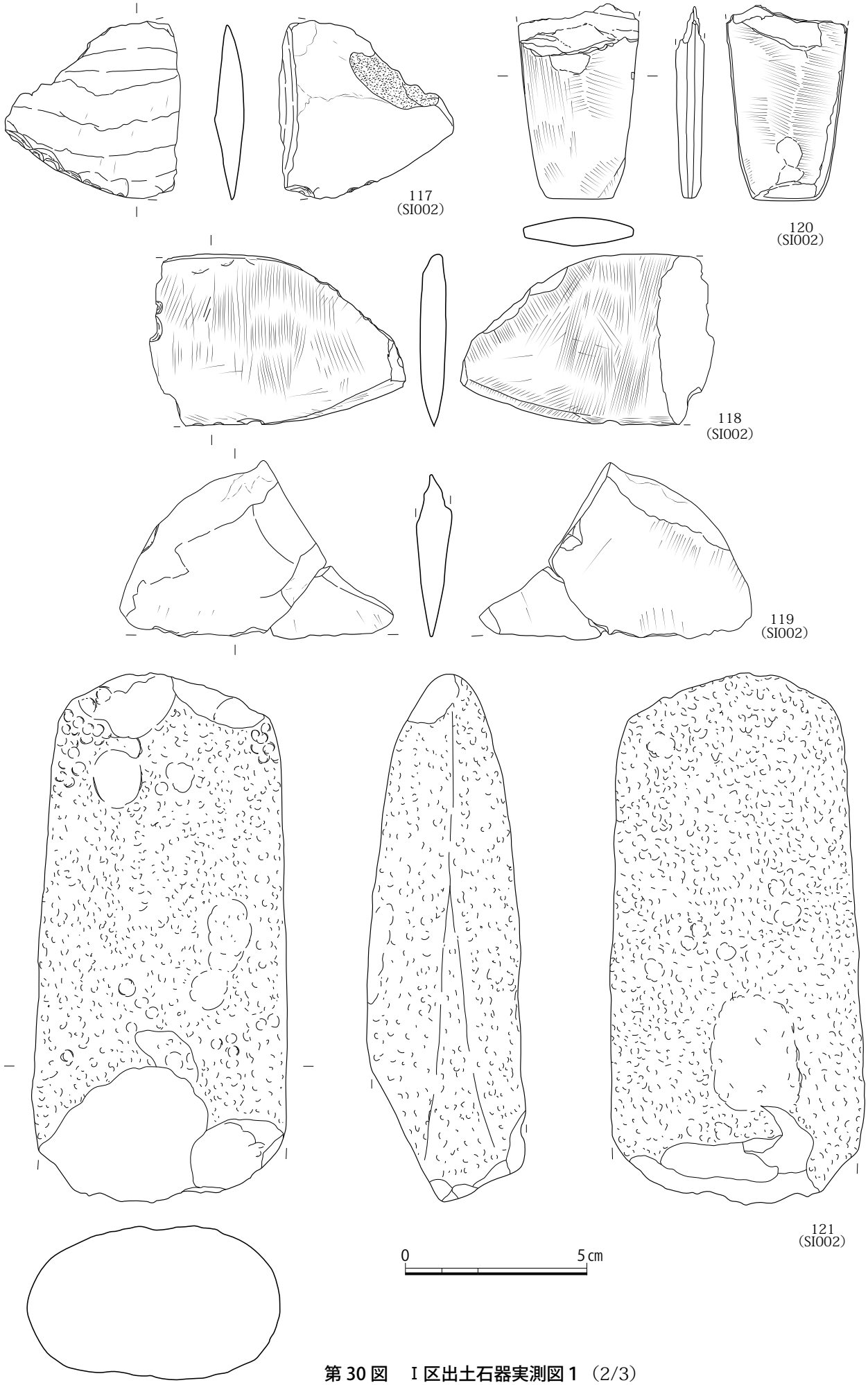
土製品　101 は楔形不明品。

陶器　102 ～ 103 は擂鉢。102 は口縁部片。103・104 は底部片で 104 は高台が付く。内面に擂目を施文し、鉄釉を施す。上野・高取系。105・106 は壺の底部片。105 は外面に

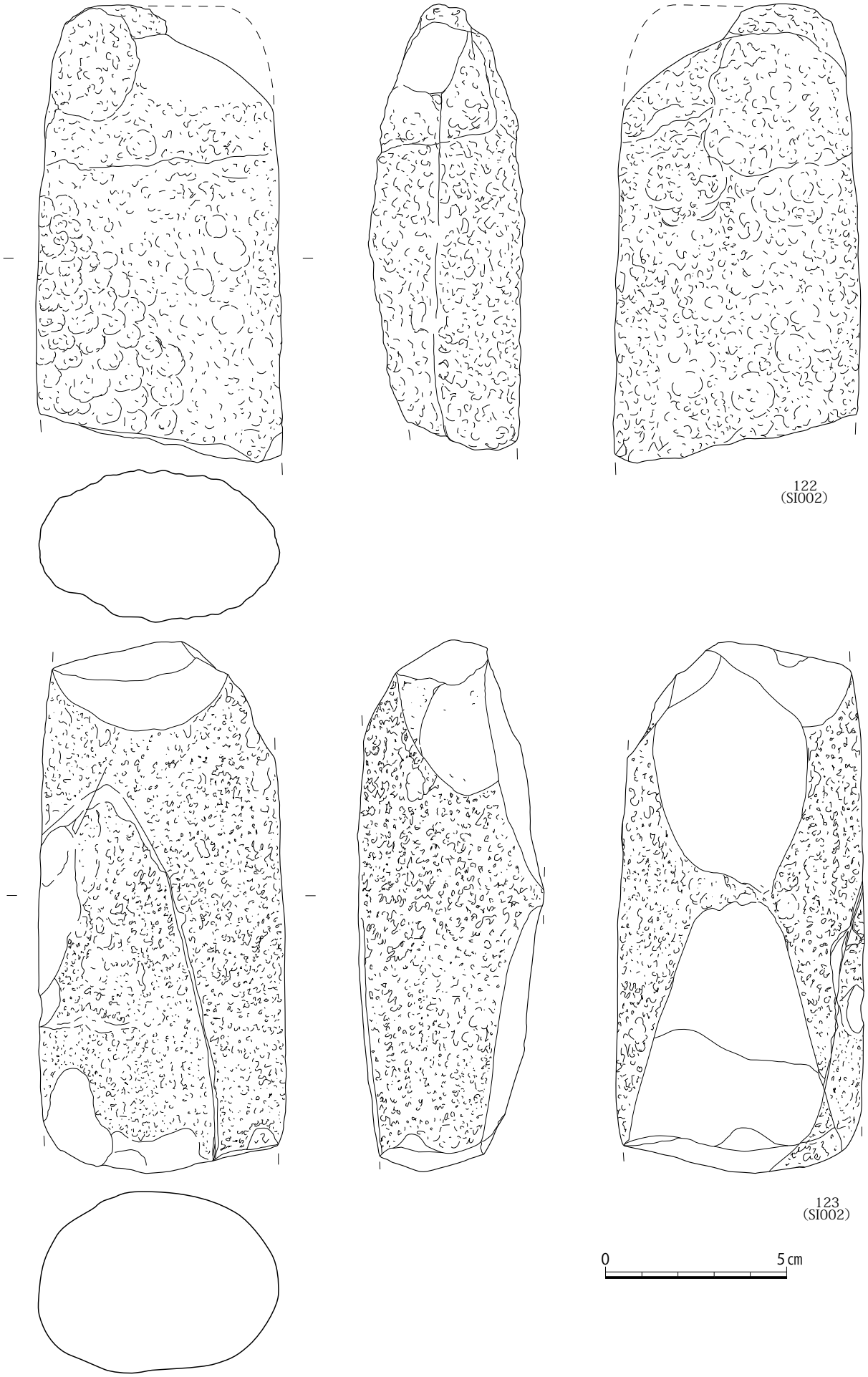
SE053



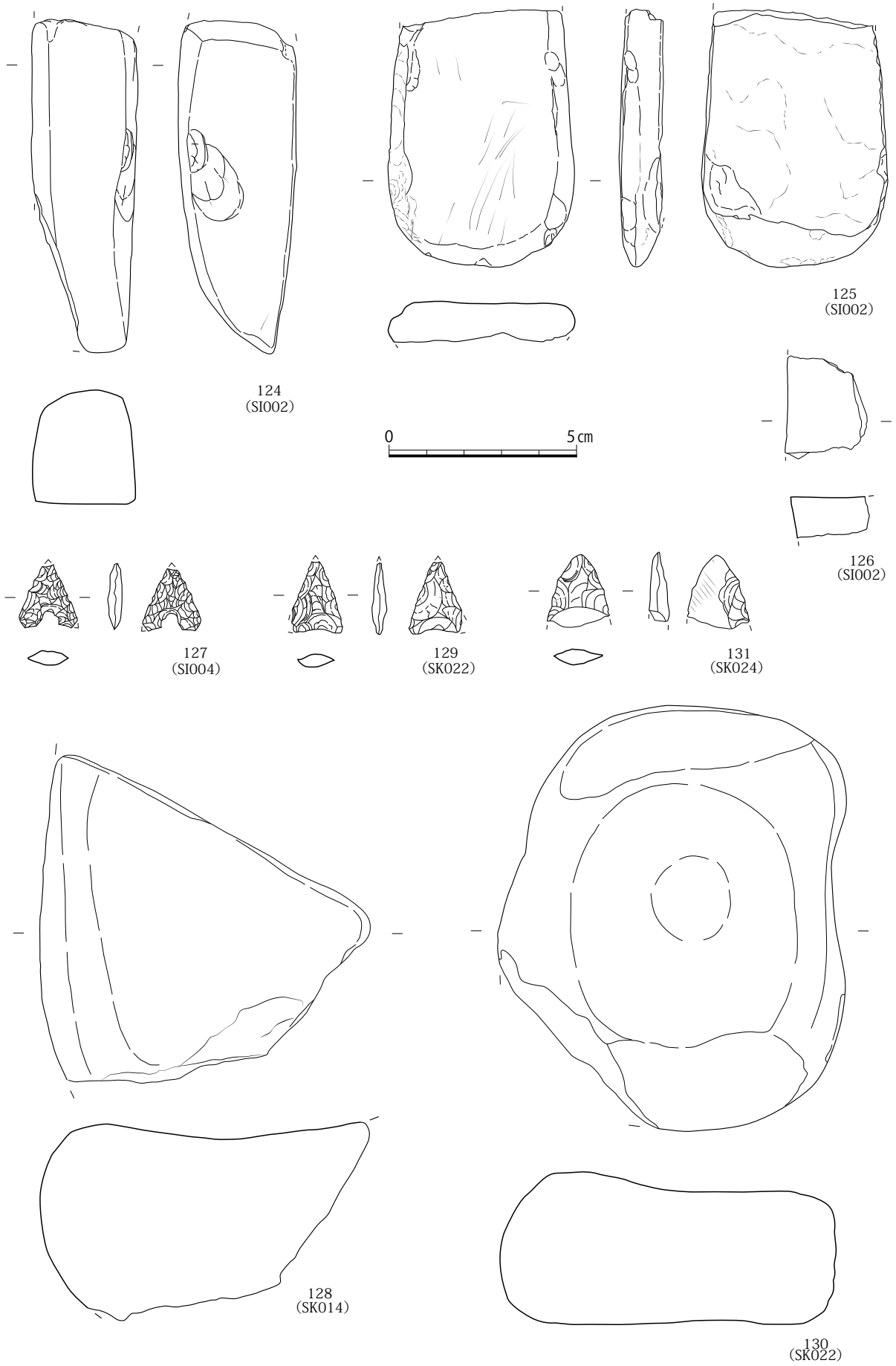
第 29 図　Ⅰ区出土土器実測図 12（1/3）



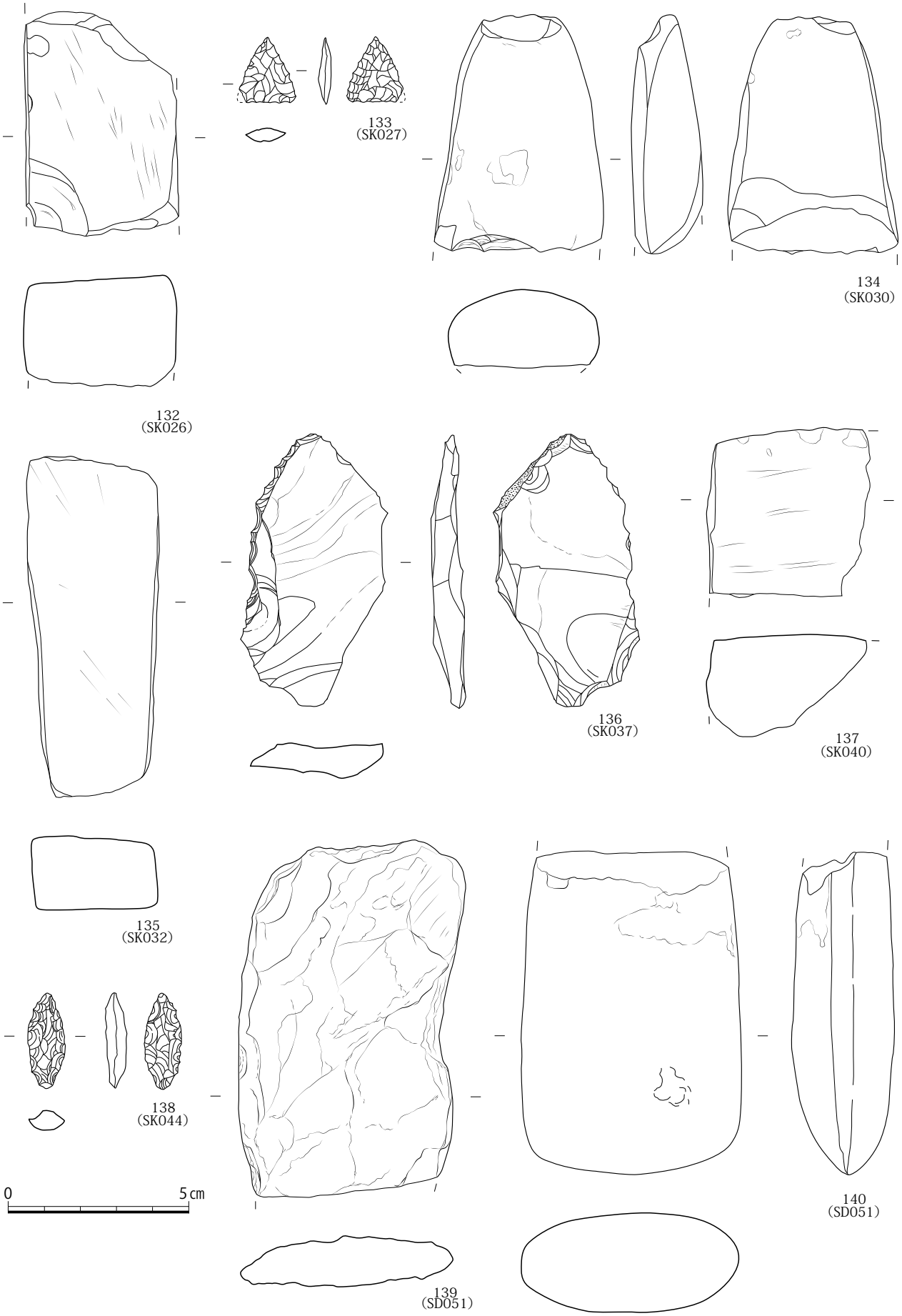
第 30 図　Ⅰ区出土石器実測図 1（2/3）



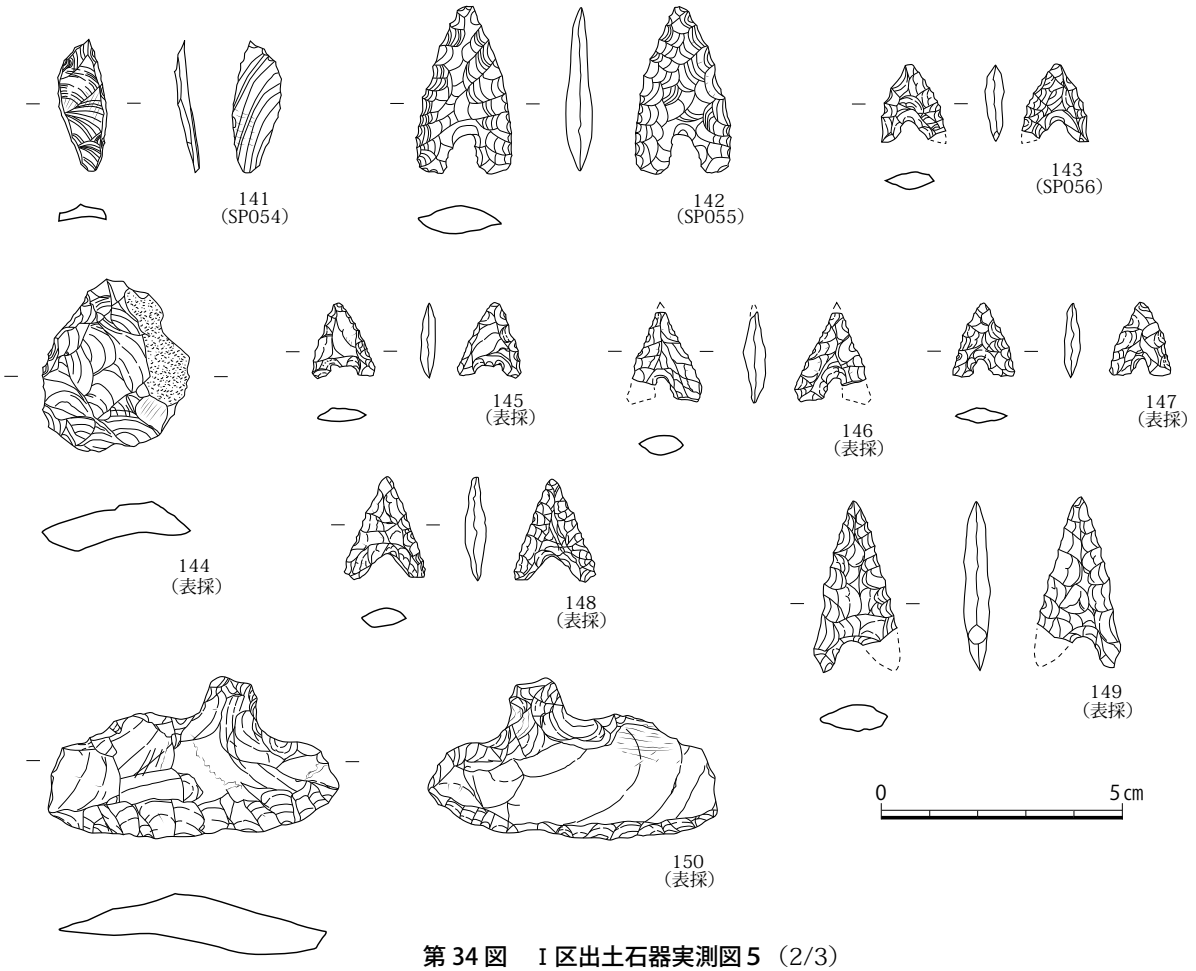
第 31 図　Ⅰ区出土石器実測図 2（2/3）



第 32 図　Ⅰ区出土石器実測図 3（2/3）



第 33 図　Ⅰ区出土石器実測図４（2/3）



第 34 図　Ⅰ区出土石器実測図 5（2/3）

白化粧土を施し、底部外面に墨書を有す。107 は秉燭。坏部を欠損する。唐津系。108 は水注。注口部片。

色絵　109 は碗蓋。摘部の小片で、染付に赤の色絵具で絵付けする。

染付　110・111。110 は口縁部を欠く。見込みに鶴波文を絵付けする。蛇目凹形高台。111 は 5 分の 1 程度の破片。花形に型打ち成形し、内面をゴスや白土で絵付けする。

白磁　112・113。いずれも底部片。112 は菊花形に型打ち成形する。蛇目凹形高台。113 は見込みに寿字文を線彫りする。

青磁　114 は碗。底部の小片である。

瓦　115 は平瓦か。小片で凸面には縄目タタキ痕を有する。

（6）柱穴（第 5 ・34 図、図版 26）

調査区では多くの柱穴を検出した。柱穴出土の石器のうち主要なものだけを以下に報告する。

石器　141 はナイフ形石器。漆黒色を呈す黒曜石製。SP054 出土。142・143 は打製石鏃。142 は完形の大型品。凹基式。SP055 出土。143 は片脚を欠く。凹基式。SP056 出土。いずれも姫島産黒曜石製。

（7）採集遺物（第 29・34 図、図版 24・26）

須恵器　116 は坏身。3 分の 1 程の破片で、復元口径 15.0cm を測る。

石器　144 はスクレイパー。剥離調整はあまり行わない。姫島産黒曜石製。145 ～ 149 は打製石鏃。145 は完形。凹基式。安山岩製。146 は片脚を欠く。凹基式。姫島産黒曜石製。147 は完形。凹基式。姫島山黒曜石製。148 は完形。凹基式。姫島産黒曜石製。149 は大型品。片脚を欠く。凹基式。片岩製か。150 は石匙。完形。比較的整った形状である。姫島産黒曜石製。

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	SI001	土師器	坏蓋	復元口径11.4 残高2.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの細礫を少量含む	内:赤10R 5/8 外:橙2.5YR 6/8	口縁部片	
2	SI001	須恵器	坏蓋	残高1.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～2.5mmの細礫を含む	内外:灰5Y 5/1	天井部片	
3	SI001	須恵器	坏身	復元口径11.4 器高4.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部一部回転ヘラケズリ	やや不良	微細～4mmの白色細礫を含む	内:灰7.5Y 5/1 外:青灰5B 5/1	1/2程度	ヘラ切り未調整
4	SI001	須恵器	坏身	残高2.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	精良	内外:灰5Y 6/1	口縁部片	
5	SI002	弥生土器	甕	口径25.4 底径7.2 器高26.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4mmの細礫を含む	内:橙7.5YR 7/6,黄橙7.5YR 7/8 外:橙2.5YR 6/8,橙7.5YR 7/6	ほぼ完形	
6	SI002	弥生土器	甕	復元口径33.6 残高17.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ・ヨコハケ	良好	微細～5mmの中礫を含む	内:赤橙10R 6/6,黄橙10YR 7/8 外:赤橙10R 6/6,明黄褐10YR 7/6	口縁部～胴部片	
7	SI002	弥生土器	甕	復元口径33.2 残高22.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ・ヨコハケ	良好	微細～3mmの細礫を少量含む	内外:橙5YR 6/6	口縁部～胴部片	
8	SI002	弥生土器	甕	残高4.35	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～7mmの白色中礫を多く含む	内:橙5YR 6/8,明黄褐10YR 6/6 外:橙2.5YR 6/6,橙10YR 4/1	口縁部片	
9	SI002	弥生土器	甕	底径12.4 残高13.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～7mmの白色中礫を含む	内:明赤褐2.5YR 5/6 外:明赤褐2.5YR 5/6,橙5YR 6/6	胴部～底部片	
10	SI002	弥生土器	甕	復元底径7.0 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの白色細礫を少量含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:橙2.5YR 6/8,橙7.5YR 7/6	底部片	
11	SI002	弥生土器	壺	復元口径15.8 残高23.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ミガキ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内:明赤褐2.5YR 5/6 外:橙5YR 6/6	口縁部～胴部片	
12	SI002	弥生土器	壺	残高2.5	内:ヨコナデ→貝殻施文 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙5YR 7/6	口縁部片	
13	SI002	弥生土器	壺	残高3.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～6mmの中礫を多く含む	内:橙2.5YR 6/6 外:橙2.5YR 6/6,橙5YR 6/6	底部片	
14	SI002	弥生土器	壺	底径9.3 残高15.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～6mmの白色中礫を多く含む	内外:赤10R 5/8	胴部～底部片	
15	SI003	土師器	甕	口径20.2 残高7.1	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～1mmの白色粗砂・金雲母を含む	内外:橙7.5YR 7/6	口縁部～胴部片	
16	SI003	須恵器	坏蓋	残高2.75	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内:灰オリーブ5Y 6/2 外:灰5Y 6/1	天井部片	
17	SI003	須恵器	坏蓋	残高2.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細な白色粗砂を含む	内外:灰5Y 6/1	口縁部片	
18	SI003	須恵器	坏蓋	残高2.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内外:灰オリーブ5Y 6/2	口縁部片	
19	SI004	土師器	壺	残高6.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～3.5mmの白色細礫を多く含む	内:橙5YR 6/6 外:橙2.5YR 6/8	胴部片	
20	SI004	土師器	埦	復元口径15.2 器高5.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～5mmの白色・黒色中礫を多く含む	内:橙2.5YR 6/8 外:明赤褐5YR 5/8	4/5程度	
21	SI004	土師器	高坏	残高6.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～4mmの細礫を含む	内:橙5YR 6/8 外:橙5YR 6/8,明赤褐5YR 5/8	脚部1/2程度	
22	SI005	土師器	甕	復元口径16.4 残高10.1	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの白色粗砂・金雲母を含む	内外:橙2.5Y 6/8	口縁部～胴部片	23と同一個体の可能性あり
23	SI005	土師器	甕	復元口径16.4 残高10.1	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～5mmの白色・黒色中礫を含む	内外:橙5YR 6/6	口縁部～胴部片	22と同一個体の可能性あり
24	SI005	土師器	埦	復元口径15.85 器高7.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコハケ	良好	微細～4mmの白色・黒色細礫を含む	内外:浅黄橙10YR 8/3	2/3程度	
25	SI005	須恵器	坏身	復元口径12.2 残高3.8	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～4mmの白色・黒色細礫を含む	内外:灰7.5Y 6/1	口縁部～底部片	
26	SI007	弥生土器	壺	残高5.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→貝殻施文	良好	微細～2.5mmの白色粗砂を多く含む	内:浅黄2.5Y 7/3,黄灰2.5Y 5/1 外:浅黄2.5Y 7/4	肩部片	
27	SI008	弥生土器	甕	口径25.6 底径8.2 器高28.2	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4mmの白色・黒色細礫を含む	内:橙5YR 6/6 外:にぶい橙5YR 6/4,橙5YR 7/6	3/4程度	
28	SI008	弥生土器	壺？	残高3.25	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6,明赤褐5YR 5/6 外:にぶい橙7.5YR 7/4	口縁部片	
29	SI008	弥生土器	甕	復元底径9.0 残高4.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～7mmの中礫を多く含む	内:灰黄褐10YR 6/2 外:にぶい黄橙10YR 7/3,灰黄褐10YR 5/2	底部片	
30	SI009	土師器	壺	残高5.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ケズリ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内:橙5YR 7/6 外:橙2.5YR 6/6,にぶい橙7.5YR 7/4	底部片	
31	SI009	土師器	高坏	復元脚部径12.6 残高9.8	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの中礫を少量含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙5YR 7/6	脚部片	
32	SI009	土師器	甑	復元口径28.6 残高27.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内外:黄橙10YR 8/6	1/2程度	
33	SI009	須恵器	坏身	復元口径12.8 残高3.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:青灰5B 6/1 外:青灰5B 5/1	口縁部片	
34	SI009	須恵器	坏身	復元口径10.0 残高2.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1.5mmの白色粗砂を少量含む	内外:青灰10BG 6/1	口縁部片	
35	SI009	須恵器	皿？	復元底径11.0 残高1.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粗砂を少量含む	内:青灰10BG 6/1 外:青灰10BG 5/1	底部片	
36	SK013	弥生土器	壺	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの細礫を少量含む	内外:黄橙10YR 8/6	底部片	

表２　Ⅰ区出土遺物観察表１

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
37	SK013	須恵器	壺？	残高4.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内:灰白2.5Y 7/1 外:にぶい黄2.5Y 6/3	肩部片	
38	SK014	弥生土器	甕	復元口径23.2 残高17.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	やや不良	微細～6mmの中礫を多く含む	内:黄橙10YR 8/6 外:橙7.5YR 7/6	口縁部～胴部片	
39	SK015	弥生土器	甕	復元底径9.0 残高3.15	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～5mmの白色中礫を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:にぶい黄橙10YR 6/4	底部片	
40	SK015	弥生土器	壺	残高4.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内外:にぶい褐7.5YR 5/4	口縁部片	
41	SK016	弥生土器	甕	復元底径7.4 残高9.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4mmの細礫を多く含む	内:褐灰10YR 4/1 外:橙2.5YR 6/6	胴部～底部片	
42	SK016	弥生土器	甕	残高2.95	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4mmの白色細礫を多く含む	内外:明褐7.5YR 5/6	口縁部片	
43	SK019	弥生土器	甕	復元底径10.4 残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～5mmの白色中礫を多く含む	内:橙5YR 7/8 外:にぶい橙7.5YR 7/4	底部片	
44	SK019	弥生土器	甕？	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内:にぶい橙5YR 6/4 外:にぶい橙2.5YR 6/4	底部片	
45	SK023	陶器	甕	復元底径10.0 残高6.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1.5mmの粗砂を少量含む	内外:灰N 6/	底部片	
46	SK023	染付	鉢	復元口径15.4 残高6.1	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白10Y 8/1 釉:明青灰10BG 7/1	1/5程度	
47	SK024	弥生土器	壺	復元底径9.4 残高5.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの細礫を含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙5YR 6/6,にぶい橙5YR 6/4	胴部～底部片	
48	SK024	須恵器	埦	復元口径11.85 復元底径7.2 器高3.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ→高台ナデ付け	良好	微細～3.5mmの白色・黒色細礫を含む	内:灰10Y 6/1 外:灰N 5/	ほぼ完形	
49	SK024	染付	皿	底径8.3 残高2.0	内:ロクロナデ→型打ち→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→型打ち→施釉→高台内蛇目釉剥ぎ	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明青灰10BG 7/1	口縁部欠損	蛇目凹形高台
50	SK025	弥生土器	甕	底径6.0 残高6.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4.5mmの白色・黒色細礫を含む	内:橙5YR 7/6 外:赤橙10R 6/6,赤橙10R 6/8	胴部～底部片	
51	SK031	瓦質土器	釜？	胴部最大径22.0 残高9.3	内:ヨコナデ 外:型押し？	やや不良	微細～0.5mmの粗砂を少量含む	内:灰N 4/ 外:灰N 5/	胴部片	蓋の可能性もあり
52	SK031	瓦質土器	水注	残高9.4	内:ヨコナデ・ナデ 外:ヨコナデ・ナデ	やや不良	微細～1.5mmの粗砂を少量含む	内:灰N 5/ 外:灰N 4/	注口部片	
53	SK031	瓦質土器	釜蓋	口径11.0 器高2.9	内:ヨコナデ 外:型押し	やや不良	微細～1mmの白色粗砂を多く含む	内:灰10Y 4/1 外:灰白5Y 7/1	1/2程度	
54	SK031	陶器	鉢	復元口径18.6 残高2.8	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	素地:にぶい黄橙10YR 6/4 釉:黒10YR 1.7/1	口縁部片	
55	SK031	陶胎染付	碗	復元口径7.0 残高4.2	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:浅黄橙10YR 8/4 釉:灰白2.5GY 8/1	口縁部～胴部片	
56	SK031	陶器	瓶	底径7.8 残高15.9	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ→施釉→上絵	良好	精良	素地:灰白2.5Y 8/2 釉:灰黄2.5Y 7/2	2/3程度	関西系
57	SK031	白磁	瓶	底径5.2 残高11.3	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細な粗砂を含む	素地:灰白2.G5Y 8/1 釉:明オリーブ灰5GY 7/1	胴部～底部片	
58	SK031	染付	皿	復元底径9.0 残高1.5	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→施釉→高台内蛇目釉剥ぎ	良好	精良	素地:灰白10Y 8/1 釉:明青灰10BG 7/1	1/3程度	蛇目凹形高台
59	SK031	染付	碗	復元口径12.0 残高2.7	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白10Y 7/1 釉:明緑灰5G 7/1	口縁部～胴部片	
60	SK031	染付	碗	復元口径13.2 残高3.3	内:ロクロナデ→型押し→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→型押し→施釉	良好	精良	素地:灰白2.5GY 8/1 釉:明青灰10BG 7/1	口縁部片	波状口縁
61	SK031	染付	猪口	復元口径6.4 底径3.0 器高6.4	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白10Y 8/1 釉:灰白10Y 7/1	1/2程度	
62	SK031	染付	不明	残高3.1	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白5Y 8/2 釉:明青灰10BG 7/1	破片	
63	SK032	瓦質土器	火舎？	底径19.7 器高8.2	内:ナデ→ミガキ 外:ナデ→ミガキ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	ほぼ完形	「三」の刻書
64	SK032	陶器	秉燭	口径5.2 残高3.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～4mmの白色細礫を少量含む	内外:橙7.5YR 7/6	坏部欠損	唐津系
65	SK032	陶器	水指	復元口径13.2 残高8.1	内:回転ナデ→施釉 外:回転ナデ→施釉	良好	微細な粗砂を含む	素地:にぶい黄橙10YR 6/4 釉:暗赤褐5YR 3/2	口縁部片	
66	SK032	陶器	擂鉢	残高9.4	内:ロクロナデ→擂目施文→施釉 外:ロクロナデ	良好	微細な粗砂を含む	素地:にぶい黄橙10YR 7/4 釉:褐灰5YR 4/1	口縁部片	上野・高取系
67	SK032	陶器	擂鉢	残高5.7	内:ロクロナデ→擂目施文→施釉 外:ロクロナデ	良好	微細な粗砂を含む	素地:淡黄2.5Y 8/4 釉:黒7.5YR 2/1	口縁部片	上野・高取系
68	SK032	染付	碗	復元底径4.0 残高3.3	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明緑灰10G 7/1	底部片	
69	SK032	白磁	紅皿	口径4.6 底径1.4 器高1.6	内:型押し→施釉 外:型押し→施釉	良好	精良	内:灰白7.5Y 8/1 外:灰白2.5Y 8/1,淡赤橙2.5YR 7/4	完形	
70	SK032	白磁	角皿	残高2.1	内:糸切り細工→白土描法→施釉 外:糸切り細工→施釉	良好	精良	素地:灰白10Y 8/1 釉:明緑灰5G 7/1	破片	
71	SK036	縄文土器	深鉢	残高4.8	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→隆起文	良好	微細～3mmの白色・黒色細礫を含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:浅黄橙10YR 8/3,橙7.5YR 7/6	口縁部片	轟B式

表３　Ⅰ区出土遺物観察表２

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
72	SK036	縄文土器	深鉢	残高4.4	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→隆起文	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:浅黄2.5Y 8/3	口縁部片	轟B式
73	SK036	縄文土器	深鉢	残高4.5	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→隆起文	良好	微細～4.5mmの白色・黒色細礫を含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:にぶい橙7.5YR 6/4	胴部片	轟B式
74	SK036	縄文土器	深鉢	残高4.5	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→隆起文	良好	微細～1mmの白色粗砂・黒雲母を含む	内:灰黄褐10YR 6/2 外:灰黄褐10YR 6/2,浅黄橙10YR 8/3	胴部片	轟B式
75	SK037	縄文土器	深鉢	残高6.7	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→条痕文	良好	微細～2mmの白色粗砂・黒雲母を含む	内:橙5YR 7/6 外:橙5YR 6/6	口縁部片	輪積痕あり
76	SK037	縄文土器	深鉢	残高4.8	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→条痕文	良好	微細～3mmの白色細礫・黒雲母を含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:にぶい黄橙10YR 7/3,橙7.5YR 6/6	胴部片	
77	SK037	縄文土器	深鉢	残高2.9	内:ナデ 外:ナデ→施文	良好	微細～4mmの白色・黒色細礫を多く含む	内:橙5YR 6/6 外:にぶい橙5YR 6/4	胴部片	曽畑式
78	SK037	縄文土器	深鉢	残高4.3	内:ナデ→条痕文 外:ナデ→隆起文	良好	微細～1mmの白色・黒色粗砂を含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:にぶい黄橙10YR 7/3	胴部片	轟B式
79	SK039	白磁	小皿	復元口径12.2 復元底径4.4 器高4.3	内:ロクロナデ→施釉→見込蛇目釉剥ぎ 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細な粗砂を含む	素地:灰白5Y 7/2 釉:灰白2.5Y 8/2	1/4程度	
80	SK040	染付	小鉢	復元口径10.2 残高5.2	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	精良	素地:灰白5Y 7/1 釉:明青灰5BG 7/1	口縁部片	型紙摺
81	SK040	白磁	猪口	復元口径7.0 底径3.2 器高4.6	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:灰白2.5Y 8/2 釉:明オリーブ灰2.5GY 7/1	1/3程度	
82	SK042	弥生土器	甕	復元底径11.1 残高5.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの中礫を含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:橙2.5YR 6/8	底部片	
83	SK043	弥生土器	甕	復元口径24.8 残高10.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～4mmの白色細礫を多く含む	内外:橙7.5YR 7/6	口縁部～胴部片	
84	SK043	弥生土器	甕	復元底径7.0 残高4.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:明黄褐10YR 7/6 外:橙5YR 6/6,にぶい黄橙10YR 7/4	底部片	
85	SK043	弥生土器	壺？	復元底径8.2 残高5.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの白色細礫を多く含む	内:橙5YR 6/6 外:橙7.5YR 6/6	底部片	
86	SK043	土師器	高坏	残高1.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1.5mmの粗砂を少量含む	内外:橙2.5YR 6/8	坏部片	
87	SK043	土師器	手捏土器	口径3.7 器高2.6	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～3mmの細礫を少量含む	内:灰白2.5Y 8/2 外:灰白2.5Y 8/2,7/1	ほぼ完形	
88	SK043	土師器	手捏土器	口径2.9 器高1.95	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～3mmの細礫を少量含む	内外:淡黄2.5Y 8/3	4/5程度	
89	SD051	弥生土器	甕	残高3.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→刻目	良好	微細～5mmの白色中礫を多く含む	内外:明赤褐2.5YR 5/6	口縁部片	
90	SD051	弥生土器	甕	復元底径6.6 残高8.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの白色細礫を多く含む	内:橙5YR 6/6 外:明褐7.5YR 5/6	底部片	
91	SD051	弥生土器	壺or甕	残高5.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内:にぶい黄2.5Y 6/3 外:灰黄2.5Y 6/2	頸部片	
92	SD051	弥生土器	甕	復元底径10.2 残高5.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの白色細礫を多く含む	内外:橙7.5YR 6/6	底部片	
93	SD051	弥生土器	甕	復元底径8.2 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～5mmの細礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:浅黄橙7.5YR 8/4,灰5Y 4/1	底部片	
94	SD051	土師器	高坏	残高3.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内外:橙2.5YR 6/8	坏部片	
95	SD051	土師器	高坏	脚部径12.85 残高8.6	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの白色粗砂を少量含む	内外:黄橙7.5YR 7/8	脚部片	
96	SD051	土師器	手捏土器	口径3.4 器高1.7	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～4mmの白色細礫を含む	内外:灰白2.5Y 8/2	完形	
97	SD051	土師器	手捏土器	底径2.9 残高1.6	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～2.5mmの細礫を含む	内外:灰白10YR 8/1	口縁部欠損	
98	SD051	須恵器	壺	残高1.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内:灰白2.5Y 7/1 外:黄灰2.5Y 5/1,灰黄2.5Y 6/2	底部片	
99	SD052	青磁	皿	口径10.8 底径4.6 器高2.65	内:ロクロナデ→施文→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細～1mmの白色・黒色粗砂を少量含む	素地:灰白2.5Y 7/1 釉:灰オリーブ5Y 6/2	4/5程度	同安窯系
100	SE053	須恵器	甕	残高7.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→波状文施文	良好	微細～1mmの粗砂を少量含む	内:灰白N 7/ 外:灰N 6/	頸部片	
101	SE053	土製品	不明	高6.2 幅4.8 厚3.7	ナデ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:橙5YR 7/6	完形	楔形
102	SE053	陶器	播鉢	残高5.8	内:ロクロナデ→播目施文→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内:赤10R 5/6,黒褐7.5YR 3/2 外:黒褐5YR 3/1	口縁部片	上野・高取系
103	SE053	陶器	播鉢	復元底径13.2 残高4.3	内:ロクロナデ→播目施文→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:暗赤灰10R 4/1	底部片	上野・高取系
104	SE053	陶器	播鉢	残高4.2	内:ロクロナデ→播目施文→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	内:赤褐2.5YR 4/6 外:灰褐7.5YR 4/2,浅黄橙10YR 8/4	底部片	上野・高取系
105	SE053	陶器	壺	復元底径7.4 残高1.5	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ→底部糸切り→白化粧土塗布	良好	微細な粗砂を含む	内:暗灰N 3/ 外:橙5YR 7/6	底部片	底部外面に墨書あり
106	SE053	陶器	壺	復元底径9.6 残高5.9	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細～2mmの白色・黒色粗砂を多く含む	内:灰褐7.5YR 5/2 外:にぶい褐7.5YR 6/3,黒褐7.5YR 3/2	底部片	

表４　Ｉ区出土遺物観察表３

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
107	SE053	陶器	秉燭	口径5.2 残高5.0	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	微細な粗砂を含む	素地:橙5YR 7/6 釉:灰オリーブ5Y 4/2,オリーブ黄5Y 6/4	坏部欠損	唐津系
108	SE053	陶器	水注	残高4.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ→注口ナデ付け→施釉	良好	精良	素地:灰白5Y 8/1 釉:淡黄7.5Y 8/3	注口部片	
109	SE053	色絵	碗蓋	復元口径5.4 残高1.35	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉→絵付け	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明青灰10BG 7/1	小片	染付に絵付け
110	SE053	染付	皿	底径8.2 残高2.5	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→施釉→高台内蛇目釉剥ぎ	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明青灰10BG 7/1	口縁部欠損	蛇目凹形高台
111	SE053	染付	皿	復元底径4.0 器高2.1	内:ロクロナデ→型打ち→絵付け・白土描法→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明青灰10BG 7/1	1/5程度	
112	SE053	白磁	皿	復元底径7.2 残高1.7	内:ロクロナデ→型打ち→施釉 外:ロクロナデ→施釉→高台内蛇目釉剥ぎ	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明緑灰5G 7/1	底部片	蛇目凹形高台
113	SE053	白磁	皿	復元底径5.2 残高0.8	内:ロクロナデ→施文→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:灰白N 8/ 釉:明青灰10BG 7/1	底部片	
114	SE053	青磁	碗	復元底径5.3 残高1.9	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:明紫灰5P 7/1 釉:灰オリーブ5Y 6/2	底部片	
115	SE053	瓦	平瓦？	長さ4.2 幅6.8 厚1.4	凹:ナデ 凸:縄目タタキ	やや不良	微細～2.5mmの細礫を少量含む	内外:灰黄2.5Y 7/2	小片	
116	表採	須恵器	坏身	復元口径15.0 残高4.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1.5mmの白色粗砂を少量含む	内外:緑灰10GY 5/1	1/3程度	
117	SI002	石器	スクレイパー	残存長4.9 残存幅4.8 厚0.8 重量16.84g	—	—	安山岩	灰黄2.5Y 6/2	完形	
118	SI002	石器	石庖丁	長4.7 残存幅7.0 厚0.7 重量26.79g	—	—	凝灰質頁岩	灰5Y 6/1	1/3程度	
119	SI002	石器	石庖丁	残存長4.9 幅7.5 厚0.95 重量22.23g	—	—	泥岩	にぶい黄橙10YR 6/3	刃部片	
120	SI002	石器	磨製石剣	残存長5.35 残存幅3.3 厚0.75 重量17.25g	—	—	頁岩	暗灰黄2.5Y 5/2	基部片	
121	SI002	石器	太型蛤刃石斧	残存長14.6 幅7.0 厚4.3 重量715.00g	—	—	安山岩質凝灰岩	灰10Y 6/1	基部・刃部一部欠損	表面が風化
122	SI002	石器	太型蛤刃石斧	残存長12.6 残存幅6.8 厚4.2 重量550.35g	—	—	安山岩質凝灰岩	青灰10BG 5/1	基部・刃部一部欠損	表面が風化
123	SI002	石器	太型蛤刃石斧	残存長14.6 残存幅6.8 厚5.1 重量895.00g	—	—	安山岩質凝灰岩	青灰10BG 5/1	基部・刃部一部欠損	表面が風化
124	SI002	石器	柱状片刃石斧	残存長8.9 幅2.8 厚3.0 重量119.45g	—	—	砂岩	灰オリーブ5Y 6/2	刃部片	表面風化 砥石に転用か？
125	SI002	石器	扁平両刃石斧	残存長6.85 幅4.95 残存厚1.1 重量62.87g	—	—	泥岩	灰褐7.5YR 4/2	刃部片	砥石に転用
126	SI002	石器	砥石	残存長2.75 残存幅2.15 残存厚1.15 重量8.55g	—	—	砂岩	にぶい赤褐5YR 5/4	小片	砥面は2面
127	SI004	石器	打製石鏃	残存長1.7 幅1.5 厚0.35 重量0.54g	—	—	黒曜石	灰黄褐10YR 6/2	ほぼ完形	凹基式
128	SK014	石器	砥石	残存長8.7 残存幅8.8 残存厚5.2 重量410.65g	—	—	玄武岩	灰白5Y 7/1	小片	砥面は1面
129	SK022	石器	打製石鏃	残存長1.9 残存幅1.4 厚0.35 重量0.71g	—	—	安山岩	黄灰2.5Y 6/1	ほぼ完形	
130	SK022	石器	凹石	長11.3 幅9.3 厚4.4 重量630.00g	—	—	凝灰岩	浅黄2.5Y 7/3,にぶい黄橙2.5Y 7/4	ほぼ完形	

表５　Ⅰ区出土遺物観察表４

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
131	SK024	石器	打製石鏃	残存長1.9 幅1.7 厚0.4 重量1.09g	—	—	安山岩	灰黄褐10YR 5/2	先端部片	
132	SK026	石器	砥石	残存長6.6 幅4.2 厚3.0 重量106.75g	—	—	層灰岩	淡黄2.5Y 8/3	小片	砥面は2面
133	SK027	石器	打製石鏃	長1.8 幅1.6 厚0.35 重量0.73g	—	—	安山岩	黄灰2.5Y 5/1	ほぼ完形	平基式
134	SK030	石器	磨製石斧	残存長6.6 残存幅4.6 残存厚2.1 重量89.21g	—	—	凝灰質砂岩	灰白7.5Y 7/1	基部片	
135	SK032	石器	砥石	長9.4 幅3.6 厚2.0 重量136.72g	—	—	凝灰岩	暗緑灰10GY 8/1	完形	砥面は4面
136	SK037	石器	スクレイパー	残存長7.5 幅3.7 厚0.9 重量28.20g	—	—	安山岩	青灰5B 6/1	完形	
137	SK040	石器	砥石	残存長4.7 残存幅4.4 残存厚2.7 重量74.95g	—	—	凝灰岩	にぶい橙7.5YR 7/4	小片	砥面は1面
138	SK044	石器	打製石鏃	長2.65 幅1.05 厚0.55 重量1.29g	—	—	安山岩	にぶい橙2.5Y 6/4,黄灰2.5Y 4/1	完形	尖基式
139	SD051	石器	扁平打製石斧	残存長9.6 幅5.9 厚1.3 重量138.05g	—	—	緑泥片岩	緑灰10GY 6/1	刃部欠損	
140	SD051	石器	磨製石斧	残存長8.95 幅6.1 厚2.85 重量279.04g	—	—	緑泥片岩	オリーブ灰2.5GY 6/1,緑灰7.5GY 6/1	刃部片	
141	SP054	石器	ナイフ形石器	長2.7 幅1.0 厚2.2 重量0.65g	—	—	黒曜石	黒2.5Y 2/1	完形	
142	SP055	石器	打製石鏃	長3.4 幅1.9 厚0.55 重量2.67g	—	—	黒曜石	黄灰2.5Y 6/1	完形	凹基式
143	SP056	石器	打製石鏃	残存長1.6 残存幅1.3 厚0.4 重量0.56g	—	—	黒曜石	黄灰2.5Y 5/1	片脚欠損	凹基式
144	表採	石器	スクレイパー	長3.55 幅3.1 厚0.7 重量8.88g	—	—	黒曜石	灰N 4/,オリーブ灰2.5GY 5/1	完形	
145	表採	石器	打製石鏃	長1.55 幅1.3 厚0.25 重量0.39g	—	—	安山岩	灰7.5Y 5/1	完形	凹基式
146	表採	石器	打製石鏃	残存長1.3 残存幅1.4 厚0.4 重量0.59g	—	—	黒曜石	黄灰2.5Y 6/1	片脚欠損	凹基式
147	表採	石器	打製石鏃	長1.5 幅1.3 厚0.3 重量0.39g	—	—	黒曜石	黄灰2.5Y 5/1	完形	凹基式
148	表採	石器	打製石鏃	長2.1 幅1.7 厚0.4 重量0.67g	—	—	黒曜石	灰黄褐10YR 6/2,褐灰10YR 5/1	完形	凹基式
149	表採	石器	打製石鏃	残存長3.5 残存幅1.6 厚0.5 重量1.61g	—	—	片岩？	灰褐7.5YR 5/2	片脚欠損	凹基式
150	表採	石器	石匙	長3.35 幅6.0 厚0.9 重量14.06g	—	—	黒曜石	暗灰黄2.5Y 5/2	完形	

表６　Ⅰ区出土遺物観察表５

第３節　Ⅱ区の調査

（１）竪穴建物

SI001（第 36・37 図、図版 29・30・38）

調査区東側の北寄りで確認した。SI002 と近接する。北壁と西壁、東壁の一部が残存し、南側から西側にかけて大きく削平を受けている。検出できた範囲で北壁長 2.85m、西壁長 1.65 m、東壁長 1.2m を測る。床面上では３つの柱穴を検出した。そのうち２つは直径、深さともに約 50cm で主柱穴になると考えられる。この主柱穴の配置と北壁から西壁が直角に折れるコーナーを持つことから、SI001 は４本主柱穴をもつ一辺 4.2m 程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは 10cm 程残っていた。壁溝は無かった。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器　１～４は甕。１は口縁部から胴部上半の破片で、肥厚した口縁をもつ。端部は短く外反する。復元口径 20.3cm。２も口縁部から胴部上半の破片。器壁の厚さは均一で口縁は外反する。３は口縁部片。口縁は短く外反し､端部を摘み上げて仕上げる。復元口径 17.0cm。４は胴部の破片である。５・６は高坏。５は坏部片で復元口径 14.4cm を測る。６は脚部片。

須恵器　７は坏身。口縁部片で復元口径 11.2cm を測る。８は蓋。ほぼ完形で口径 9.5cm、器高 3.7cm。その大きさから短頸壺の蓋になろうか。９は甕。口縁端部の小片。端部は嘴状に尖り、直下に２条の沈線、その下位に波状文を櫛描きする。

SI002（第 36 図、図版 29・30）

調査区東側の北寄りで検出した。SI001 と近接する。全体が大きく削平されるが、北壁と西壁の一部が残存する。検出できた範囲で北壁長 2.7m、西壁長 3.8m を測る。床面上では４本の主柱穴を検出した。いずれも直径 50cm、深さ 40cm 程である。北壁から西壁が直角に折れるコーナーを持つことと主柱穴の配置より、SI002 は４本主柱穴をもつ一辺 4.3m 程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは西側で約 10cm 残っていた。壁溝はめぐらない。出土遺物は無かった。

（２）掘立柱建物

SB003（第 38 図、図版 29 ～ 31）

調査区東側の北寄りで検出した。北隅の柱穴が調査区外にはみ出ているが、２間×２間の総柱の掘立柱建物と判断できる。またそれぞれの柱穴には別の柱穴が重複しており、建物の建て替えが行われたことが分かる。北側の柱列では当初の建物は方位をＮ－ 64°－ E に取るが、建て替え後はＮ－ 58°－ E となり、若干方向を西に振って建て替えを行っている。当初の建物の柱間は東側で 1.7m、西側で 1.7m 間隔、南側で 1.55m 間隔、北側で 1.6m を測ることから、平面プランは正方形に近い形状となる。柱穴は直径 30 ～ 50cm、深さ 25 ～ 45cm を測る。出土遺物は無かった。

（３）土坑

調査区では複数の土坑を検出したが、ここでは遺物が出土した１つの土坑を報告する。

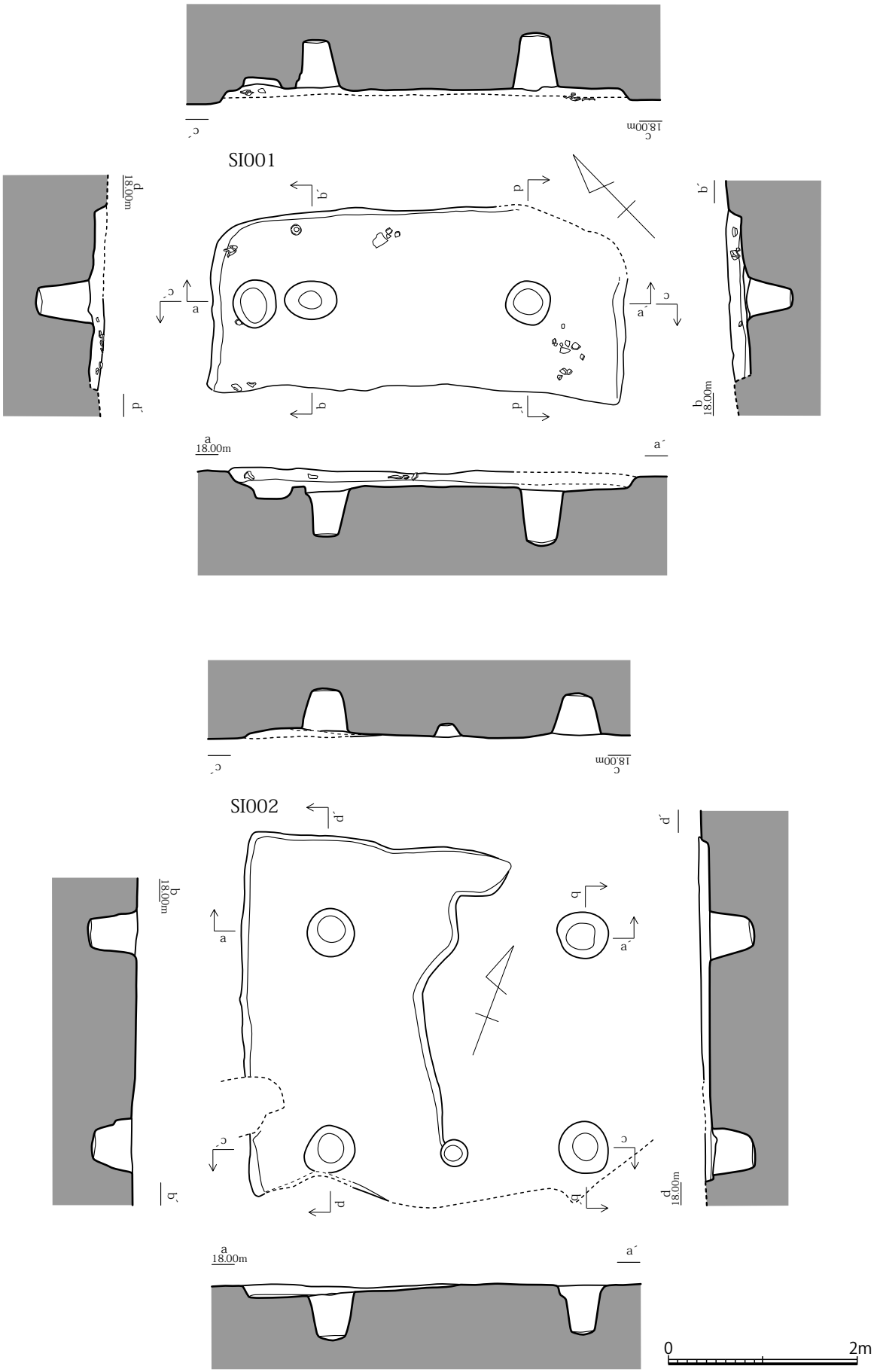
SK004（第 35・39 図、図版 31・38）

調査区中央の北側で検出した。SD006 に切られる。長軸 720cm、短軸 530cm の不整形な楕円形を呈する大型の土坑である。深さは 10 ～ 20cm 程度と浅く、床面には多くの小穴を有する。土師器と須恵器が出土した。

土師器　10 は甕。口縁部の小片である。端部は短く外反する。

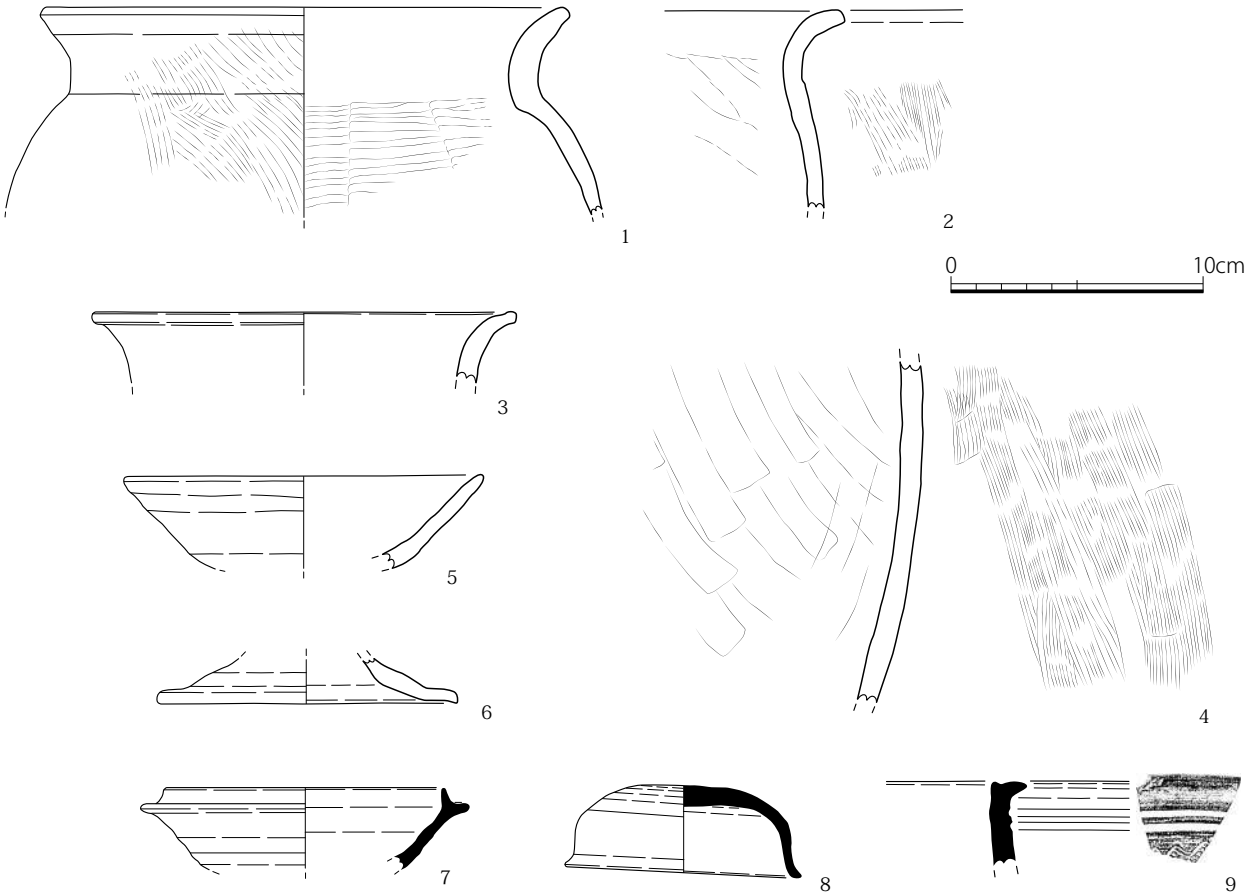
須恵器　11 は坏身。口縁部から底部の小片。

第 35 図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）



第 36 図　Ⅱ区 SI001・002 実測図（1/60）

SI001



第 37 図　Ⅱ区出土土器実測図 1（1/3）

（4）溝

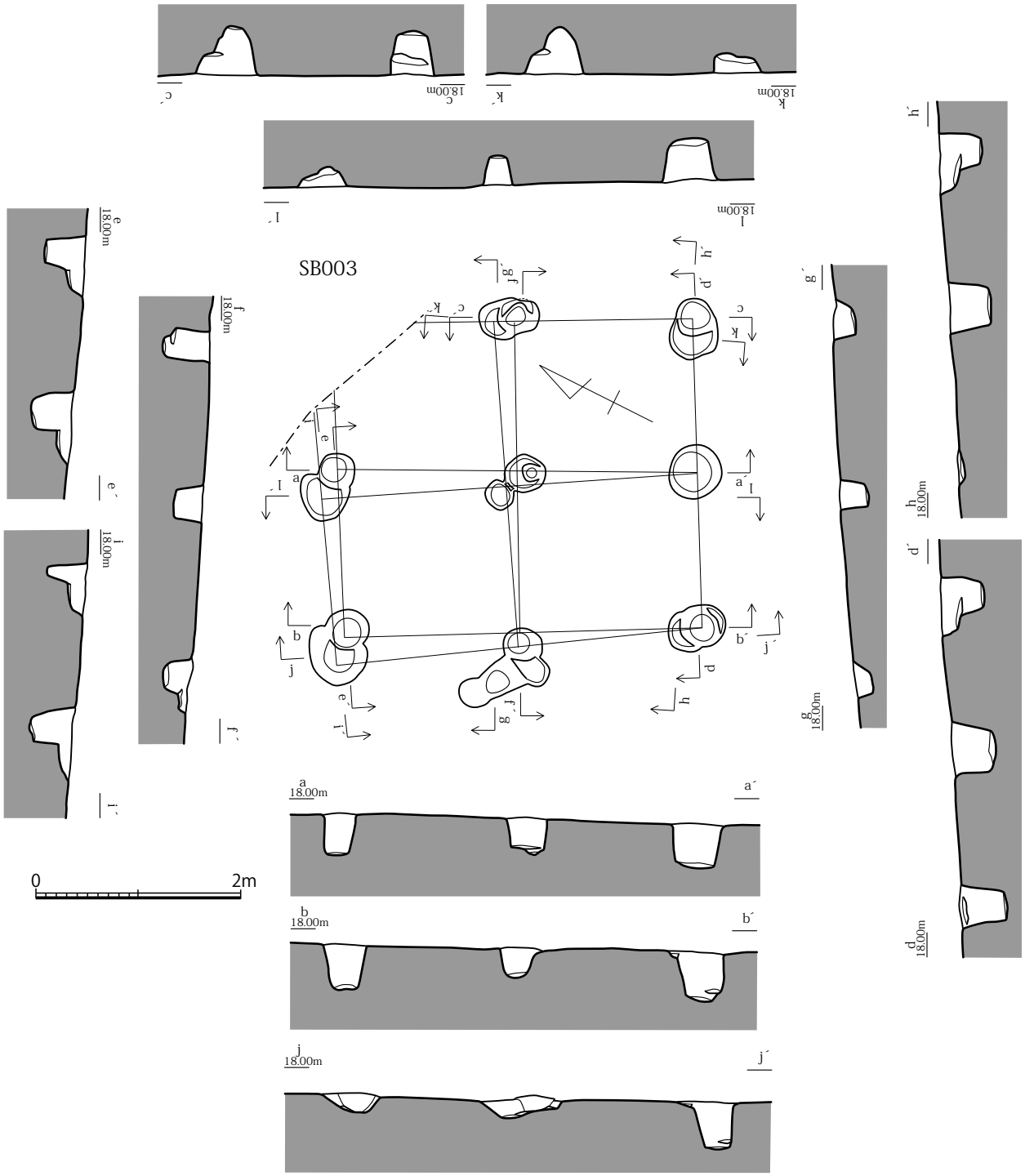
調査区では多くの溝を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

SD005（第 35・40 ～ 43 図、図版 31 ～ 33・38 ～ 40）

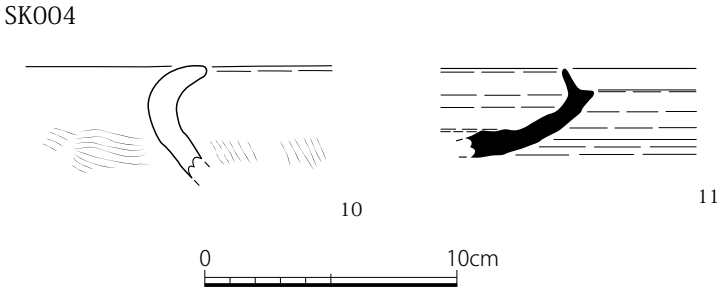
調査区の東側で検出した。SD007 に切られる。北西から南東方向に伸びており、南東側は調査区外に続き、北西側は開削を受け削られている。検出できた範囲で長さ 60m 余り、最大幅 5 m 前後を測る大きな溝で、深さは現状で約 50cm を測る。集落を区画した溝であろう。 4 ヶ所にベルトを設けて土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて埋まったと考えられる。弥生土器や土師器、須恵器など多くの遺物が出土した。

弥生土器　12・13・15 は甕。12 は口縁部片。復元口径 41.6cm を測る。くの字形口縁で端部を跳ね上げて仕上げる、遠賀川以東に多く分布する特徴を示す。頸部直下には 1 条の三角突帯をめぐらす。13 は頸部片。 1 条の突帯をめぐらす。15 は底部片。14 は壺。胴部片で 2 条の M 字突帯をめぐらす。丹塗磨研土器。

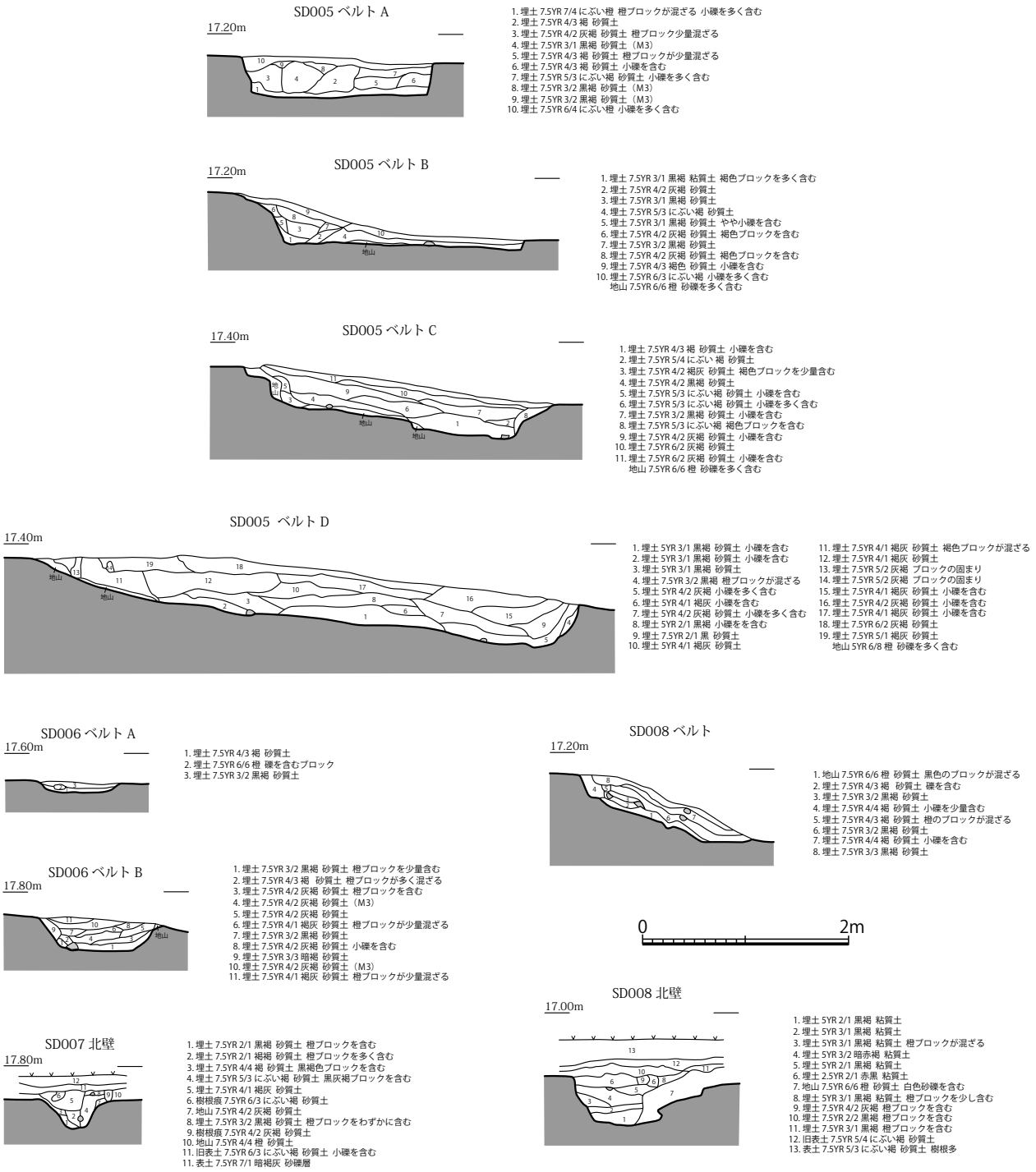
土師器　16 ～ 21 は坏。16・17 は底部の小片。18 は 3 分の 1 程を残す破片で、復元口径 12.4cm、器高 3.2cm を測る。19 は 3 分の 1 程度の破片。丸みを帯びた体部となる。復元口径 12.8cm。20 は底部を欠く。口径 13.3cm を測る。21 は口縁部片。薄手でシャープな造りである。復元口径 14.2cm を測る。22 ～ 24 は高坏。22・23 は坏部から脚部の小片。24 は脚部片。25 ～ 29 は甕。25 は口縁部片。くの字形をなす。復元口径 22.0cm。26 は口縁部から体部上半の破片。くの字形口縁となる。復元口径 21.2cm を測る。



第 38 図　Ⅱ区 SB003 実測図（1/60）



第 39 図　Ⅱ区出土土器実測図 2（1/3）

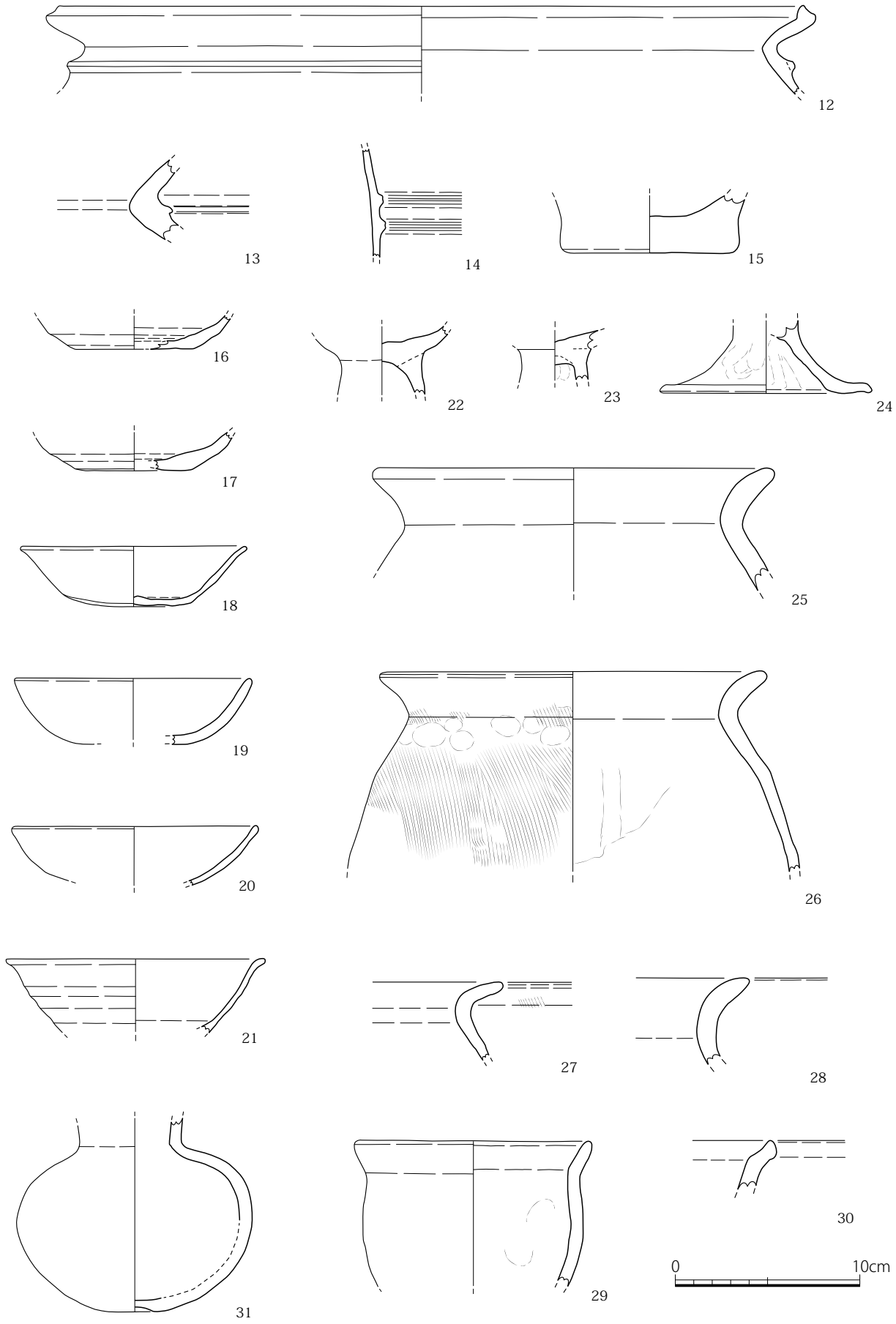


第 40 図　Ⅱ区 SD005・006・007・008 土層断面実測図（1/60）

27・28 は口縁部の小片。29 は口縁部から胴部下半の破片。小型品で復元口径 13.0cm を測る。30 は鉢か。口縁部片。31 は壺。口縁部を欠く。体部は球形で丸底となる。32 ～ 34 は甑。32 は 4 分の 3 程度を残し、復元口径 23.5cm、器高 21.95cm を測る。33・34 は把手片。

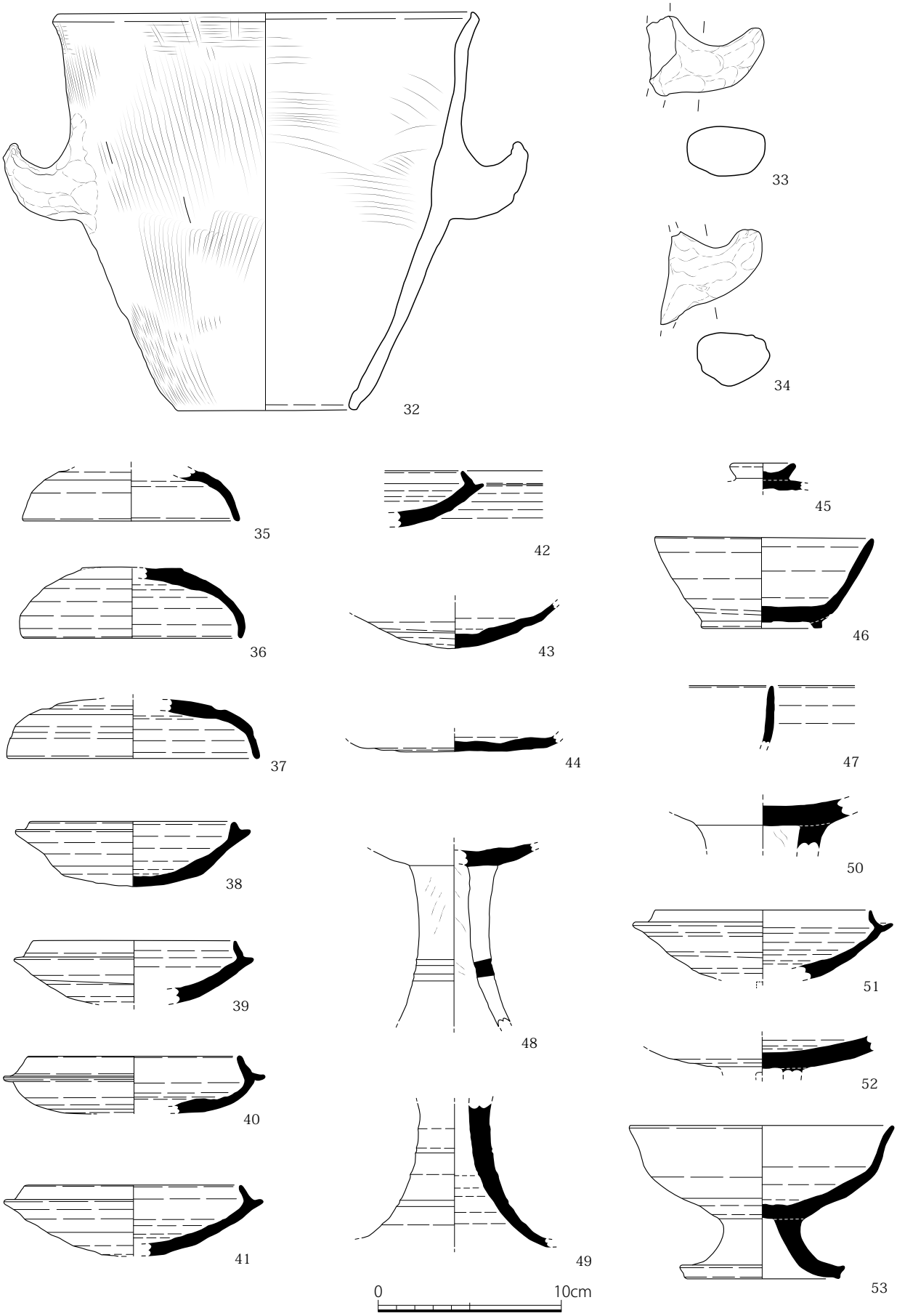
須恵器　35 ～ 37 は坏蓋。35 は口縁部片。復元口径 12.0cm を測る。36・37 は口縁部から天井部の破片。36 は復元口径 12.0cm、器高 3.85cm を測る。37 は復元口径 14.0cm。38 ～ 43 は坏身。38 は 2 分の 1 程度を残す破片で、口径 11.3cm、器高 3.6cm を測る。39 は 4 分の 1 程の破片。復元口径 11.2cm を測る。

SD005



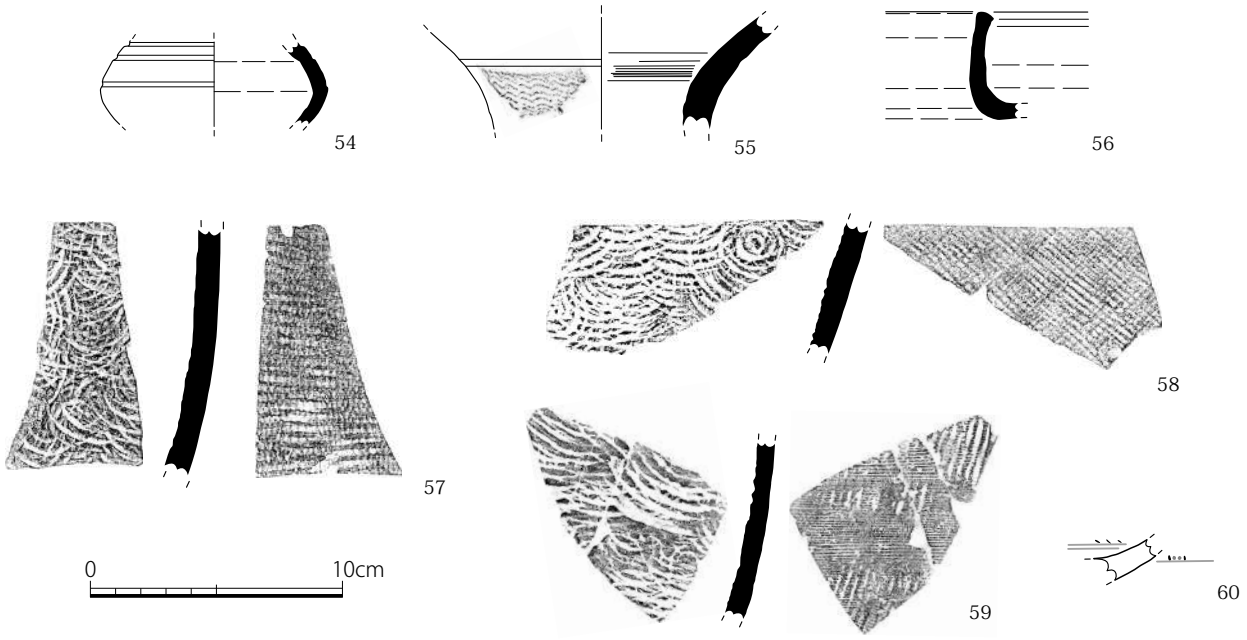
第 41 図　Ⅱ区出土土器実測図 3（1/3）

SD005



第 42 図　Ⅱ区出土土器実測図 4（1/3）

SD005



第 43 図　Ⅱ区出土土器実測図 5（1/3）

40 は 3 分の 1 程で、復元口径 11.6cm を測る。41 は 3 分の 1 程度を残す。復元口径 11.8cm。42 は口縁部片。43 は底部片。44 は皿か。底部片で復元底径 8.4cm を測る。45 は蓋。摘部の小片。46・47 は埦。46 は 3 分の 2 程度の破片で全形をうかがえる。小型品で口径 11.5cm、底径 6.65cm、器高 4.95cm を測る。47 は口縁部片。48 ～ 53 は高坏。48 は坏部から脚部の破片。長脚で 2 方向 2 段の透かしをもつ。49 は脚部片。50 は坏部から脚部の破片。比較的大型品である。51 は坏部片で 3 分の 2 程度を残す。口径 11.9cm を測る。底部には透かし孔の切り込みがある。52 は坏部片。底部に 2 方向の透かし孔の切り込みがある。53 は全体の 2 分の 1 程を残し、復元口径 14.6cm、器高 8.35cm を測る。無蓋の坏に喇叭状に広がる短い脚が付く。54・55 は壺。54 は胴部片で、上半には 3 条の沈線をめぐらす。55 は口縁部片で端部を欠く。外面には波状文を櫛描きする。56 ～ 59 は甕。56 は口縁部片。短い直立した口縁となる。57 ～ 59 は胴部片。外面はタタキが施され、59 にはカキメもみられる。内面には青海波、同心円の当具痕を残す。

青磁　60 は坏。内外面に白色土、黒色土で模様を象嵌し、釉薬を施す。高麗青磁ないしは粉青沙器と考えられる。

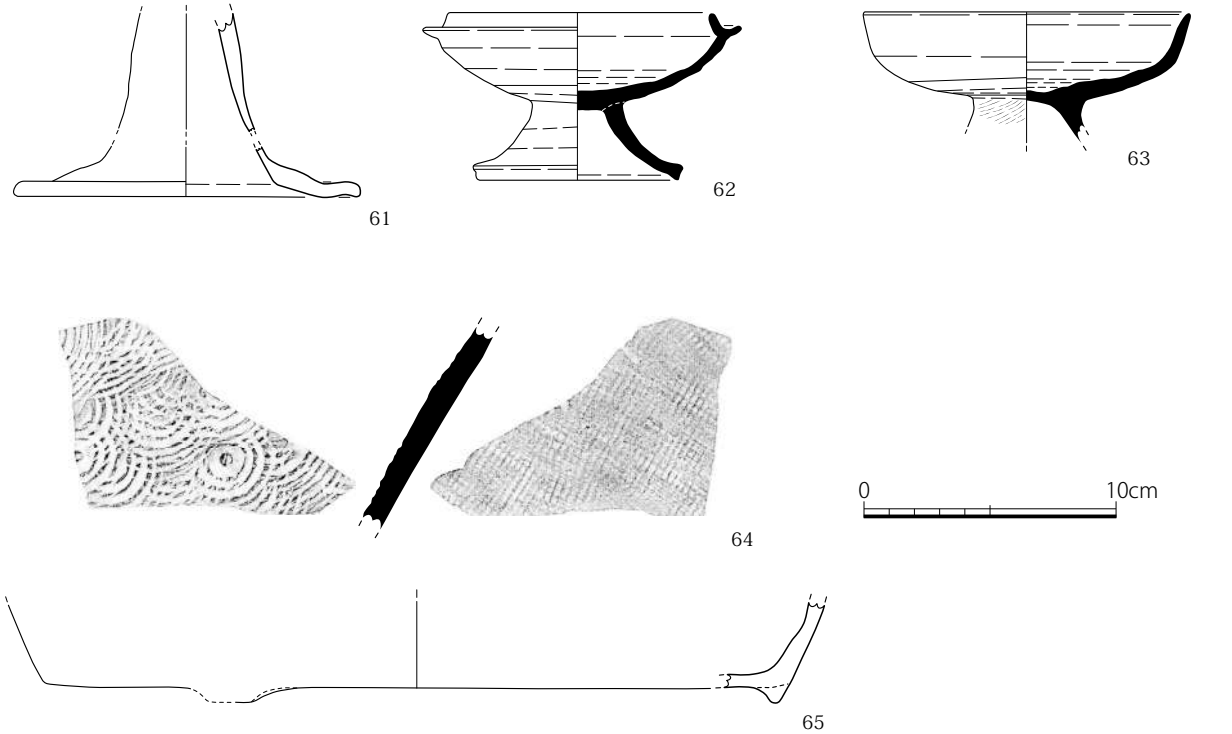
SD006（第 35・40・44 図、図版 34・35・40）

調査区の東側で検出した。SK004、SD007 を切る。SD005 と平行するように北西から南東方向に伸びている。東側は開削を受け削られている。一部途切れているものの検出できた範囲で長さ 75m 余り、最大幅 1.4m を測る。削平を受けていると考えられ、深さは現状で約 30cm 程しかない。西寄りの 2 ヶ所にベルトを設けて土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて埋まったと考えられる。土師器や須恵器などが出土した。

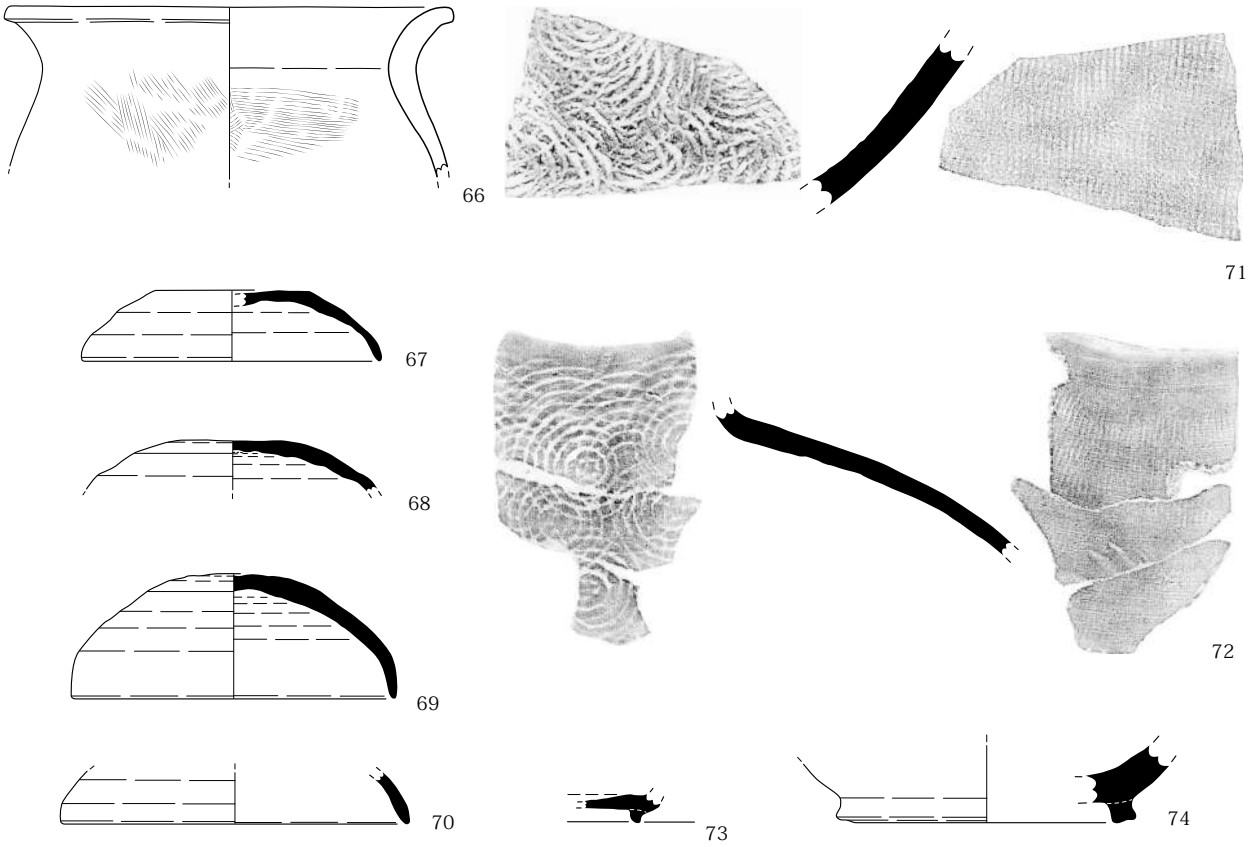
土師器　61 は高坏。脚部の 2 片がある。

須恵器　62・63 は高坏。62 は有蓋高坏で 4 分の 3 程が残る。短脚である。口径 10.6cm、器高 6.7cm を測る。63 は坏部から脚部の破片。無蓋高坏と考えられる。口径 13.0cm。64 は甕。胴部片で外面にタ

SD006



SD008



第 44 図　Ⅱ区出土土器実測図 6（1/3）

タキを施し、内面には青海波、同心円の当具痕を残す。

瓦質土器　65 は鉢か。底部片で 3 脚を有する。

SD007（第 35・40 図、図版 32・35）

調査区の東側で検出した。SD005 を切り、SD006 に切られる。SD005 や SD006 と平行して南東から北西方向に伸びているが、途中で北東方向へ直角に曲がり調査区外へと続く。検出できた範囲で長さ約 50 m、最大幅約 1 mを測る。調査区外へと続く北壁で土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて溝が埋まったと解釈できる。また SD005 の土層断面図（ベルト A ・ B ）の観察から SD007 が SD005 を切ることが分かる。出土遺物は無かった。

SD008（第 35・40・44 図、図版 35・36・40）

調査区の西側で検出した。ちょうど棚田状に開削された段の外縁に沿って東から北西方向に伸びる。北西側は調査区外へと続いている。SD005 の続きの可能性もある。検出できた範囲で長さ 28m、最大幅 2 m 程を測る。 1 ヶ所にベルトを設けて土層断面図を作成した。あわせて調査区外へと続く北壁で土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて溝が埋まったと考えることができる。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器　66 は甕。口縁部から胴部上半の破片。口縁は肥厚して、端部は短く外反する。復元口径 17.8cm を測る。

須恵器　67 ～ 70 は坏蓋。67 は 6 分の 1 程の破片で、復元口径 12.0cm、器高 2.85cm を測る。68 は天井部の破片。69 は 3 分の 1 程の破片で、復元口径 12.8cm、器高 5.0cm を測る。口径に比して器高が高い。70 は口縁部片。復元口径 14.0cm。71・72 は甕。71 は胴部下半、72 は胴部上半の破片。外面にタタキを施し、内面に青海波文、同心円文の当具痕を残す。73 は椀。底部の小片。74 は壺。長頸壺の底部の破片と考えられる。

SD009（第 35 図、図版 36）

調査区の中央で検出した。棚田状に開削された段の裾部を南東から北西方向に伸び、途中で南西方向に折れ曲がる。検出できた範囲で長さ 36m、幅 0.3m 程を測る。水田の用水路であろうか。出土遺物は無かった。

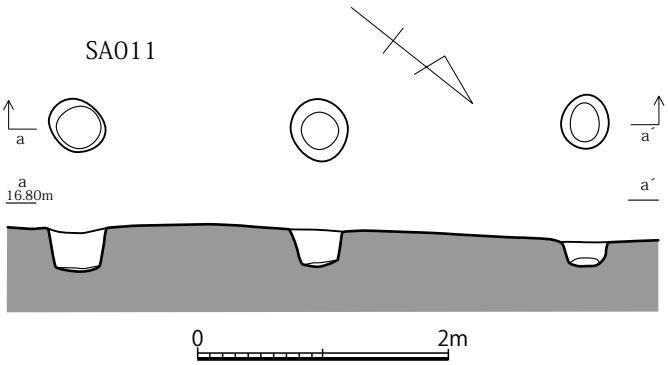
SD010（第 35 図、図版 37）

調査区の西側で検出した。南東から北西方向に伸び、北側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 30m、最大幅 0.5m 程を測る。出土遺物は無かった。

（5）柵

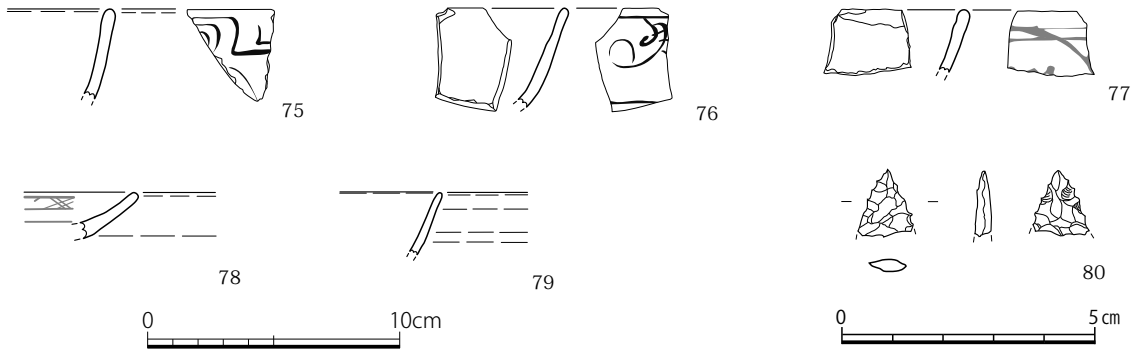
SA011（第 45 図、図版 37）

調査区東側の南寄りで検出した。南西側が階段状に開削を受けているので、掘立柱建物の柱列と考えることもできるが、ここでは柵として報告を行う。柱穴は直径 40 ～ 50cm、深さ 20 ～ 30cm の柱穴が 3 つ並ぶ。柱列は方位をN － 39°－Wにとる。柱間は北側より 2.1m、1.9m を測る。出土遺物は無かった。



第 45 図　Ⅱ区 SA011 実測図（1/60）

表採



第 46 図　Ⅱ区採集土器・石器実測図（1/3・2/3）

（6）採集遺物（第 46 図、図版 40）

表面採集遺物に陶磁器と打製石鏃がある。

青磁　75 は碗。口縁部の小片。外面上縁に雷文帯を有する。

染付　76 は碗。口縁部片で中国明代の青花と考えられる。78 は皿。内面に絵付けを行う。釉薬は少し青みを帯びている。

陶器　77・79 は碗。77 は陶胎染付。口縁部の小片である。79 は口縁部片。藁灰釉を施釉する。

石器　80 は打製石鏃。先端部の小片である。安山岩製。

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	SI001	土師器	甕	復元口径20.3 残高8.3	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内:浅黄橙7.5YR 8/4 外:明赤褐2.5YR 5/8	口縁部～胴部片	
2	SI001	土師器	甕	残高7.9	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの白色・黒色粗砂を含む	内:浅黄橙10YR 8/3,橙2.5YR 7/6 外:にぶい黄橙10YR 7/3	口縁部～胴部片	
3	SI001	土師器	甕	復元口径17.0 残高2.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内外:にぶい橙7.5YR 7/4	口縁部片	
4	SI001	土師器	甕	残高13.6	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～1mmの白色粗砂・雲母を多く含む	内:にぶい黄褐10YR 5/3 外:にぶい黄橙10YR 6/4	胴部片	
5	SI001	土師器	高坏	復元口径14.4 残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3.5mmの白色細礫を多く含む	内:明褐7.5YR 5/8 外:明褐7.5YR 5/8,赤110R 5/8	口縁部片	
6	SI001	土師器	高坏	復元底径12.0 残高1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内:橙7.5YR 6/8 外:橙7.5YR 6/6,赤10R 5/8	脚部片	
7	SI001	須恵器	坏身	復元口径11.2 残高3.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内外:灰黄2.5Y 6/2	口縁部片	
8	SI001	須恵器	蓋	口径9.5 器高3.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内:灰10Y 5/1 外:灰N 6/	ほぼ完形	
9	SI001	須恵器	甕	残高3.35	内:回転ナデ 外:回転ナデ→波状文施文	良好	微細～1mmの白色粗砂を多く含む	内:灰5Y 5/1 外:灰N 4/	口縁部片	
10	SK004	土師器	甕	残高4.5	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:浅黄橙7.5YR 8/6	口縁部片	
11	SK004	須恵器	坏身	残高3.55	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗紗を含む	内外:オリーブ灰2.5GY 5/1	口縁部～底部片	
12	SD005	弥生土器	甕	復元口径41.6 残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～5mmの中礫を多く含む	内:橙7.5YR 6/6 外:橙5YR 6/6	口縁部片	
13	SD005	弥生土器	甕	残高4.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～5mmの白色中礫を含む	内外:橙7.5YR 6/6	頸部片	
14	SD005	弥生土器	壺	残高5.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→突帯ナデ付け	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内外:橙7.5YR 6/8	胴部片	丹塗磨研土器
15	SD005	弥生土器	甕	復元底径9.5 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～6mmの白色中礫を多く含む	内:明褐7.5YR 5/6 外:明赤褐2.5YR 5/8	底部片	
16	SD005	土師器	坏	復元底径6.4 残高1.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部ヘラ切り？	やや不良	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:灰白2.5Y 8/2 外:淡黄2.5Y 8/4	底部片	
17	SD005	土師器	坏	復元底径6.4 残高2.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部ヘラ切り	良好	微細～1.5mmの白色粗砂を含む	内:橙7.5YR 6/6 外:橙7.5YR 6/8	底部片	
18	SD005	土師器	坏	復元口径12.4 底径7.15 器高3.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部ヘラ切り	良好	微細～2mmの白色粗砂・角閃石を含む	内:橙7.5YR 6/8 外:橙7.5YR 6/6,橙2.5YR 6/8	1/3程度	
19	SD005	土師器	坏	復元口径12.8 残高3.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内外:橙5YR 6/6	1/3程度	
20	SD005	土師器	坏	口径13.3 残高3.25	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ケズリ？	良好	微細～2mmの白色・黒色粗砂を含む	内外:橙5RY 6/6	底部欠損	
21	SD005	土師器	坏	復元口径14.2 残高4.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内外:橙5YR 6/6	口縁部片	
22	SD005	土師器	高坏	残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→脚部ナデ付け	良好	微細～2mmの白色粗砂・金雲母を含む	内外:橙5YR 6/6	坏部～脚部片	
23	SD005	土師器	高坏	残高2.7	内:ヨコナデ→オサエ 外:ヨコナデ→脚部ナデ付け	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内:明褐7.5YR 5/6 外:橙7.5YR 6/6	坏部～脚部片	
24	SD005	土師器	高坏	底径11.6 残高4.0	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ→オサエ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:にぶい黄橙10YR 7/4,橙5YR 6/8	脚部片	
25	SD005	土師器	甕	復元口径22.0 残高6.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～3mmの細礫を多く・雲母を含む	内外:にぶい橙7.5YR 6/4	口縁部片	
26	SD005	土師器	甕	復元口径21.2 残高10.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ・オサエ	良好	微細～3mmの白色・黒色細礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4,橙5YR 6/6 外:橙7.5YR 6/6,明褐7.5YR 5/6	口縁部～胴部片	
27	SD005	土師器	甕	残高4.25	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タテハケ	やや不良	微細～2.5mmの白色粗砂を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4,橙7.5YR 6/6 外:浅黄橙10YR 8/4,橙7.5YR 7/6	口縁部片	
28	SD005	土師器	甕	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部片	
29	SD005	土師器	甕	復元口径13.0 残高7.9	内:ヨコナデ→オサエ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～1mmの粗砂を少量含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:にぶい黄橙10YR 6/4	口縁部～胴部片	
30	SD005	土師器	鉢？	残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの白色粗砂を含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4,灰黄褐10YR 5/2 外:にぶい黄橙10YR 6/4,灰黄褐10YR 5/2	口縁部片	
31	SD005	土師器	壺	残高10.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細な粗砂を含む	内外:浅黄橙7.5YR 8/6	口縁部欠損	
32	SD005	土師器	甑	復元口径23.5 復元底径9.8 器高21.95	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～3mmの細礫を含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙7.5YR 6/6,にぶい橙7.5YR 6/4	3/4程度	
33	SD005	土師器	甑	残高4.4	ナデ・オサエ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内外:橙7.5YR 7/6	把手片	

表７　Ⅱ区出土遺物観察表１

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
34	SD005	土師器	甑	残高4.3	ナデ・オサエ	良好	微細～5mmの中礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙7.5YR 7/6,にぶい黄橙10YR 7/4	把手片	
35	SD005	須恵器	坏蓋	復元口径12.0 残高2.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～2.5mmの白色・黒色細礫を含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:黄灰2.5Y 6/1	口縁部片	
36	SD005	須恵器	坏蓋	復元口径12.0 器高3.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を多く含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:黄灰2.5Y 6/1	口縁部～天井部片	
37	SD005	須恵器	坏蓋	復元口径14.0 残高3.25	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	精良	内:灰5Y 6/1 外:青灰10BG 5/1	口縁部～天井部片	
38	SD005	須恵器	坏身	口径11.3 器高3.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～4mmの白色細礫を含む	内外:灰白5Y 7/1	1/2程度	
39	SD005	須恵器	坏身	復元口径11.2 残高3.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～0.5mmの粗砂を少量含む	内外:灰オリーブ5Y 6/2	1/4程度	
40	SD005	須恵器	坏身	復元口径11.6 残高3.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を多く含む	内:黄灰2.5Y 5/1 外:灰黄褐10YR 5/2	1/3程度	
41	SD005	須恵器	坏身	復元口径11.8 残高3.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色・黒色粗砂を含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:灰黄2.5Y 7/2	1/3程度	
42	SD005	須恵器	坏身	残高3.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:オリーブ灰2.5GY 6/1	口縁部片	
43	SD005	須恵器	坏身	残高2.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの粗砂を少量含む	内外:灰10Y 6/	底部片	
44	SD005	須恵器	皿？	復元底径8.4 残高0.95	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部ヘラ切り	良好	微量の金雲母を含む	内外:にぶい黄橙10YR 6/3	底部片	
45	SD005	須恵器	蓋	残高1.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ→摘部ナデ付け	良好	微量の金雲母を含む	内:灰5Y 5/1 外:暗灰黄2.5Y 5/2	摘部片	
46	SD005	須恵器	埦	口径11.5 底径6.65 器高4.95	内:回転ナデ 外:回転ナデ→高台ナデ付け	良好	微細～5mmの白色中礫を含む	内外:灰黄2.5Y 7/2	2/3程度	
47	SD005	須恵器	埦	残高3.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの粗砂を少量含む	内:灰黄2.5Y 6/2,黄灰2.5Y 6/1 外:暗灰黄2.5Y 5/2,黄灰2.5Y 4/1	口縁部片	
48	SD005	須恵器	高坏	残高10.25	内:回転ナデ→しぼり 外:回転ナデ→脚部ナデ付け→しぼり→透孔穿孔	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:灰N 6/ 外:褐灰10YR 5/1	坏部～脚部片	透孔2方向に2段
49	SD005	須恵器	高坏	残高7.95	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内外:灰7.5Y 6/1	脚部片	
50	SD005	須恵器	高坏	残高2.9	内:回転ナデ→しぼり 外:回転ナデ→脚部ナデ付け	やや不良	微細～1mmの白色粗砂を含む	内外:黄灰2.5Y 7/2	坏部～脚部片	
51	SD005	須恵器	高坏	口径11.9 残高3.8	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内:灰10Y 5/1 外:にぶい赤褐5Y 5/3	坏部2/3程度	透孔あり
52	SD005	須恵器	高坏	残高2.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	精良	内:灰10Y 5/1 外:灰10Y 6/1	坏部片	透孔2方向
53	SD005	須恵器	高坏	復元口径14.6 脚部径9.1 器高8.35	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ→脚部ナデ付け	良好	微細～1mmの白色粗砂・雲母を含む	内外:灰黄2.5Y 6/2	1/2程度	
54	SD005	須恵器	壺	残高3.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの黒色粗砂を含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:灰7.5Y 6/1,灰黄2.5Y 6/2	胴部片	
55	SD005	須恵器	壺	残高4.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→波状文施文	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内外:灰黄2.5Y 6/2	口縁部片	
56	SD005	須恵器	甕	残高4.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細な白色粗砂を少量含む	内:暗灰黄2.5Y 5/2,灰5Y 6/1 外:暗灰黄2.5Y 5/2,暗灰黄2.5Y 4/2	口縁部片	
57	SD005	須恵器	甕	残高9.8	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内外:灰10Y 6/1	胴部片	
58	SD005	須恵器	甕	残高5.25	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ	良好	微細～2mmの白色粗砂を少量含む	内:灰10Y 5/1 外:暗灰黄2.5Y 5/2	胴部片	
59	SD005	須恵器	甕	残高7.05	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ→カキメ	良好	微細～1mmの白色・黒色粗砂を含む	内外:明オリーブ灰2.5GY 7/1	胴部片	
60	SD005	青磁	坏	残高1.65	内:ロクロナデ→象嵌→施釉 外:ロクロナデ→象嵌→施釉	良好	精良	素地:灰黄2.5Y 6/2 釉:黄灰2.5Y 5/1	胴部片	高麗青磁もしくは粉青沙器
61	SD006	土師器	高坏	復元底径13.8 残高6.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色・黒色粗砂を多く含む	内外:明赤褐5YR 5/8	脚部片	
62	SD006	須恵器	高坏	口径10.6 脚部径8.0 器高6.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ→脚部ナデ付け	良好	精良	内:灰5Y 6/1 外:灰10Y 6/1	3/4程度	
63	SD006	須恵器	高坏	口径13.0 残高5.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→底部回転ヘラケズリ→脚部ナデ付け→しぼり	良好	精良	内:灰5Y 6/1 外:灰N 6/	坏部～脚部片	
64	SD006	須恵器	甕	残高8.0	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ	良好	精良	内:灰5Y 5/1 外:暗緑灰10GY 4/1	胴部片	
65	SD006	瓦質土器	鉢？	復元底径29.2 残高4.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:灰黄2.5Y 7/2 外:灰5Y 6/1	底部片	脚3ヶ所あり

表８　Ⅱ区出土遺物観察表２

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
66	SD008	土師器	甕	復元口径17.8 残高6.4	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの粗砂を含む	内外:橙7.5YR 6/6	口縁部～胴部片	
67	SD008	須恵器	坏蓋	復元口径12.0 器高2.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部ヘラ切り？	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内:黄灰2.5Y 6/1,灰黄2.5Y 6/2 外:黄灰2.5Y 4/1,暗灰黄2.5Y 4/2	1/6程度	
68	SD008	須恵器	坏蓋	残高2.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粗砂を含む	内外:灰7.5Y 5/1	天井部片	
69	SD008	須恵器	坏蓋	復元口径12.8 器高5.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:にぶい黄2.5Y 6/3 外:灰黄2.5Y 6/2	1/3程度	
70	SD008	須恵器	坏蓋	復元口径14.0 残高2.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:灰黄2.5Y 6/2 外:にぶい黄2.5Y 6/3	口縁部片	
71	SD008	須恵器	甕	残高5.8	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ	良好	微細～1mmの白色・黒色粗砂を多く含む	内:暗灰N 3/,にぶい黄橙10YR 6/3 外:灰黄2.5Y 6/2	胴部片	
72	SD008	須恵器	甕	残高5.9	内:回転ナデ→（当具痕） 外:回転ナデ→タタキ	良好	微細～6mmの中礫を含む	内:浅黄2.5Y 7/3 外:にぶい黄橙10YR 7/4	胴部片	
73	SD008	須恵器	埦	残高1.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ→高台ナデ付け	良好	微細～1mmの白色粗砂を少量含む	内:褐灰10YR 5/1 外:オリーブ黒7.5Y 3/1	底部片	
74	SD008	須恵器	壺	復元底径12.0 残高3.15	内:回転ナデ 外:回転ナデ→高台ナデ付け	良好	微細～1mmの白色粗砂を多く含む	内:灰5Y 6/1 外:灰5Y 5/1	底部片	
75	表採	青磁	碗	残高3.6	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施文→施釉	良好	精良	素地:灰白2.5Y 7/1 釉:オリーブ灰10Y 6/2	口縁部片	
76	表採	染付	碗	残高3.9	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	微細～1mmの粗砂を含む	素地:灰白2.5Y 8/2 釉:灰白5GY 8/1	口縁部片	
77	表採	陶器	碗	残高2.6	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→絵付け→施釉	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	素地:明赤褐2.5YR 5/6 釉:黄灰2.5Y 6/1	口縁部片	陶胎染付
78	表採	染付	小皿	残高1.85	内:ロクロナデ→絵付け→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:灰5Y 6/1 釉:明オリーブ灰2.5GY 7/1	口縁部片	
79	表採	陶器	碗	残高2.5	内:ロクロナデ→施釉 外:ロクロナデ→施釉	良好	精良	素地:灰白5Y 7/1 釉:灰黄2.5Y 6/2	口縁部片	
80	表採	石器	打製石鏃	長1.3 幅1.1 厚0.25 重量0.26g	―	―	安山岩	灰N 4/	先端部片	

表９　Ⅱ区出土遺物観察表３

第４章　結　語

以上、竹並下ノ原遺跡の発掘調査成果を報告してきた。最後に結語として遺跡を通観して、その画期を見出したい。

竹並下ノ原遺跡で人々の営みを確認できるのは縄文時代の頃である。Ⅰ区のSK036・037では前期の轟式や曽畑式系統の土器片が出土した。長軸1.0m、短軸0.7m程の長方形（楕円形）を呈し、底面に柱穴を有することを特徴とする。同様の土坑はⅠ区の中央から東側にかけて散在し、打製石鏃を伴うものもある。以上からこの土坑群はその分布や形態から狩猟用の落とし穴と考えることができる。底面の柱穴は逆茂木の痕跡であろう。

続く画期は弥生時代にある。Ⅰ区の西側で見つかったSI002は直径約11mの大型の竪穴建物で、面積は約95㎡もあり、支配者層の住居と考えることができよう。遠賀川以東では最大規模の円形住居である（坂元2006）。出土した弥生土器の様相（武末・上田2006）より、弥生時代の前期末（板付Ⅱｃ式期）に位置づけることができ、他にも多くの石器に加え、床面では多量の炭化材を検出した。この炭化材の詳細については次章の自然科学分析で報告にかえたい。東側で確認したSI007・008も同時期の竪穴建物と考えられる。近隣では竹並遺跡のＡ地区で同時期の集落が調査されている（竹並遺跡調査会1979）。

その後は弥生時代中・後期、古墳時代前・中期と明確な遺構を認めることができない。再び活動が盛んになるのは古墳時代後期の末頃からである。ここに第３の画期がある。この時期にはⅠ区に地域の有力者を埋葬したヒメコ塚古墳が築造される（行橋市教育委員会2014）。古墳の周りには同時期の竪穴建物（Ⅰ区：SI001・004・006・009など、Ⅱ区：SI001･002）があり、集落域に古墳を取り込んだ集落景観をうかがえる。Ⅱ区では集落を区画するこの時期の溝も調査されている。南側の丘陵上には千基以上の横穴墓が密集する竹並遺跡（横穴墓）があり、その一部は古墳時代の竹並下ノ原村を営んだ人々の墓所と想像できる。

古代、中世はごく少量の遺物はあるもののまとまった遺構はない。最後の画期は江戸時代である。Ⅰ区のSK031・032、SE053では江戸時代後期（18世紀後期以降）と思われる多くの陶磁器等が出土した。当地の江戸時代の様相については、近接する福原原開遺跡の調査報告でも触れたことがある（行橋市教育委員会2013）。本遺跡を２分する国道496号線は在郷町大橋から福富を経由し国分方面に至る脇街道として江戸時代前期には成立しており、竹並村は元和元年の「人畜改帳」には家数36、人数96と記録されている（平凡社地方資料センター2004）。今回の調査成果は、その様相を具体的に示すものではないが、限られた文献史料からみえる当地域の歴史像を補完するものといえよう。

〈引用・参考文献〉

坂元雄紀2006「遠賀川流域以東における弥生集落の成立と展開」『弥生集落の成立と展開』（第55回埋蔵文化財研究集会）
武末純一・上田龍児2006「弥生土器の編年と地域間交流」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）
竹並遺跡調査会編1979『竹並遺跡』東出版寧楽社
平凡社地方資料センター編2004『福岡県の地名』（日本歴史地名大系第41巻）平凡社
行橋市教育委員会2013『柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡２』（行橋市文化財調査報告書第48集）
行橋市教育委員会2014『ヒメコ塚古墳』（行橋市文化財調査報告書第49集）

※結語をまとめるにあたり、以下の方々に有益なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略）
上田龍児・森貴教（大野城市教育委員会）、佐藤浩司（公益財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室）
能登原孝道（熊本県教育委員会）

第５章　付　編

竹並下ノ原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

竹並下ノ原遺跡のＩ区の弥生時代前期末頃と考えられるSI002から出土した炭化材を対象として、年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、SI002の炭化材で、番号を付して取り上げられた32点（炭１～32）と、ベルト中から出土した炭化材１点の合計34点がある。このうち、炭７は、炭7-1と炭7-2の２袋に分けられている。年代測定は、試料の状況を観察した上で、炭7-1と炭22の２点について実施する。いずれも破片で樹皮は認められないが、比較的大型の破片がある。それぞれ、残存する中での最外年輪を含む4-5年分を採取して測定試料とした。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ･酸処理）。試料をバイコール管に入れ､1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に､標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来

的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が 68%、2σは真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3．結果

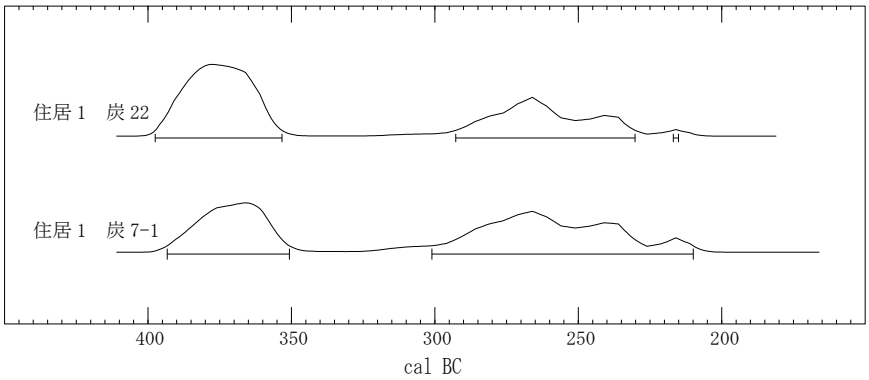
（1）放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表 10、暦年較正結果の比較を第 47 図に示す。同位体

地区 遺構 番号	種類	処理 方法	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
I-b区 住居1 炭7-1	炭化材	AAA	2,230±20	-23.70±0.19	2,260±20 (2,255±23)	σ	cal BC 385 - cal BC 357	cal BP 2,334 - 2,306	0.483	IAAA- 131933
							cal BC 283 - cal BC 255	cal BP 2,232 - 2,204	0.390	
							cal BC 247 - cal BC 235	cal BP 2,196 - 2,184	0.127	
						2σ	cal BC 393 - cal BC 351	cal BP 2,342 - 2,300	0.410	
							cal BC 301 - cal BC 210	cal BP 2,250 - 2,159	0.590	
I-b区 住居1 炭22	炭化材	AAA	2,250±20	-24.05±0.34	2,270±20 (2,269±22)	σ	cal BC 392 - cal BC 359	cal BP 2,341 - 2,308	0.809	IAAA- 131934
							cal BC 274 - cal BC 260	cal BP 2,223 - 2,209	0.191	
						2σ	cal BC 397 - cal BC 353	cal BP 2,346 - 2,302	0.621	
							cal BC 293 - cal BC 230	cal BP 2,242 - 2,179	0.377	
							cal BC 217 - cal BC 215	cal BP 2,166 - 2,164	0.002	

1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表 10　放射性炭素年代測定結果



第 47 図　暦年較正結果の比較

効果の補正を行った測定結果（補正年代）は、炭 7-1 が 2,260 ± 20BP、炭 22 が 2,270 ± 20BP である。また、測定誤差を 2 σで計算した暦年較正結果は、炭 7-1 が cal BC393-210、炭 22 が cal BC397-215 である。

（2）樹種同定

樹種同定結果を表 11 に示す。炭化材は、広葉樹 7 分類群（コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・サクラ属・ハゼノキ類・カキノキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3 ～ 4 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

地区	遺構	番号等	状態	種　類	備　考
Ⅰ区	SI002	炭1	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭2	破片	ツブラジイ	
Ⅰ区	SI002	炭3	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭4	破片	ツブラジイ	
Ⅰ区	SI002	炭5	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭6	破片	サクラ属	
Ⅰ区	SI002	炭7-1	破片	ハゼノキ類	AMS実施
Ⅰ区	SI002	炭7-2	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭8	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭9	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭10	破片	サクラ属	
Ⅰ区	SI002	炭11	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭12	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭13	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭14	破片	コナラ属アカガシ亜属	
Ⅰ区	SI002	炭15	破片	クリ	
Ⅰ区	SI002	炭16	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭17	破片	コナラ属アカガシ亜属	
Ⅰ区	SI002	炭18	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭19	破片	カキノキ属	
Ⅰ区	SI002	炭20	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭21	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭22	破片	スダジイ	AMS実施
Ⅰ区	SI002	炭23	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭24	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭25	破片	ツブラジイ	
Ⅰ区	SI002	炭26	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭27	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭28	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭29	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭30	破片	ハゼノキ類	
Ⅰ区	SI002	炭31	破片	ツブラジイ	
Ⅰ区	SI002	炭32	破片	スダジイ	
Ⅰ区	SI002	炭ベルトの中	破片	コナラ属アカガシ亜属	

表 11　樹種同定結果

・ツブラジイ（Castanopsis cuspidata (Thunberg) Schottky）　ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1 ～ 2 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3 ～ 4 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1 ～ 2 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3 ～ 4 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高。

ツブラジイとスダジイは、集合～複合放射組織の有無で区別しているが、ツブラジイの集合～複合放射組織の出現頻度は個体によって大きく異なり、ほとんど認められない個体もある。そのため、スダジイとした中には､集合～複合放射組織の出現頻度の低いツブラジイが混じっている可能性がある。本報告では、集合～複合放射組織が認められた個体をツブラジイ、認められなかった個体をスダジイとして報告する。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

散孔材で、道管の壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2-6 個が複合、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 3 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

・ハゼノキ類（Rhus）　ウルシ科ウルシ属

散孔材で、道管壁はやや厚く、横断面では楕円形、単独または 2 ～ 4 個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1 ～ 2 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

ハゼノキ類には、ウルシ属のうち、ハゼノキとヤマハゼが含まれるが、組織から区別できず、ハゼノキ類としている。

・カキノキ属（Diospyros）　カキノキ科

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または 2 ～ 4 個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1 ～ 3 細胞幅、10 ～ 20 細胞高。層階状配列は明瞭ではない。

4．考察

（1）住居跡の年代

住居跡は、出土土器などから、弥生時代前期後半と考えられている。炭化材 2 点の年代測定結果は、補正年代が 2,260 ± 20BP と 2,270 ± 20BP、暦年較正年代は cal BC393-210 と cal BC397-215 であった。福岡県内における弥生時代前期の土器付着物等を対象とした年代測定の値をみると、板付Ⅰｃ式で 2,520 ± 40BP、板付Ⅰｂ～Ⅱａ式で 2,540 ± 40BP、板付Ⅱｂ～Ⅱｃ式で 2,520 ± 40BP、板付Ⅱｂ式で 2,540 ± 50BP、板付Ⅱｃ式で 2,510 ± 40BP、夜白Ⅱｂ式で 2,510 ± 35BP、2,550 ± 40BP 等、弥生時代中期では城の腰式または須玖Ⅰ式古で 2,240 ± 40BP、須玖式甕棺で 2,230 ± 40BP、須玖Ⅰ式で 2,340 ± 50BP、須玖Ⅰ式新で 2,240 ± 40BP、須玖Ⅱ式新で 2,110 ± 40BP 等の補正年代値が報告されている（西本 2006）。

これらの事例と比較すると、今回の補正年代は弥生時代中期の年代に比定される可能性が高い。今後、出土土器も含めて測定値を評価することが望まれる。

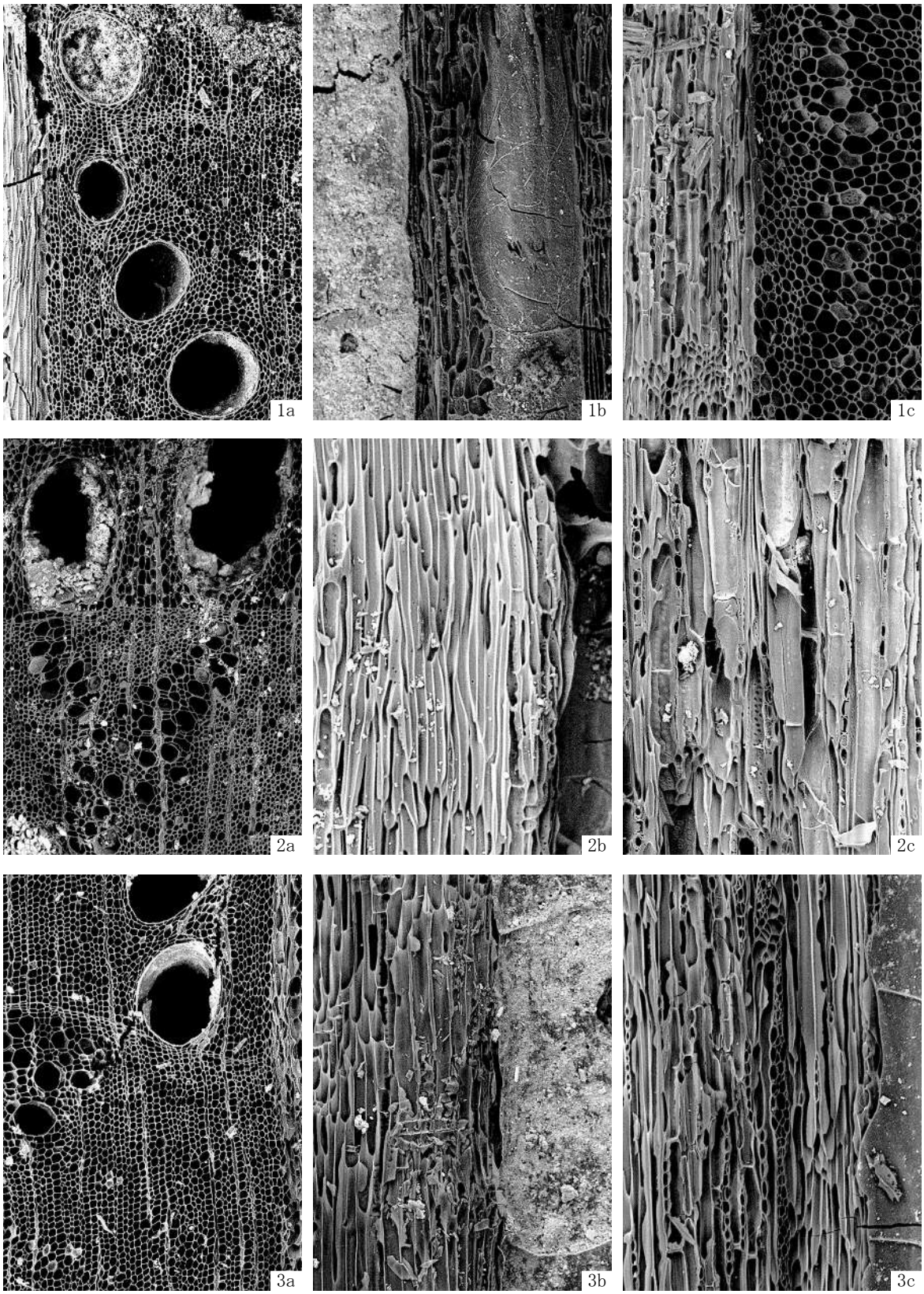
（２）木材利用

SI002 から出土した炭化材は、いずれも破片であり、元の形状を復元するのは難しいが、いずれの試料にも樹芯や樹芯に近い位置が認められないことから、分割材が利用された可能性がある。これらの炭化材は、全て広葉樹であり、ツブラジイ・スダジイを中心に７種類が認められた。いずれも比較的重硬で強度が高い材質を有しており、建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

ツブラジイとスダジイは、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種であり、主に沿海地の丘陵尾根筋に多い。その他の種類も、常緑広葉樹林を構成する種類や、その二次林を構成する種類である。ツブラジイやスダジイが多い背景には、周辺地域にツブラジイやスダジイを主とした常緑広葉樹林が見られ、木材の入手が容易であったことが推定される。

引用文献

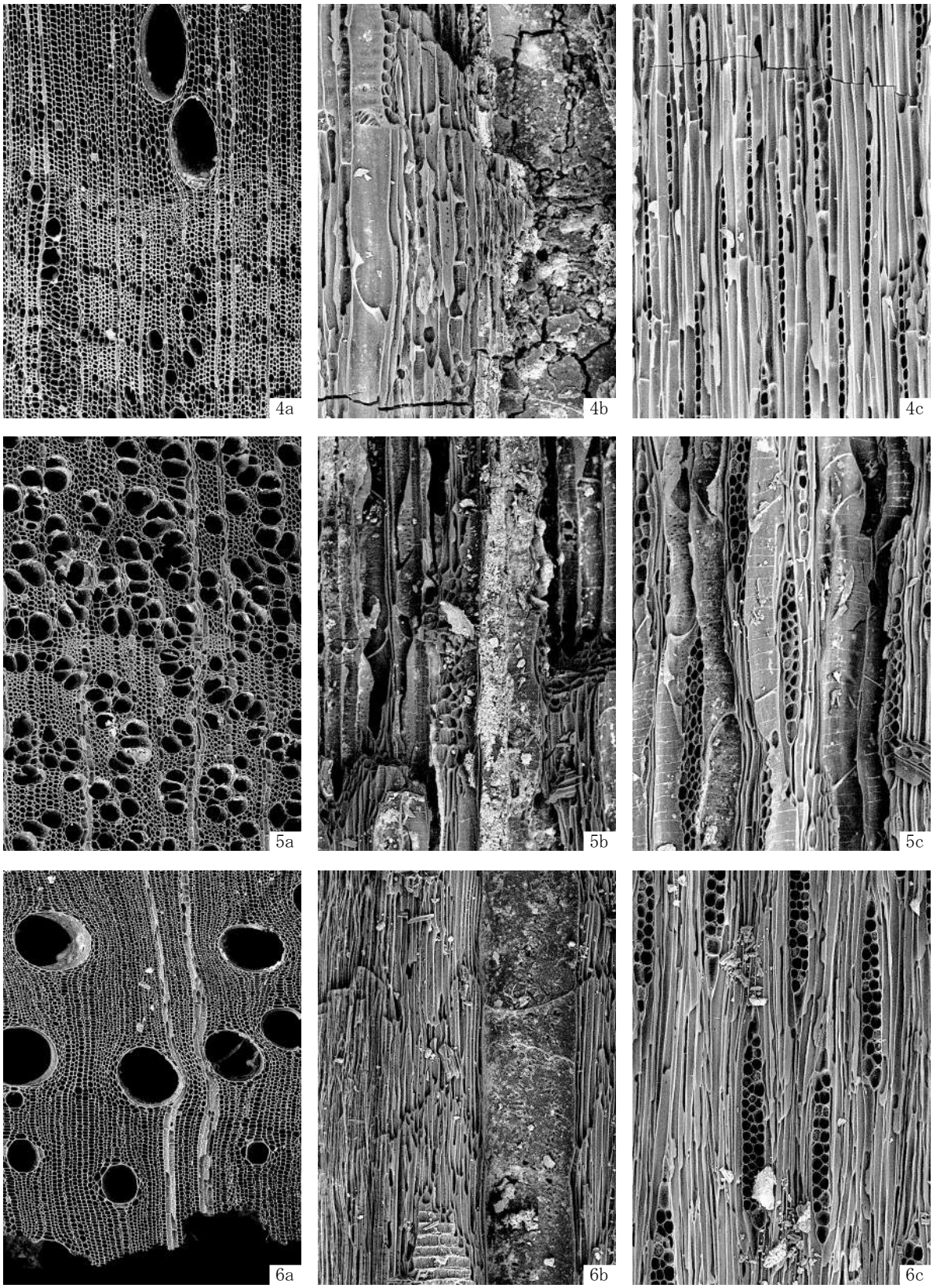
林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. コナラ属アカガシ亜属(住居1;炭14)
2. クリ(住居1;炭15)
3. ツブラジイ(住居1;炭4)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

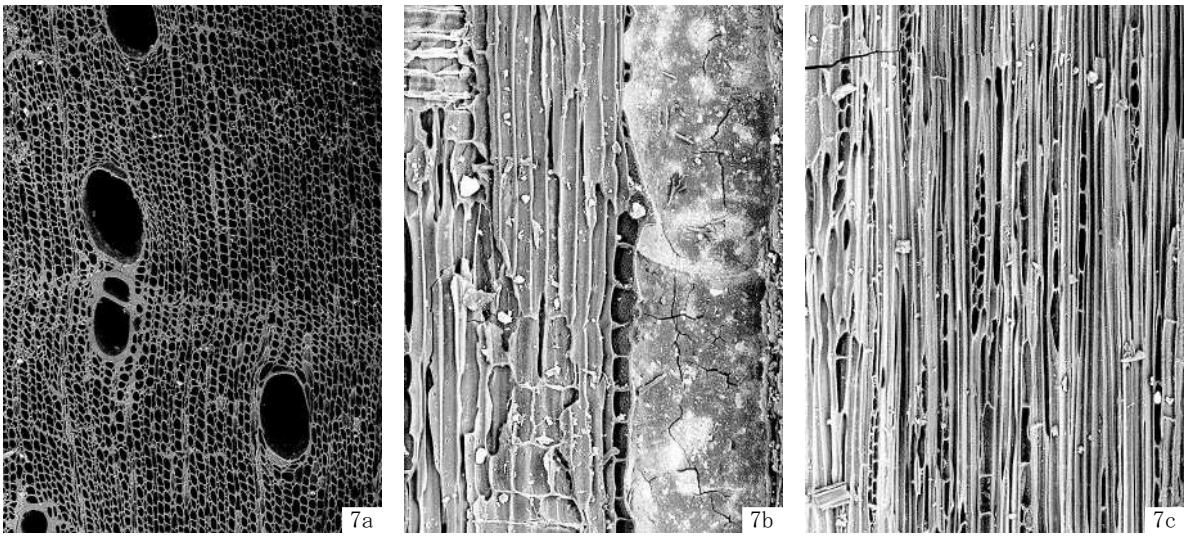
第48図　木材(1)



4. スダジイ(住居1;炭32)
5. サクラ属(住居1;炭10)
6. ハゼノキ類(住居1;炭9)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第49図　炭化材(2)



7. カキノキ属(住居1;炭19)
a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第50図　炭化材(3)

図　版

（1960 年 6 月 5 日撮影　国土地理院発行を転載）

竹並下ノ原遺跡の位置

図版２　　竹並下ノ原遺跡Ｉ区

Ｉ区西側（上が北）

Ｉ区西側反転後（上が南西）

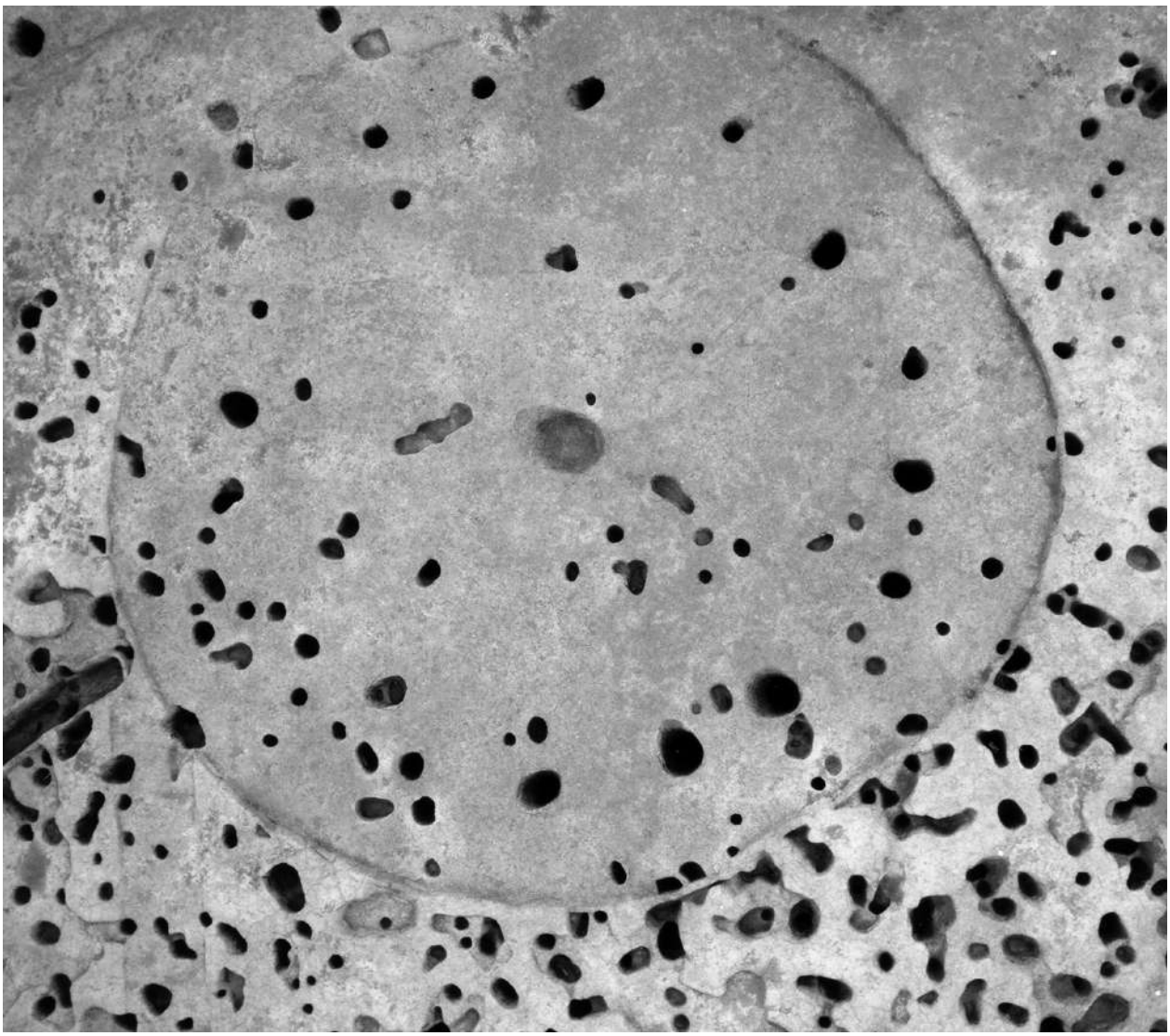
図版４　　竹並下ノ原遺跡Ｉ区

Ｉ区東側（上が北西）

Ⅰ区東側反転後（上が南西）

図版６　　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区

Ⅰ区からⅡ区を望む（東から）



1.　SI002（上が南東）

2.　SI002（南から）

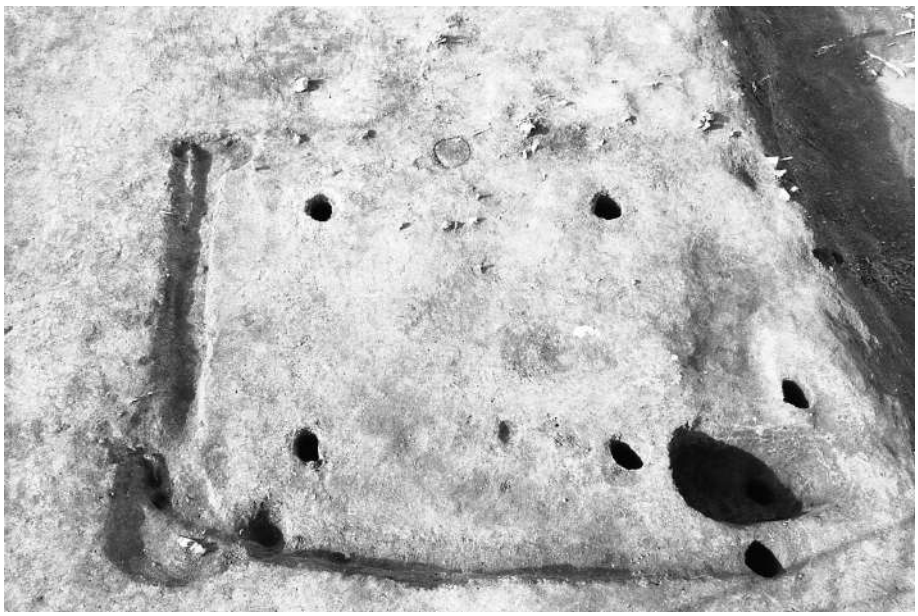
図版８　竹並下ノ原遺跡Ｉ区

1.　SI001（北から）

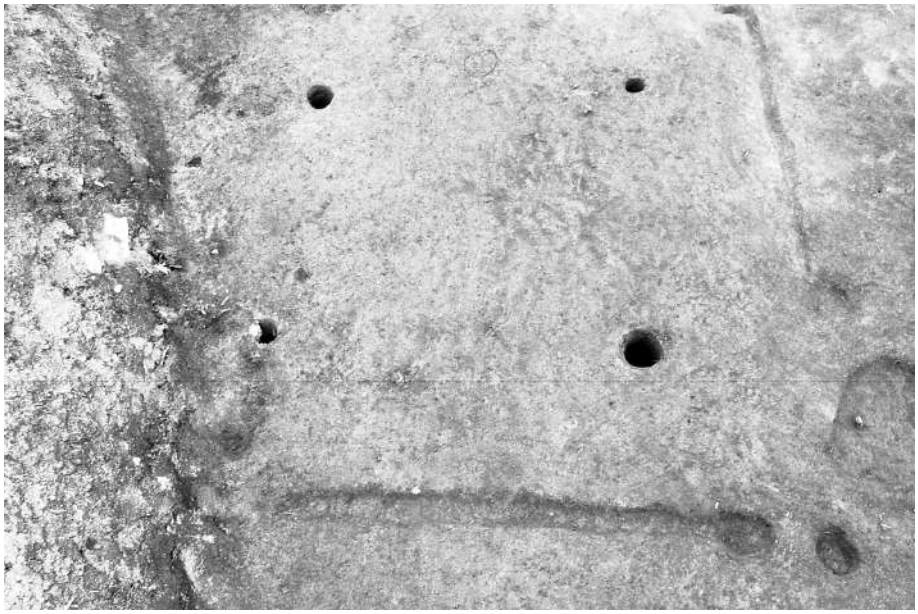
2.　SI003（西から）

3.　SI004（南から）

1. SI004 土器出土状況
（北から）

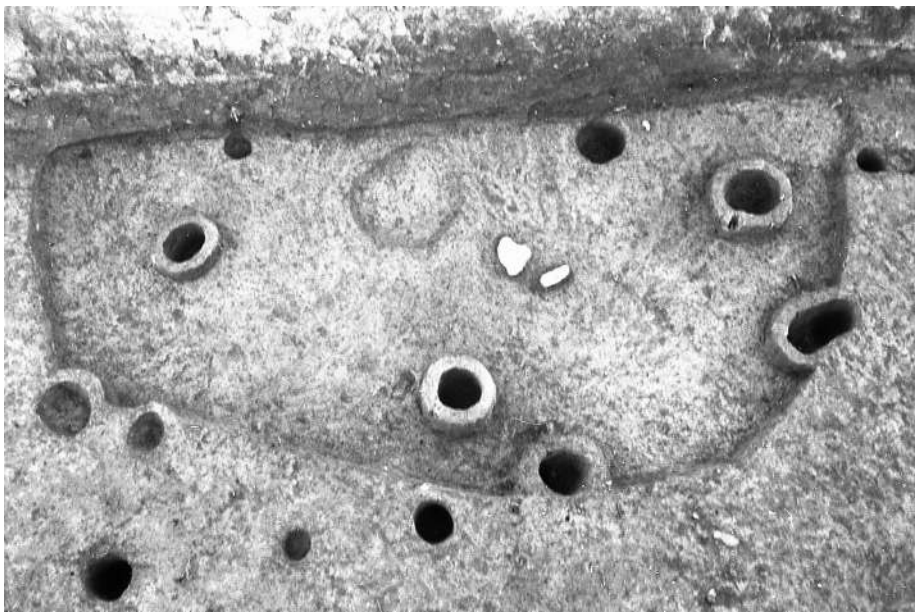


2. SI005（南から）

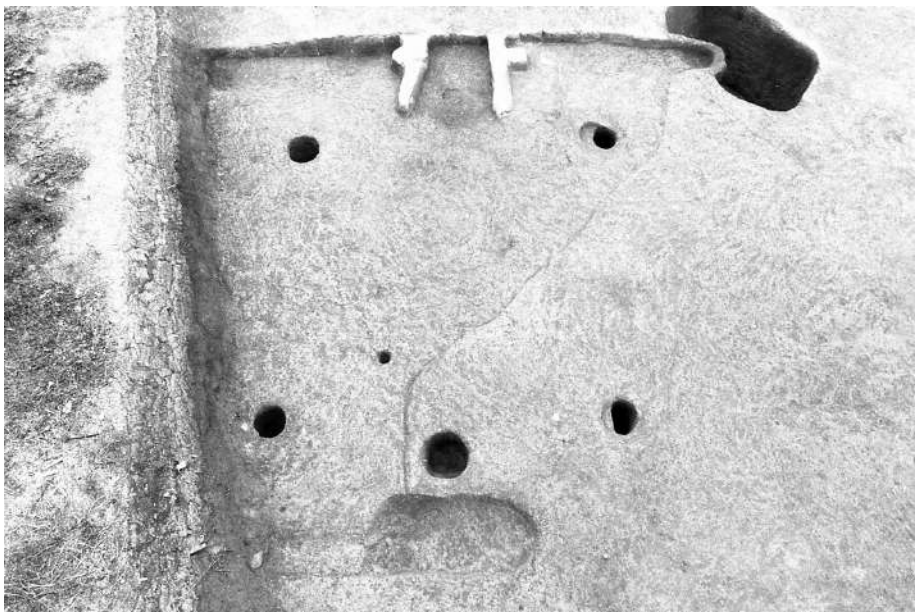


3. SI006（南から）

図版 10　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区

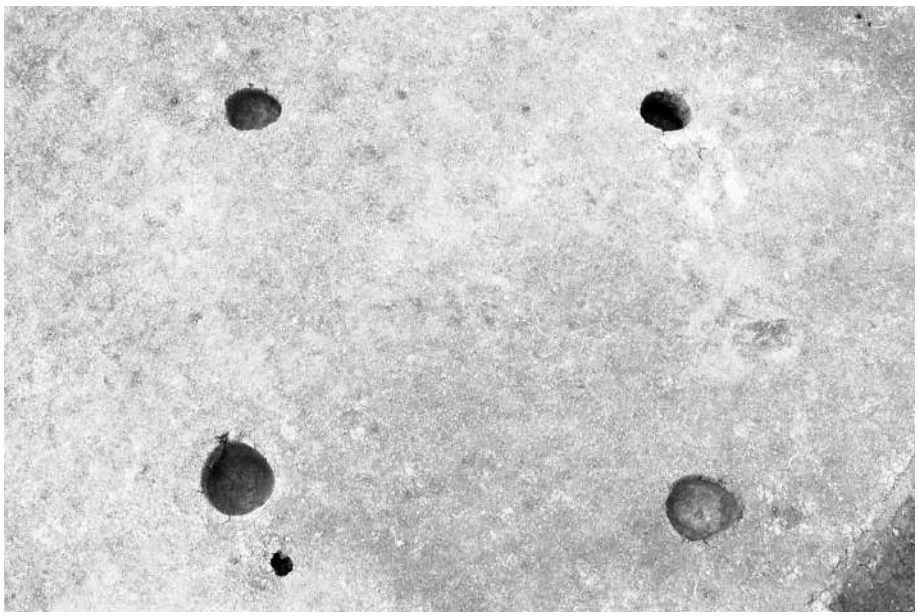


1.　SI007（西から）

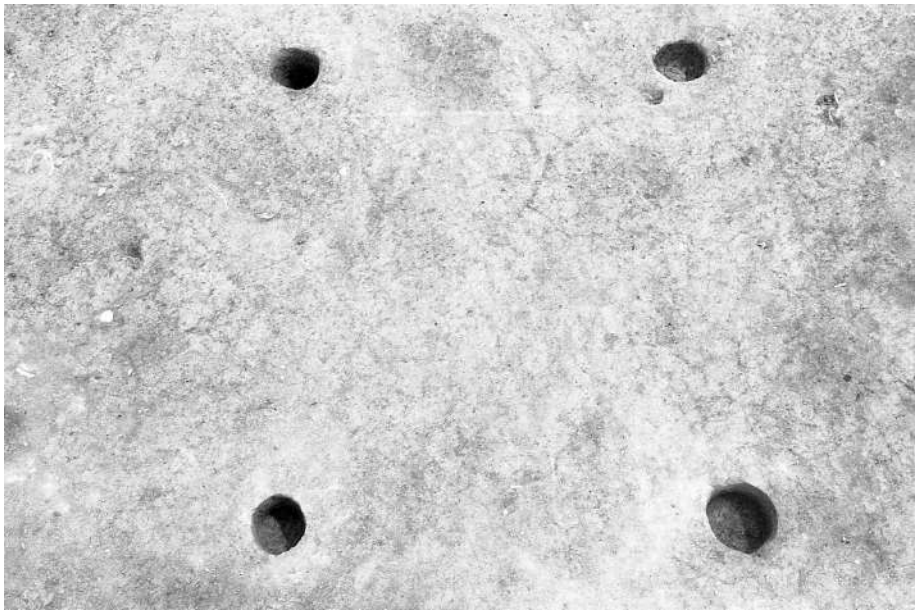


2.　SI009（南東から）

3.　SI009 カマド土器出土状況
（南東から）



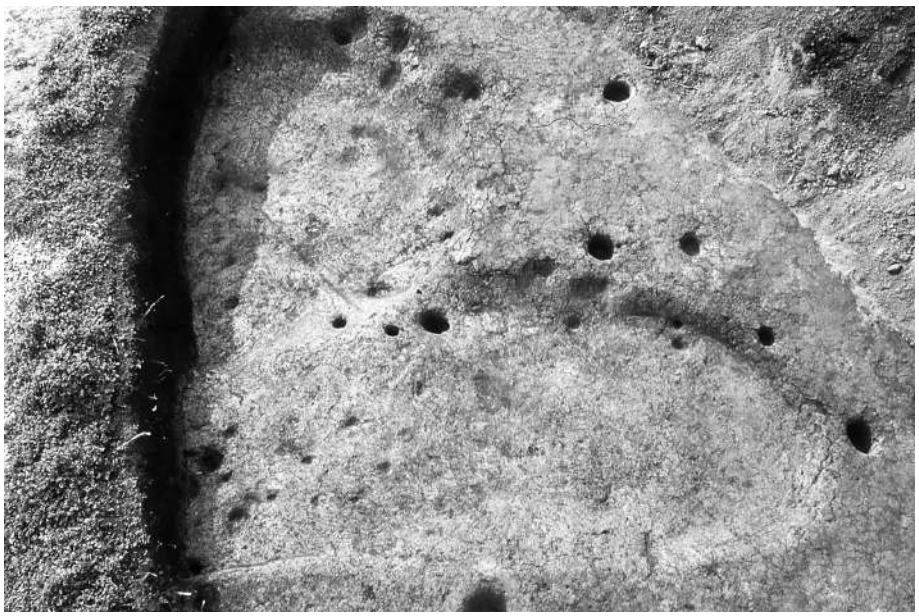
1. SB010（北から）



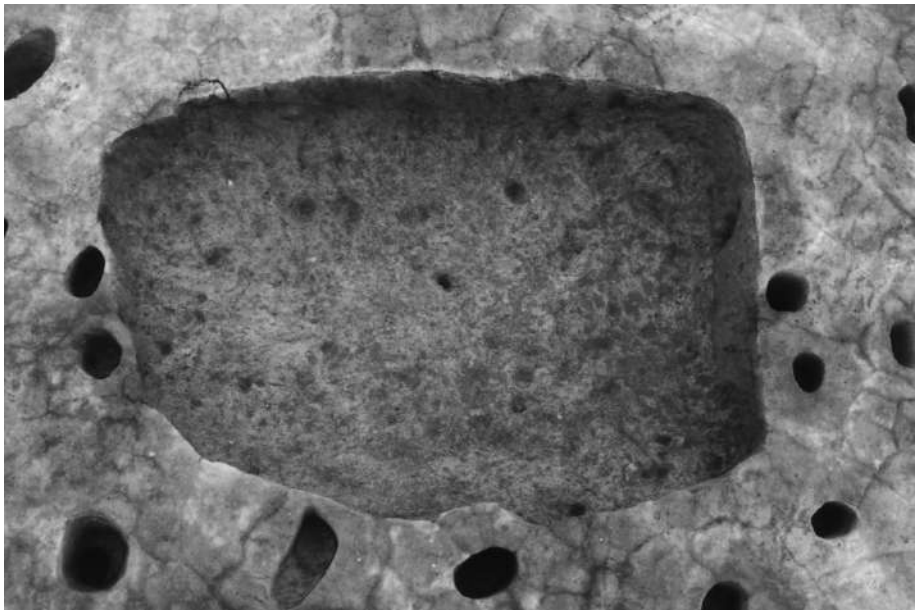
2. SB011（東から）

3. SK013（西から）

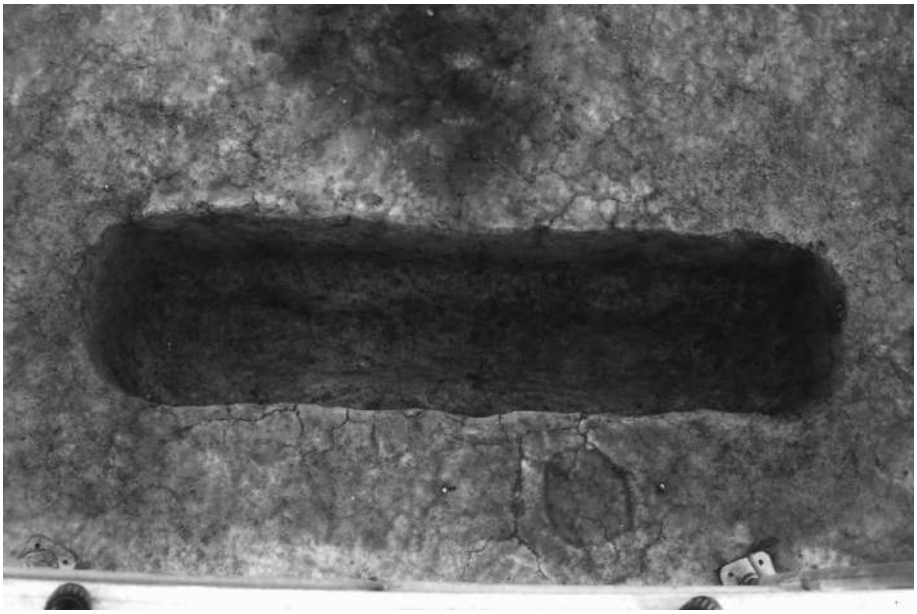
図版 12　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区



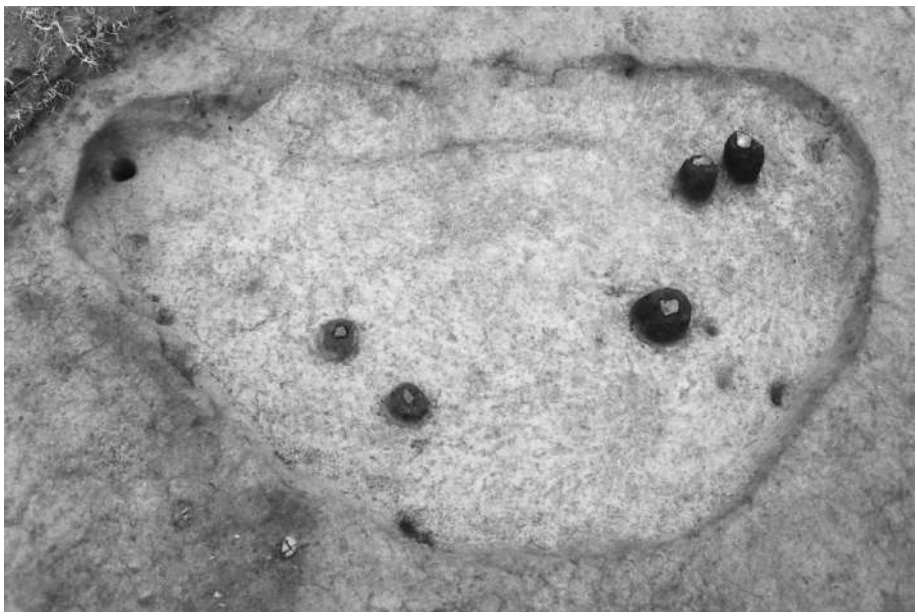
1.　SK016（東から）



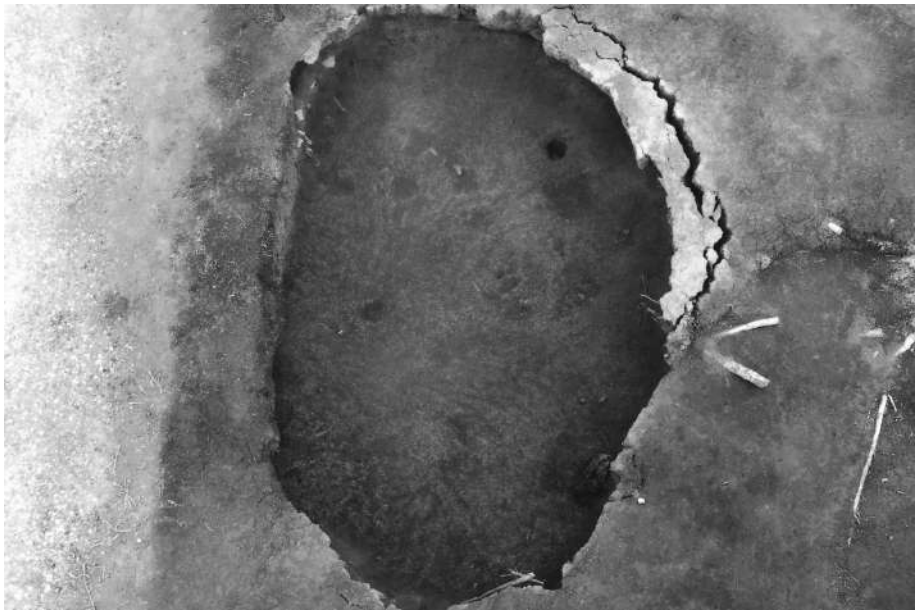
2.　SK017（南東から）



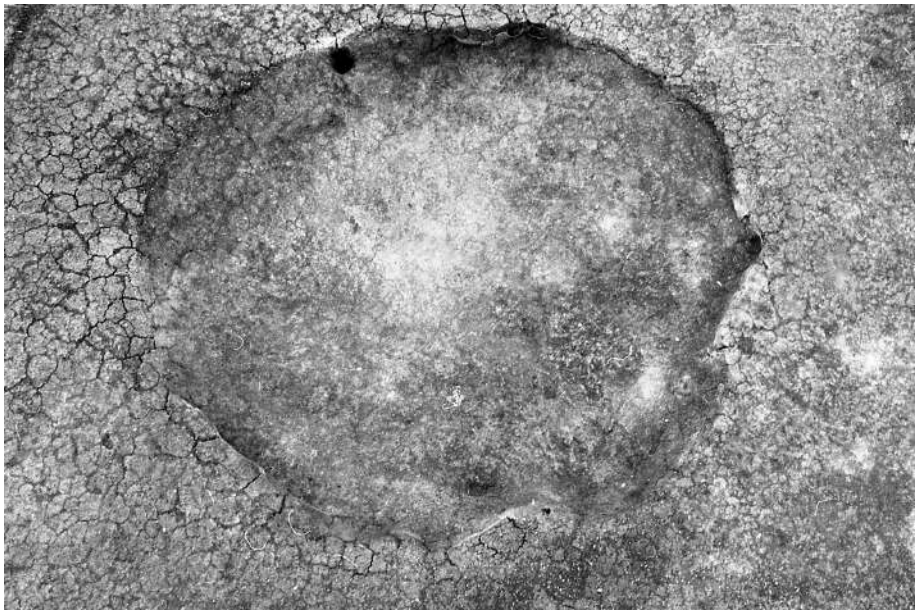
3.　SK020（東から）



1. SK022（東から）

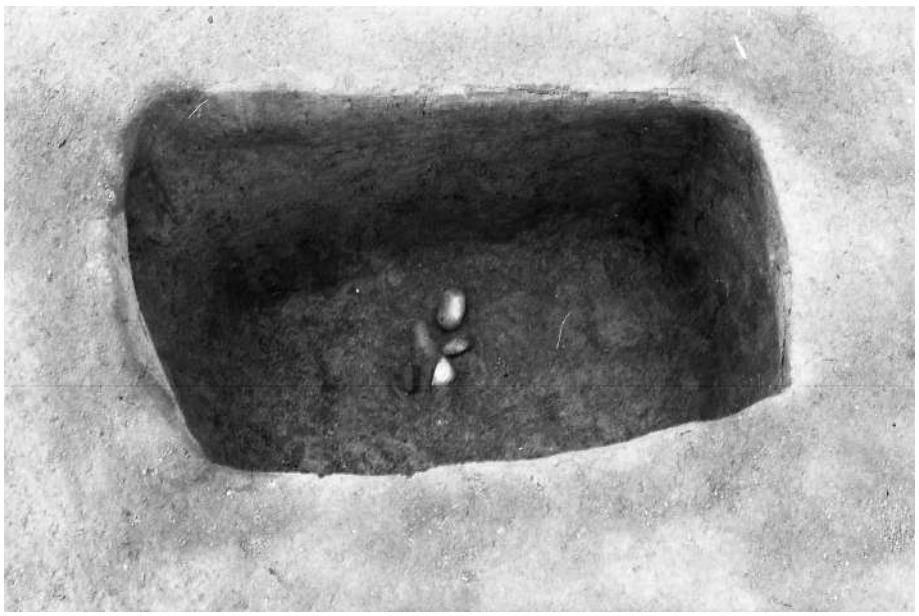


2. SK023（南から）



3. SK024（南から）

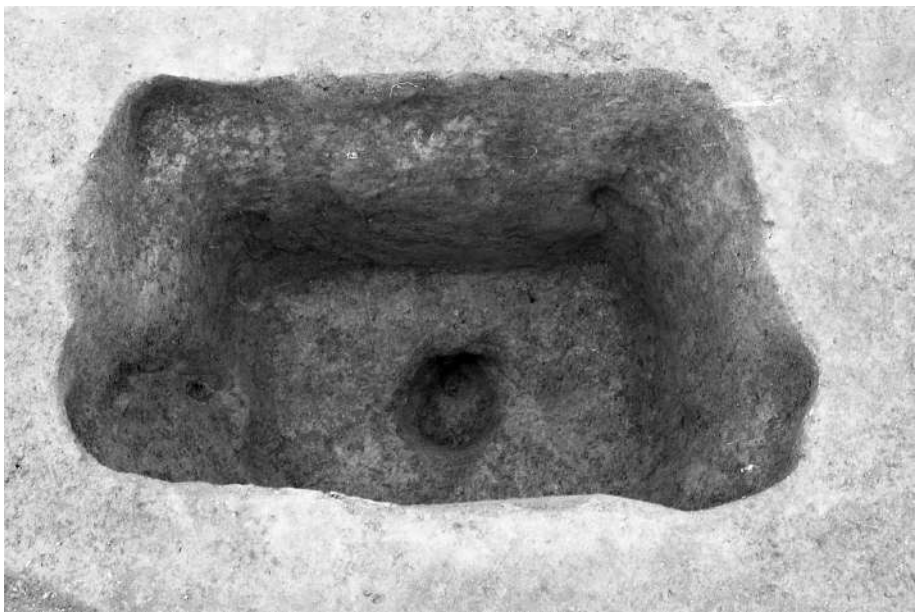
図版 14　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区



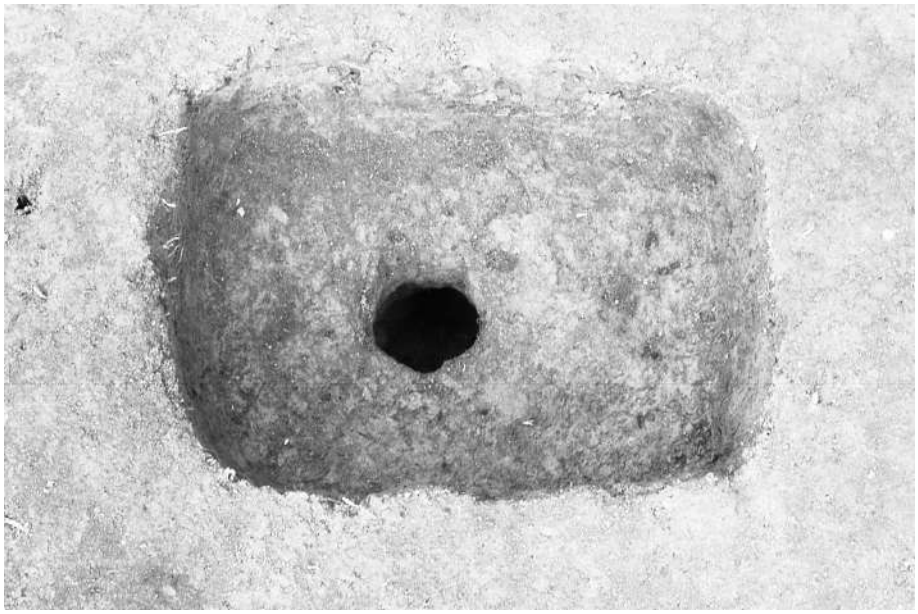
1.　SK026（北から）

2.　SK026（北から）

3.　SK027（西から）



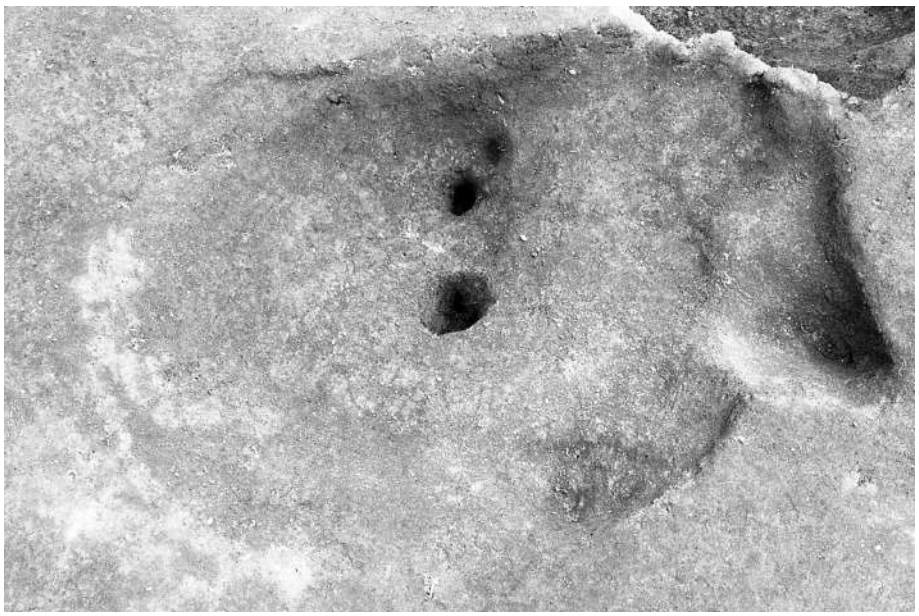
1. SK028（北から）



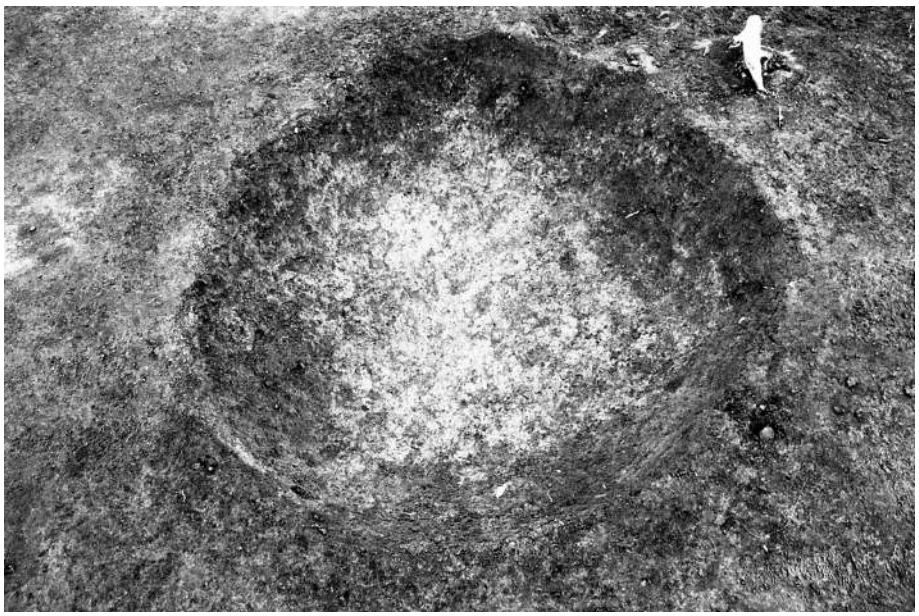
2. SK029（南東から）

3. SK030（西から）

図版 16　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区



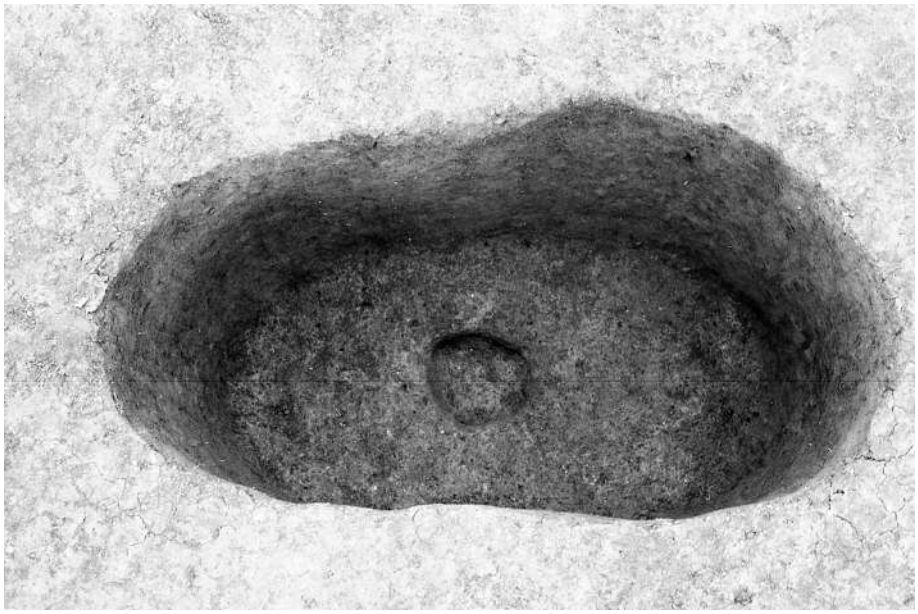
1.　SK031（西から）



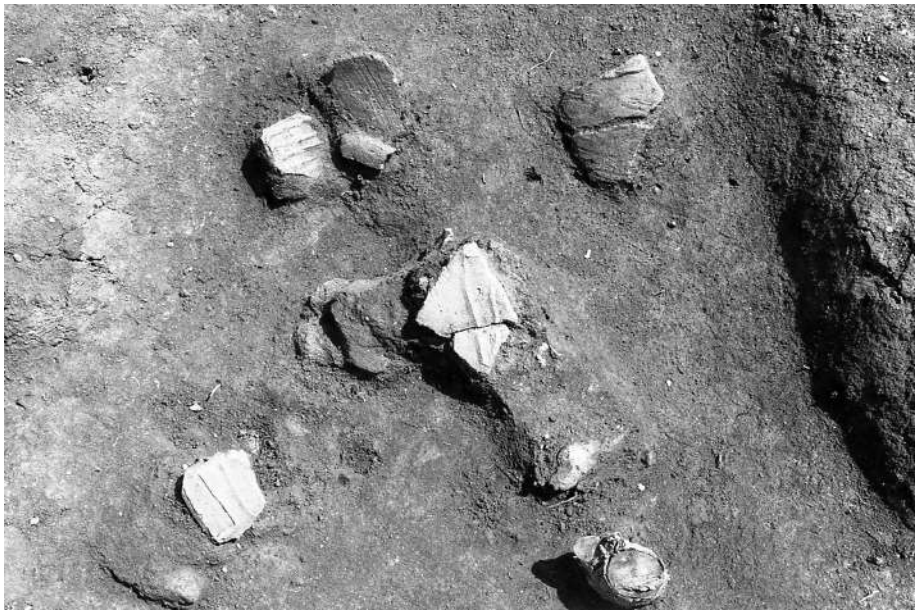
2.　SK032（西から）

3.　SK033（東から）

1. SK034（南から）



2. SK035（北西から）

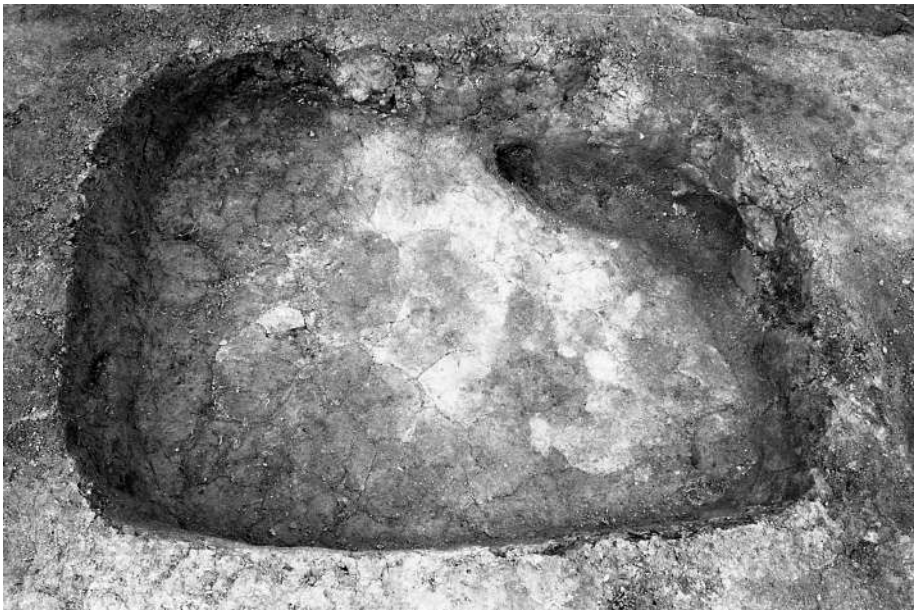


3. SK036 土器出土状況

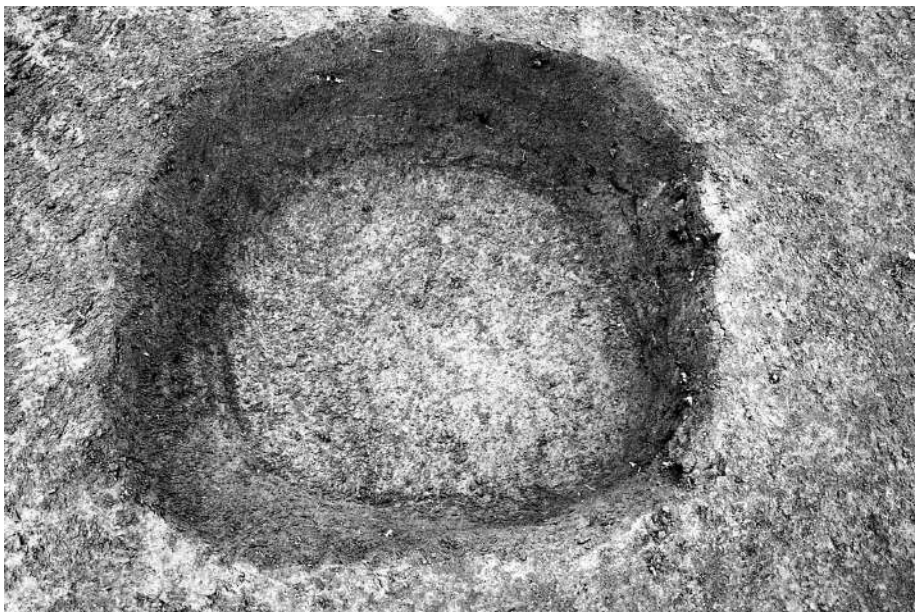
図版 18　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区

1.　SK036（南から）

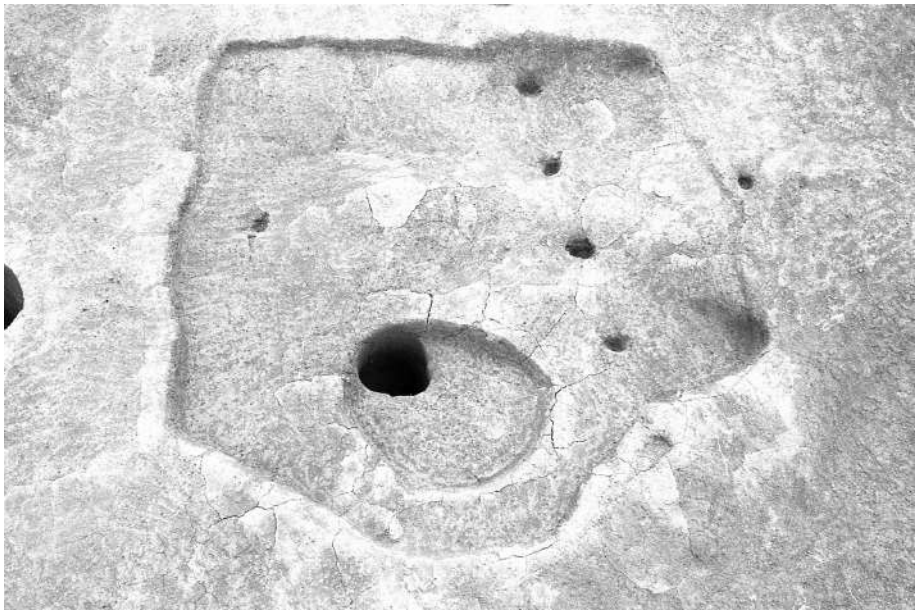
2.　SK037（南から）



3.　SK038（東から）



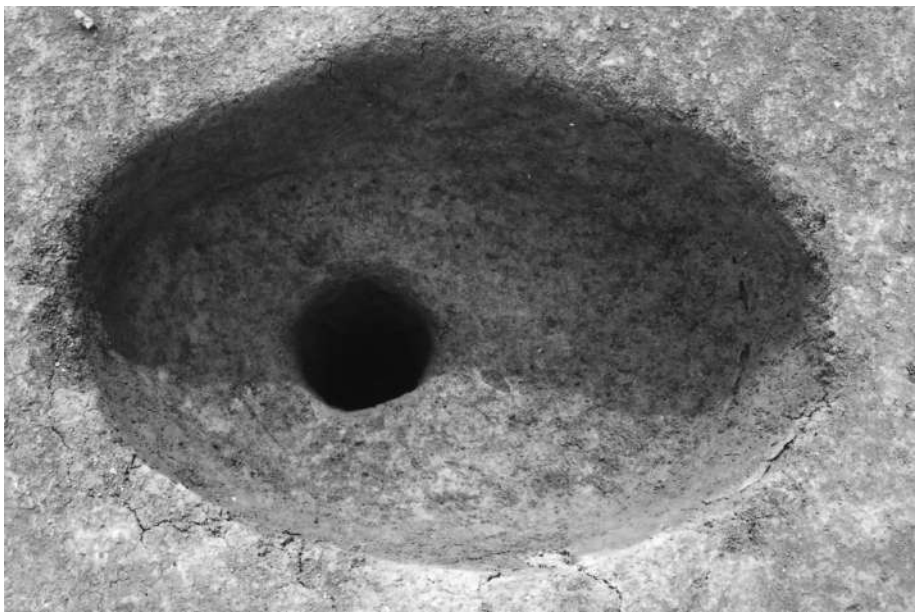
1. SK040（東から）



2. SK044（北東から）

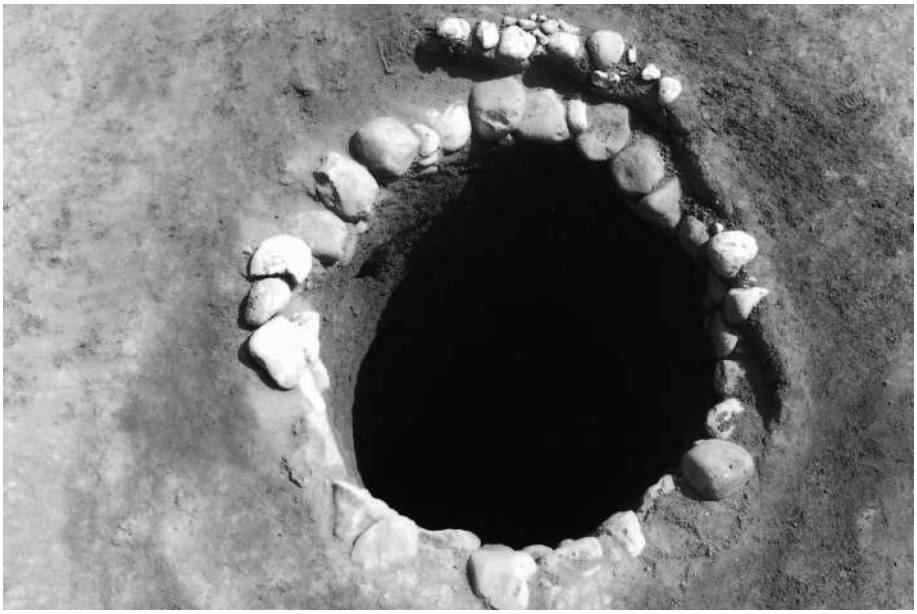
3. SK045（北から）

図版 20　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区

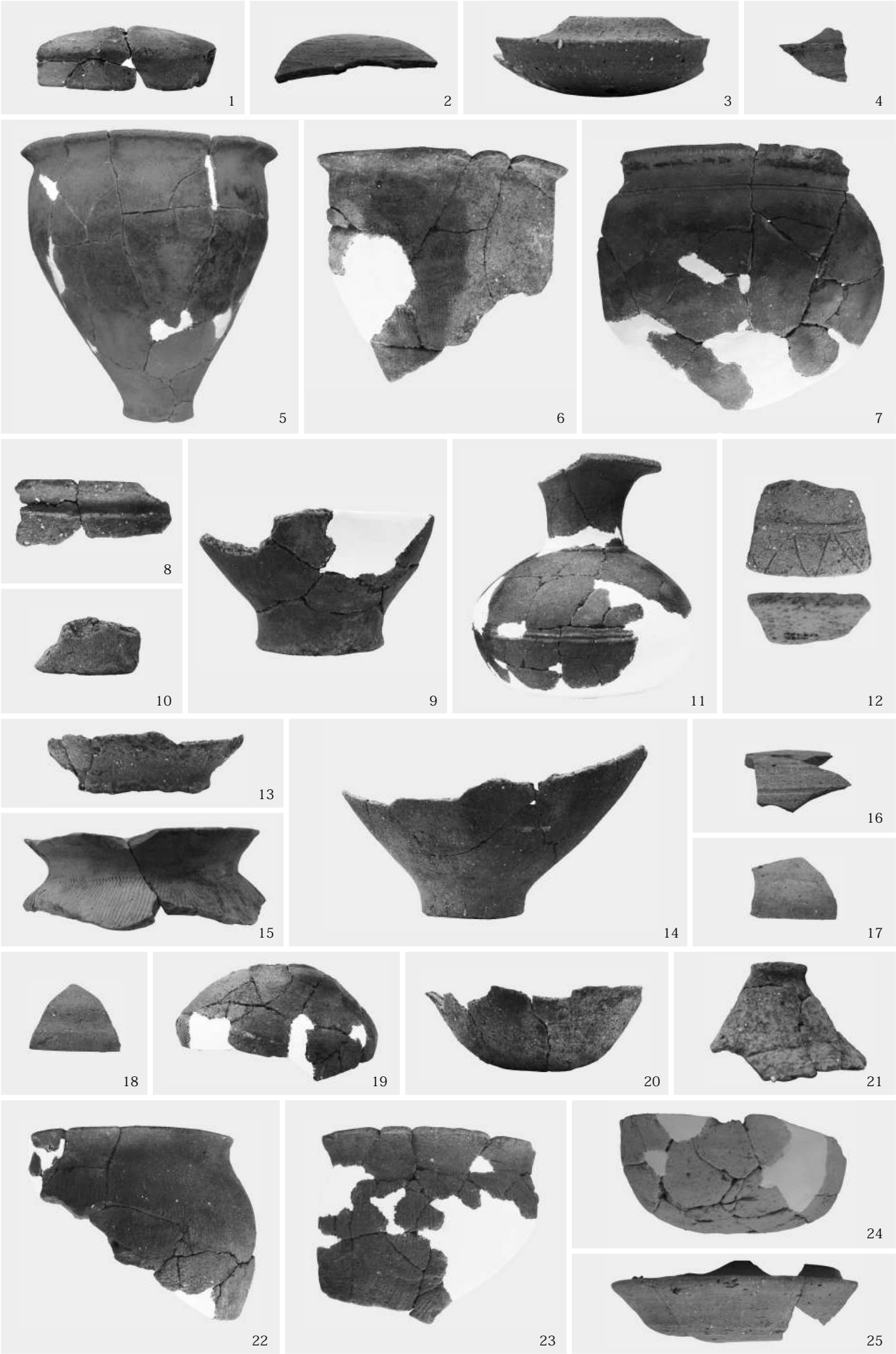


1.　SK046（北から）

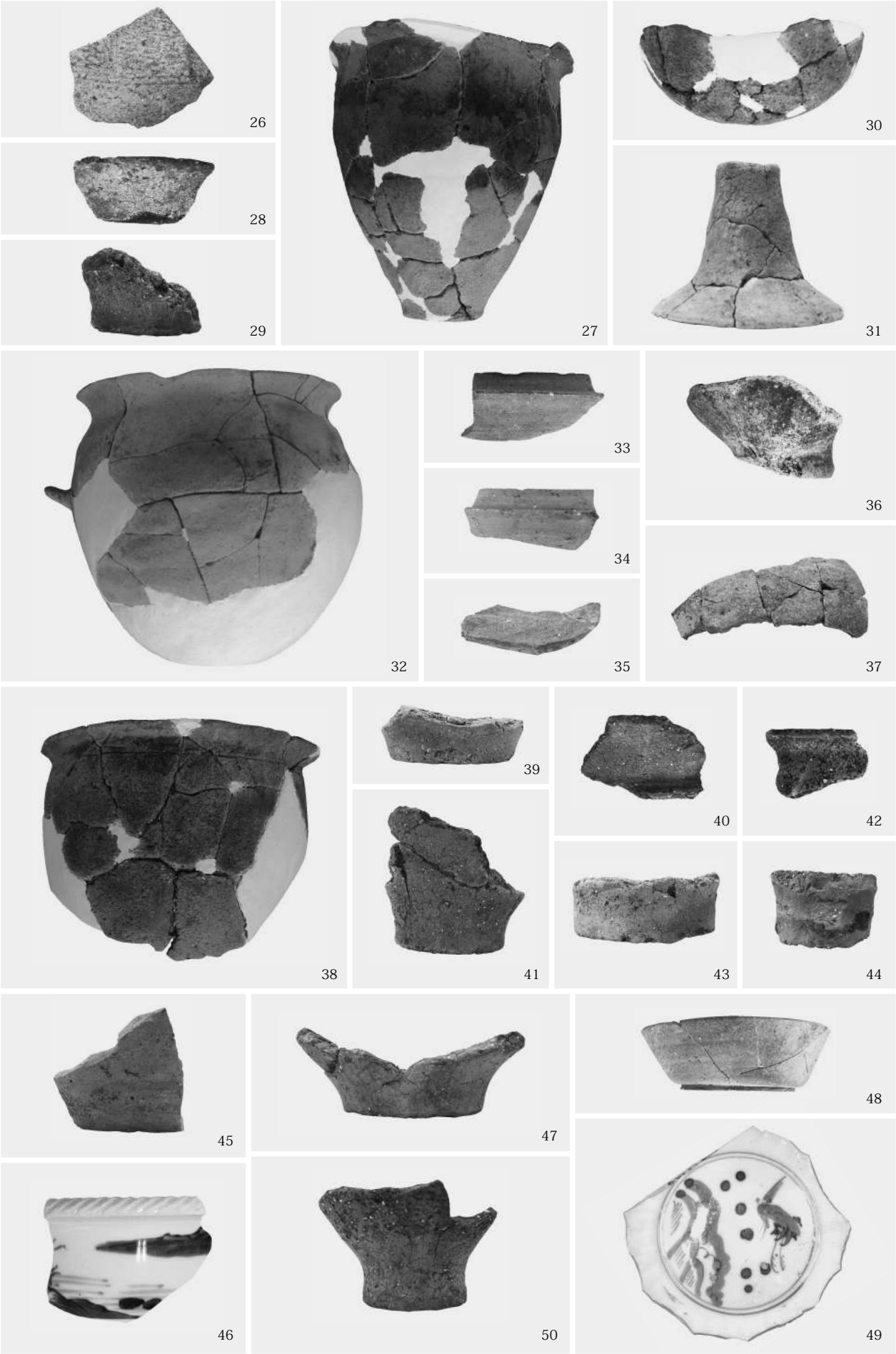
2.　SD050 土層



3.　SE053（北から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

図版 22　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区



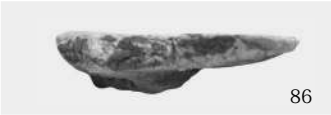
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

図版 24　竹並下ノ原遺跡Ⅰ区

82

83

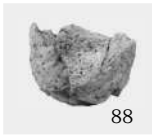
84


86

89

85

87


88

90

91

92

95

93

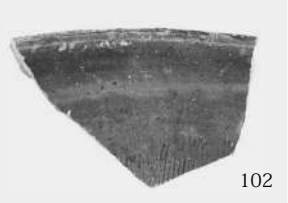
94

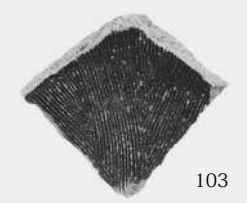
96

97

98

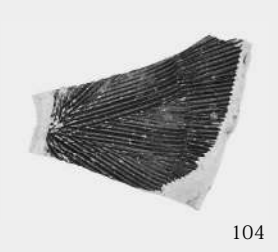
100


102


103

99

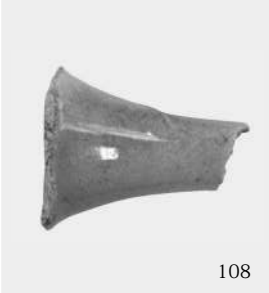
101


104

105

106

107

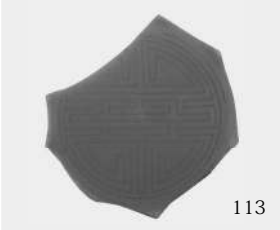

108

109

111

110

112


113

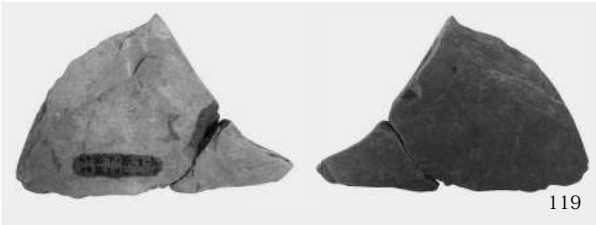
114

115

116

117

118


119

120

126

124

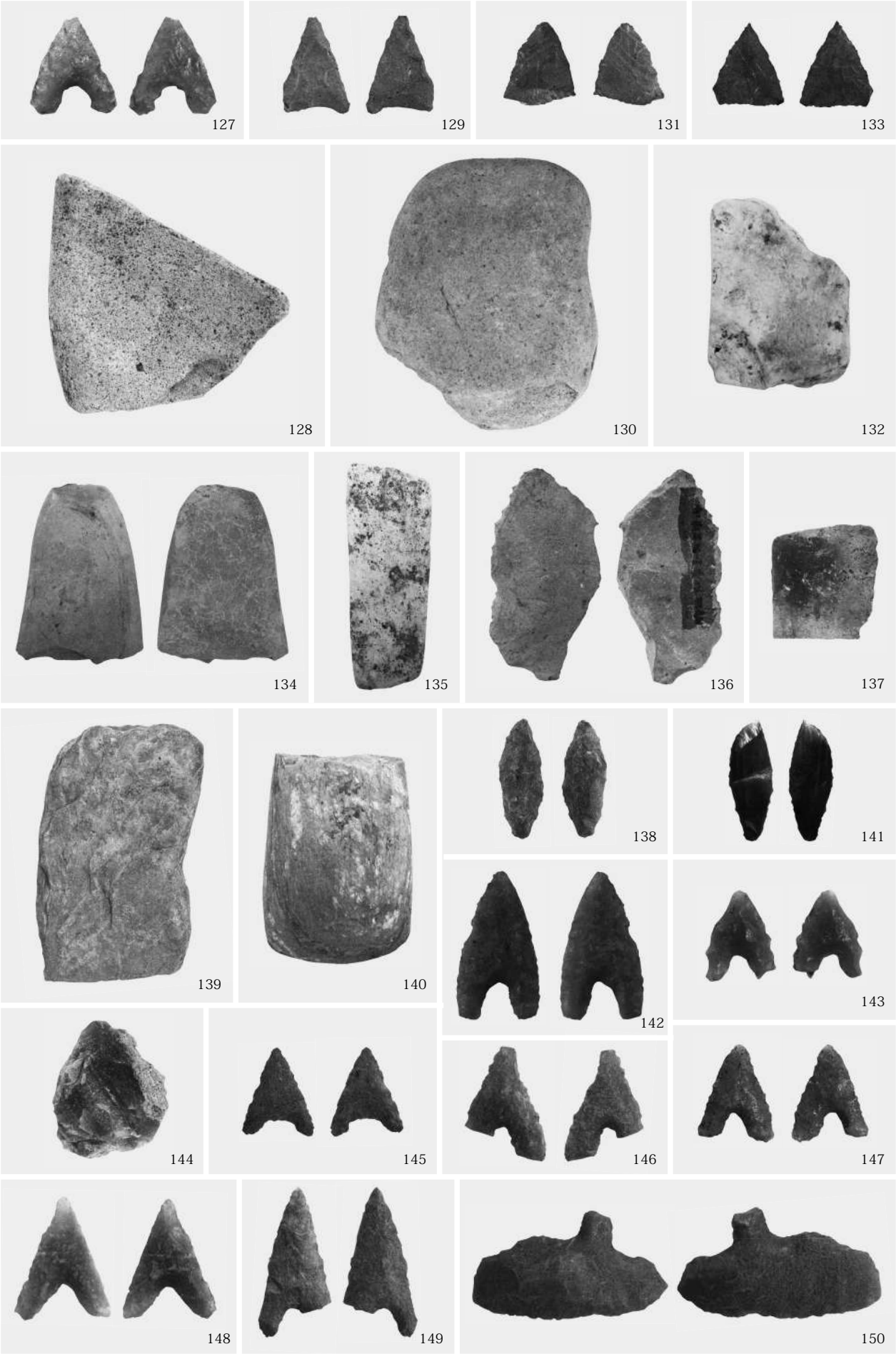
125

121

122

123

図版 26　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区



1.　Ⅱ区全景（上が西）

図版 28　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区

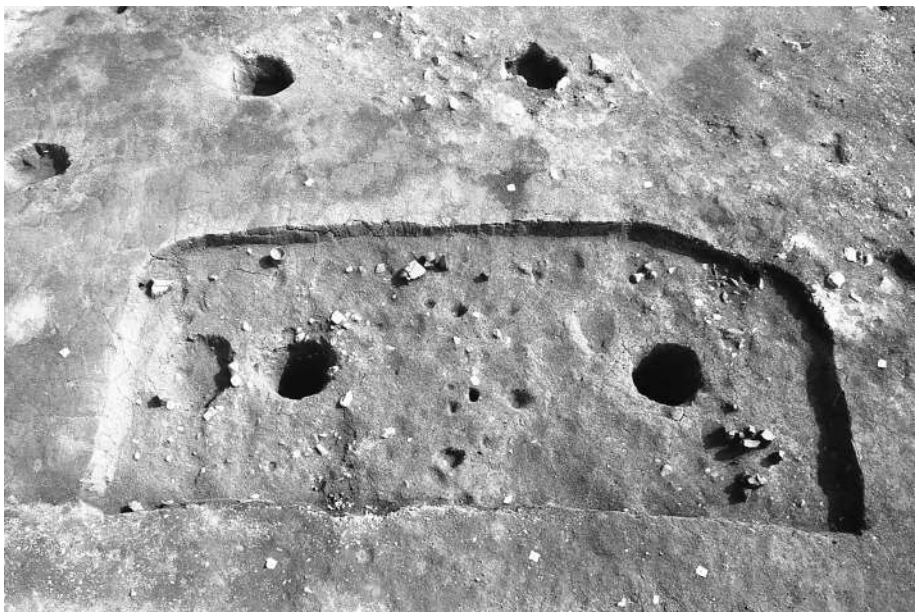
1.　Ⅱ区東側（上が西）

2.　Ⅱ区全景（東から）

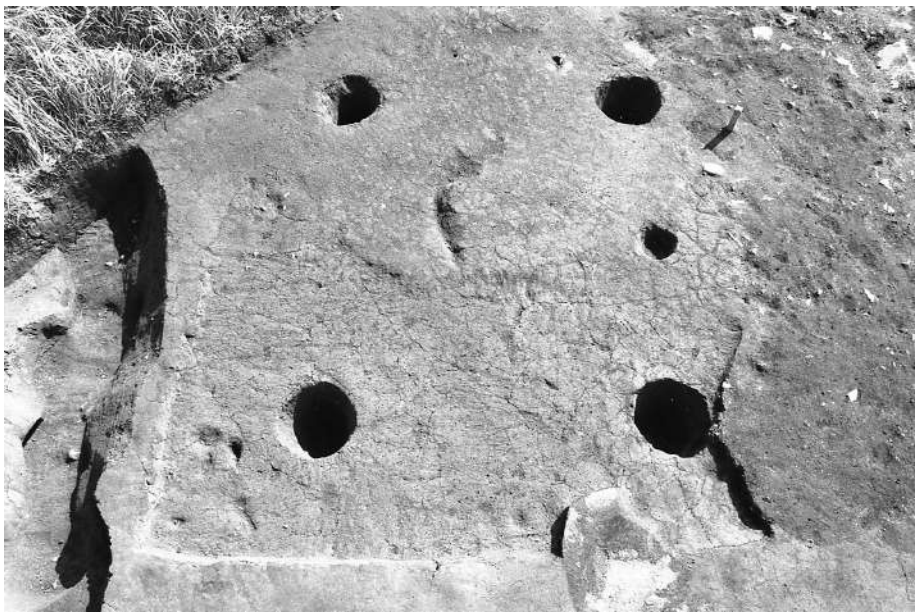
1.　Ⅱ区北側（西から）

2.　Ⅱ区東側（北西から）

図版 30　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区



1.　SI001（南西から）



2.　SI002（南西から）

3.　SB003 検出状況（南から）

1. SB003（南から）

2. SK004（東から）

3. SD005（西から）

図版 32　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区

1.　SD005 東側（北西から）

2.　SD005 ベルト A 断面
（西から）

3.　SD005 ベルト B 断面
（西から）

1. SD005 ベルト C 断面（西から）

2. SD005 ベルト D 断面（西から）

3. SD005 土器出土状況

図版 34　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区

1.　SD006 西側 (東から)

2.　SD006 東側（西から）

3.　SD006 ベルト A 断面
（西から）

1. SD006 ベルト B 断面
（西から）

2. SD007 北壁土層
（南から）

3. SD008（東から）

図版 36　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区

1. SD008 ベルト断面
（北西から）

2. SD008 北壁土層（南から）

3. SD009（西から）

1. SD010（南東から）

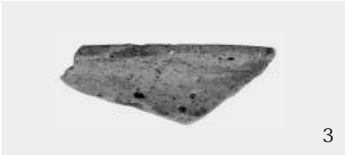
2. SA011（南東から）

3. 調査区土層

図版 38　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区

1

2


3

5

4

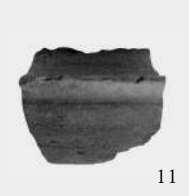
6

7

8

9

10


11

12

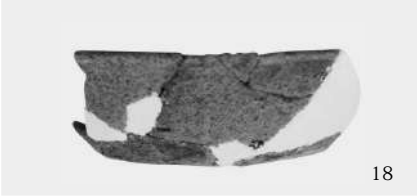
13

14

15

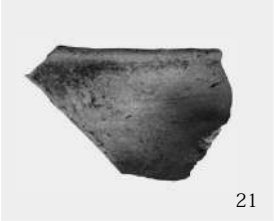
16

17


18

19

20

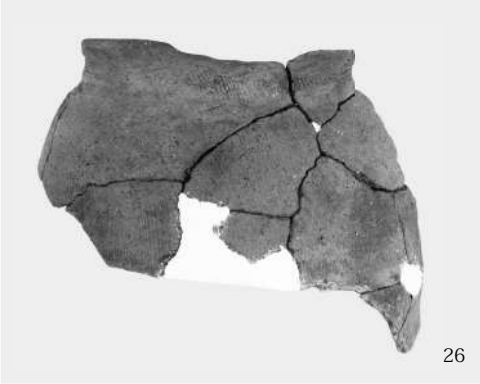

21

22

23

24

25

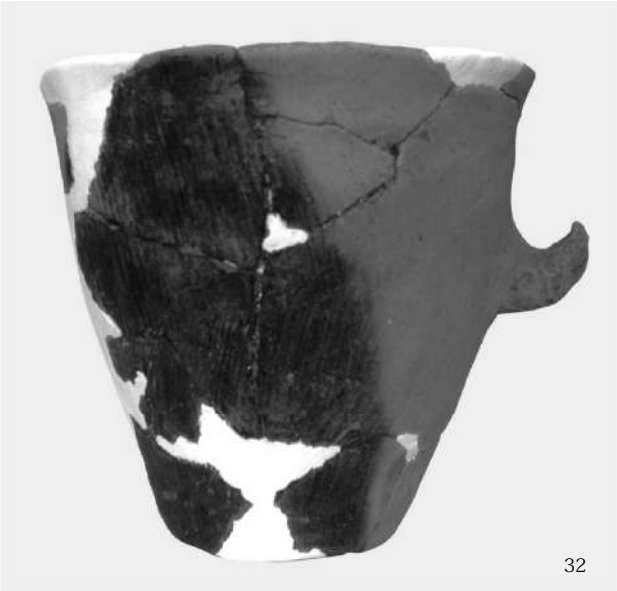

26

27

28

29

31


32

30

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

50

48

49

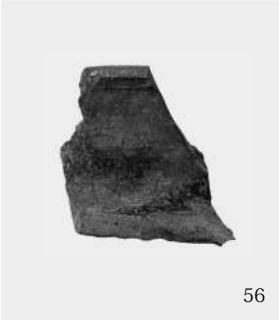
51

52

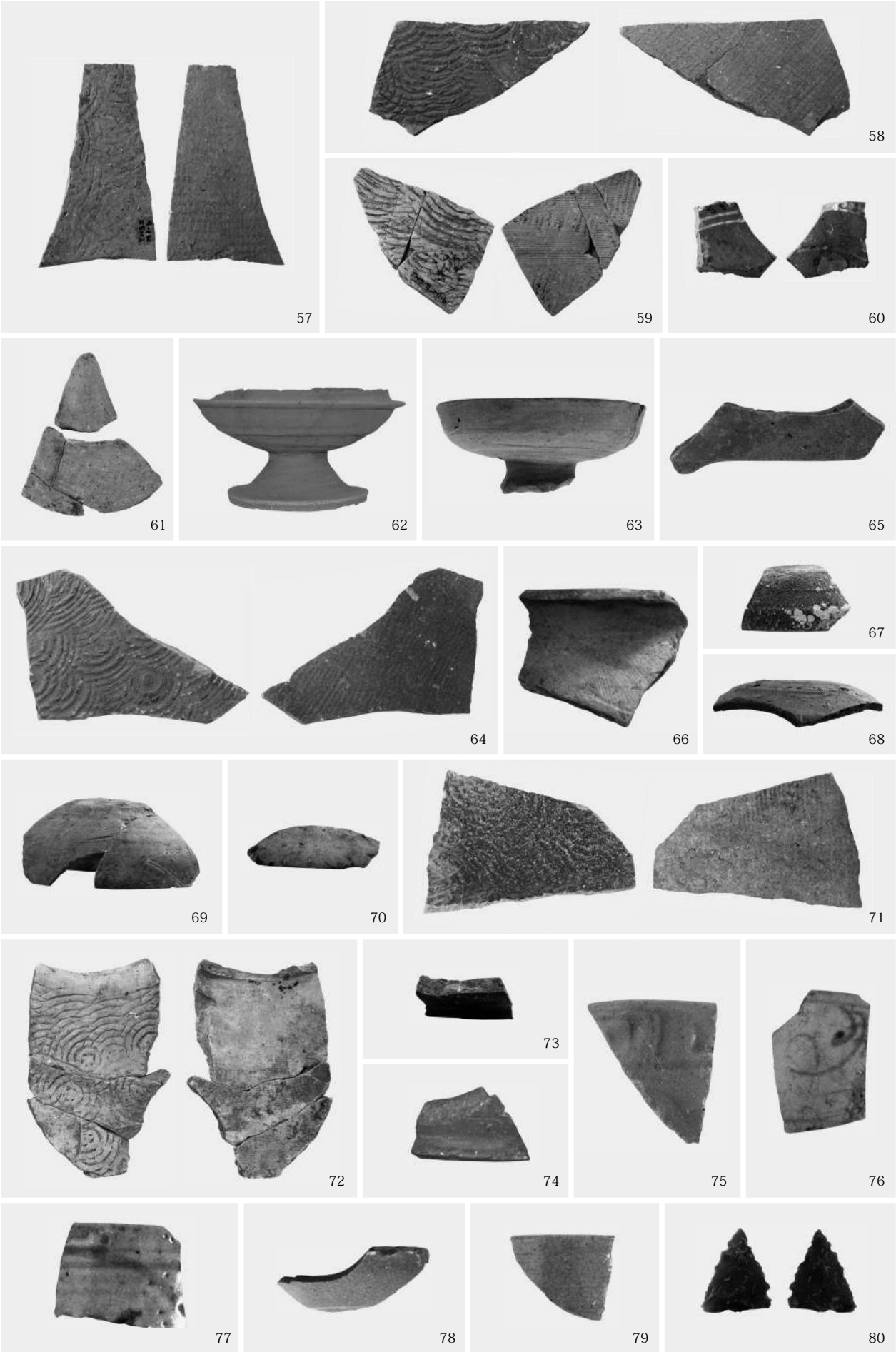
53

54

55


56

図版 40　竹並下ノ原遺跡Ⅱ区



報 告 書 抄 録

ふりがな	たけなみしものはるいせき
書名	竹並下ノ原遺跡
副書名	東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告３
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 55 集
編著者名	山口裕平
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒 824-8601　福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号　TEL 0930-25-1111　FAX 0930-25-1582
発行年月日	2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たけなみしものはるいせき 竹並下ノ原遺跡	福岡県行橋市 南泉 2 丁目 691、 同 4 丁目 635 ほか	402133	14075005	33° 41′ 58″	130° 58′ 47″	20100601 ～ 20110331	10,990㎡	東九州 自動車道 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下崎下ノ原遺跡	集落	縄文時代～江戸時代	竪穴建物、掘立柱建物 土坑、溝、井戸	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、陶磁器、 石鏃、石斧、石庖丁	

要約	京都平野のほぼ中央、標高 15 ～ 19m 前後の中位段丘に立地する。 縄文時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。 縄文時代は前期の落とし穴を確認した。続く弥生時代には前期末頃の竪穴建物を３軒調査したが、そのうちの１つは遠賀川以東で最大級のものである。古墳時代後期にはヒメコ塚古墳が築かれたが、その周辺には複数の竪穴建物があり、古墳を集落域に取り込んだ当時の集落設計を考えることができる。江戸時代には脇街道に接する位置にあたり、複数の遺構から多種多様の陶磁器等が出土した。

2015年（平成 27 年）3月31日　発行

竹並下ノ原遺跡

行橋市文化財調査報告書 第５５集

著作権所有　福岡県行橋市中央一丁目１番１号
発　行　　行橋市教育委員会

印　刷　　福岡県行橋市大橋三丁目１番１８号
はら印刷